

日中戦争の発火

昭和十二年七月、北平郊外で日中両軍が衝突すると、上海の対日感情は日増しに悪化し、すでに第一次上海事変後に結ばれた停戦協定に違反し、非武装地帯を要塞化していた中国軍は、上海市内に正規軍を投入してきた。そして日本海軍陸戦隊の宮崎一等水兵が行方不明となる（七月二十四日夜）。陸戦隊西部派遣隊長・大山中尉と斎藤一等水兵が中国兵に射殺される（八月九日）等の事件が相次ぎ、第二次上海事変となったのである。

中国軍の記録によれば、

わが最高統帥は平和はすでに最後の関頭に立ったので、起って応戦せざるをえず、ここに南京上海警備司令張治中に命じ、第三六、第八七、第八八の各師を率い、予定の包圍攻撃線に推進し、呉淞、上海の敵に対する包圍攻撃を準備させた。更に第五六師主力、第五七師の一部及び独立第二〇旅を推進し、長江方面に作戦して南下する敵の側面に迫り、有利な態勢をとらせることに決した。『支那事変陸軍作戦(1)』281ページ。以下戦史叢書と略す』

このころ、私は東京日日新聞（現・毎日新聞）の写真部に勤務していたが、暑中休暇で河口湖にいた。休暇が終わって出社すると、すでに同僚・先輩二名が北支へ、一名

「突如、中央軍攻撃開始

我陸戦隊直ちに応戦

便衣隊も蠢動・盛に発砲」

「上海本社特電」（十三日発）「北四川路の西側にあった八十七師の精銳は十三日未明租界攻撃の機を窺つてゐたが宝山路、横濱路角から突如前進を開始し、遂に同方面警備のわが軍に猛射を浴びせた、これがためわが軍もやむなくこれに応戦、遂にここに両軍は猛烈火蓋を切った、目下なほ交戦中なり、この急報に接したわが陸戦隊本部では直ちに出動した。」

*

中国軍の攻撃は地上軍だけに限らなかつた。

八月十四日「東京日日新聞」号外記事。

「敵飛行隊上海を大爆撃

暴虐！ 所嫌はず投弾

租界大混乱に陥る

敵飛

東京日日新聞

號外

避難邦人は恐怖の底

暴虐ノ所嫌はず投弾

租界大混乱に陥る

マルチン重爆十數機來襲

が上海へ派遣されていた。

新聞の報道によると、北支の日本軍の戦果はともかく、上海の海軍陸戦隊は危殆に瀕していた。

中国軍の兵力は、約三万人で虹口の日本租界を半円形に包圍した。これに対して日本軍は大川内伝七少將の指揮する上海特別陸戦隊二千三百人、漢口特別陸戦隊三百人。ほかに呉鎮守府第二特別陸戦隊五百三十九人。軍艦「出雲」陸戦隊二百人。第十一陸戦隊二百人を加えても合計三千五百余人に過ぎなかつた。

八月十五日、日本政府は「我が居留民ノ生命財産ト權益ヲ保護」するとともに「支那軍ノ暴戾ヲ膺懲シ以テ南京政府ノ反省ヲ促ス為今ヤ斷乎タル措置ヲトルノ已ムナキ至レリ」との声明を發し、上海派遣軍の派遣を決定した。

だが、派遣軍司令官・松井石根大將に与えられた任務は「上海附近ノ敵ヲ掃滅シ上海並其北方地区ノ要線ヲ占領シ帝國臣民ヲ保護スヘシ」という限定された消極的なもので、松井軍司令官も心中不満足であつたといわれる。

八月十三日の「東京日日新聞」号外は、

「今朝・上海で遂に日支交戦」

「上海本社特電」（十三日発）「十三日午前九時十五分陸戦隊本部後方において遂に日支両軍の交戦を見、目下盛んに銃声が聞えつつある。」

さらに八月十四日「東京日日新聞」夕刊には、

マルチン重爆十數機來襲」

「上海十四日発同盟」「マルチン重爆機十數機は午後四時廿三分黃浦江上よりわが軍艦〇〇（出雲）に対し編隊爆撃を敢行した、〇〇（出雲）以下各艦艇はこれに対し高射砲、機関銃の一斉射撃を開始し今なほ激戦中（午後四時廿七分）」

「上海十四日発同盟」「十四日午後四時四十二分わが方の高射砲弾を浴び西南方に退却中のマルチン重爆機は爆弾二個を支那人の避難三千余名の密集する新世界（競馬場付近西安寺路と西藏路の交叉点一带）付近に投下せるため支那民衆に多数の死傷者を出し、安全地帯と絶対信ぜられてゐたフランス租界、共同租界等ところ嫌はず爆撃を加えてゐる」

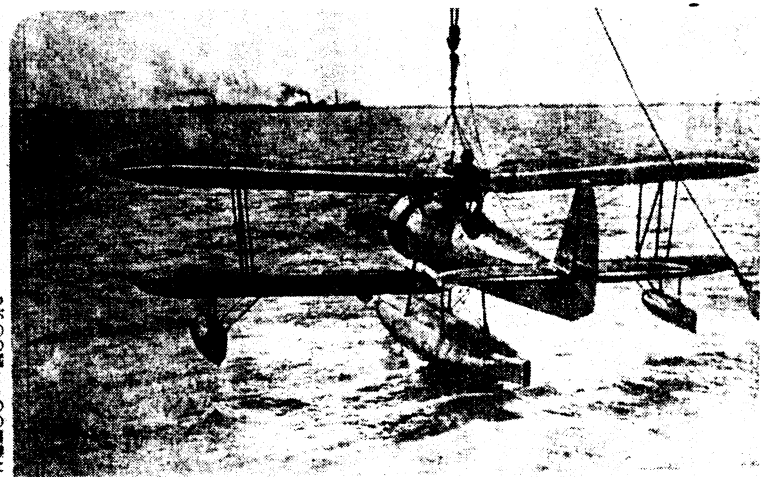
このほか、繁華街南京路のカセイ、パレス両ホテル近くに投弾、滅茶々に粉砕された窓ガラスで、宿泊中の外国婦人が負傷したりした。

このような中国空軍機の攻撃に対して、わが方は軍艦に搭載していた艦載機で反撃するしかなかった。艦載機といつてもカタパルトを使用せず、フロートの付いた機をデリックで水面に下ろして、水上を滑走した後に飛行するものである。フロートがあるために飛行中の性能は鈍重である。しかし、

「上海十四日発同盟」「十四日午後四時卅分頃の空中戦に

勇躍・任務に就く

わが〇〇艦より〇〇艦機に
向ふわが〇〇機・本誌特派員
撮影



黄浦江上に吊り下ろされる艦載機。(9月6日 東京日日新聞掲載)

おいてわが〇〇艦載機は敵機一台を射落した。」

右の記事が八月十四日「東京日日新聞」号外に掲載されていた。こうした戦果があったとしても、上海を飛行圏内に持つ中国空軍基地がある限り、中国空軍は跳梁をほしきままにすることができるところが八月十六日「東京日日新聞」号外は、

「我が海空軍・憤然大遠征

堂々数十機の大編隊

杭州・南京・南昌爆撃

敵空軍根拠地を潰滅」

〔上海本社特電〕(海軍武官室午後六時半発表)

一、十五日午前十時わが海軍航空部隊は銀翼数十機を連ね杭州を空襲壮絶なる空中戦を演じ敵の戦闘機約十機を撃破し地上飛行機全部を撃破せり

一、正午ごろ海軍〇〇空襲部隊は猛烈なる悪天候を冒し支那海の怒涛数千キロの長距離を突破暴風雨中の南昌(註)支那空軍の最大根拠地)を空襲し重爆弾数十個を投下折柄地上に待機中の敵機数十機を撃破何れも無事帰還せり

一、十五日午後零時過ぎわが海軍〇〇空襲部隊は編隊をもって敵の首都南京を爆撃し飛行場並に政府各機関を爆撃多大の損害を与へた、敵は無電台を通じSOSを発し各地に応援を求めてゐたが、情報によれば蒋介石は周章

狼狽し首脳部と謀議中と伝へらる、なおわが飛行機は全部無事帰還せり。」

渡洋爆撃を行ったのは中型攻撃機(九六式陸上攻撃機)で、爆弾搭載重量〇・八トン、最大四、五〇〇キロの航続力を有する最新式の双発機であった。

毎日新聞発行の『別冊一億人の昭和史「日本航空史」』の中の、「象徴的な長征」〈渡洋爆撃〉新井謹之助筆によれば、

「昭和十二年八月十四日――」。

暮れていく東シナ海は、大型台風のまっただ中にあった。

乱れ飛ぶ黒雲、翼をたくま豪雨。荒天をついて中国本土をめざし、ごうごうと飛びつづけるのはこの年、三菱新型エンジン「金星」の開発によって量産に入った双発の九六式陸上攻撃機(愛称中攻)の編隊群である。

日中戦争発生とともに木更津・鹿屋(かのや)両航空隊(ともに前年四月発足)を併合して第一連合航空隊(戸塚道太郎大佐)が編成されてから一カ月。いま作戦行動にはいったのは台北に進出した鹿屋隊だ。その作戦とは――いわゆる渡洋爆撃である。

乗員七人の中攻、重量八トン、最高時速三八〇キロ、行動半径は一、〇〇〇キロ。一連空司令・戸塚大佐の命をうけた爆撃隊は六時半寛橋、杭州、番司の各飛行場、七時半広徳飛行場を襲い、激烈な中国(蒋介石軍)戦闘機二五〇の抵抗を受けながらも、低空からの集中攻撃を決行し、地上機、格納庫をはじめとする中国

軍施設に相当の損害を与えて帰投した。

翌十五日は早朝から正午に及ぶ出撃、こんどは九州・大村からの木更津隊だ。目標は南京、南昌、紹興の各都市空軍基地。前日につづく悪天候下に展開された爆撃行の経過も、全く同様であった。」

すでに上海で取材している本社の特派員から、生々しい戦争写真が送られて来ていた。中国の大軍と死闘をする海軍陸戦隊の姿だった。

戦況は刻一刻と逼迫していたため、上海派遣軍の第三師団、第十一師団の両師団は応急動員のまま内地を出発したが、先遣隊は軍用船の準備を待てず、異例の軍艦による輸送であった。

搭載力を大きくするため、特に「陸奥」「長門」などの戦艦をはじめ、重巡洋艦「妙高」「青葉」「羽黒」「足柄」「那智」「愛宕」、軽巡洋艦「多摩」「五十鈴」「川内」「那珂」など。軍艦を輸送船に代用して、陸兵をハンモックで運ぶなど空前絶後のことで、当時の戦況がいかに逼迫していたか、よく物語っている。

かくして第三師団は呉淞(黄浦江と揚子江の合流点)、第十一師団はそれより揚子江の上流、川沙鎮付近に各々敵前上陸を敢行した。八月二十三日のことである。

以下、上海派遣軍参謀長・飯沼守少将の日記等により、敵前上陸の様子を見てみよう。

八月二十三日

3 D (師団) ハ予定ノ如ク三・一五陸戦隊、5/68 i 歩兵第六十八聯隊五中隊ノ上陸掩護後上陸、四・三〇頃第二次部隊上陸ノ報告ヲ受ク 11 D (師団) ハ発動艇ノ配備後レ五・〇〇ニ至リ第一次上陸部(隊)上陸ノ報告ヲ受ク。

其後報告始ト来ラサルモ海軍無線ニテ概要ヲ知ル、正午頃便船アリ艦隊司令長官ヲ訪問スヘク「真鶴」ニテ行ク途中棧橋ニ寄り第二次死傷者(戦死22、負傷13、海軍負傷者15?)ヲ収容シ五・〇〇頃「出雲」(第三艦隊旗艦)ニ行キ打合せ、原田少將以下武官全員集ル 午後九・〇〇頃原田少將ト帰艦。

支那兵一分隊(十数名)狭キ散兵壕ニ真ニ枕ヲ並ヘテ戦死セルヲ見、且第一回ニ上陸セル陸戦隊長ハ横須賀鎮守府第一特別陸戦隊ノ竹下少佐カラ直接戦闘ノ様子ヲ聞キ支那兵ノ頑強ナル抵抗ヲ知り稍判断ヲ誤リタルヲ感ス 海岸ニハ全員配備ニ就キアリタリ 3 D ノ上陸時ノ戦死5、負傷47名、陸戦隊508中戦死25、負傷62、11 D 方面帰艦後聞キタルニ戦死将校3、下士2、兵1、負傷40余名。【飯沼日記】

*

(蒋介石は)対日全面抗戦を宣言し、八月十五日総動員令を下命するとともに、自ら陸海軍総司令に就任し、着々と戦備を整えた。当時、上海戦線に集中した中国軍は十四・十五ヶ師に達し(その後毎日一・二ヶ師増強されて上海戦末期には約八十三ヶ師に達した)、「秋葉を掃ふ勢にて一挙に上海倭寇海軍根拠地を掃蕩

従軍の準備

第一百師団の動員がくだったとき、私の従軍が内示された。東京日日新聞編集局では写真部のデスクの隣りに東亜課があった。そこには東亜同文書院出身の、田中香苗さん(後に社長)がいた。

従軍のことを話して「百一師団では日本内地と同じくらしい気候のところに行くと言っているが、どこだと思う」と尋ねると、田中さんは中国の地図を広げて、杭州湾岸を指さして、「このあたりに敵前上陸だろうな」と言った。後の第十軍の上陸地点に近かった。

戦地では、何も購入することができないと知らされていた。そのために日常生活に必要とされる物品は、すべて持参しなければならぬ。そこで私が準備したものは次のとおりであった。

カメラは使い慣れたツァイスの「パルモス」9×12センチ判。レンズはテツサー・百五〇ミリ、F四・五。フィルムはアグファのイソパン・一ダース入りフィルム・バック三十個。修理用小型ドライバ一本。

従軍服(正規なもの、なかったが、兵隊と同じカーキ色のもの)。たまたま昭和十年秋北海道大演習の時、将校

せん」(中国軍の基幹を形成した八十八師青年将校の言)との意気に燃え、縦横に走るクリークに囲まれ、点在する壁の厚さ二十五センチに達する堅固な煉瓦造りの住民家屋によって頑強に抗戦したため、わが軍は対壕を掘って進むことを強制されるなど、戦闘は要塞攻撃の様相を帯びて戦線は膠着し、損害が続出した。

【南京戦史4ページ】

ここにおいて、中央統帥部は台湾守備隊をもって編成した重藤支隊(歩兵五ヶ大隊基幹)を増加し、大連に配置されていた天谷支隊を第十一師団長の隷下に復帰させたほか、さらに内地から第九(金沢)、第十三(仙台)、第一百(東京)の三ヶ師団と、堅固な陣地突破の重砲火力として十五サンチ榴弾砲一ヶ旅団のほか、十サンチ加農(カノン)砲、十五サンチ加農砲、さらに二十四サンチ榴弾砲部隊を増強した。九月二十日現在、上海派遣兵力は実に十九万人という予想外の大兵力を注ぎこむことを余儀なくされた。【南京戦史4ページ】

これに対して中国軍の記録によれば、

敵軍の総兵力は、第三・第十一・第十三師団及び第九・第十六・第一百師団の各一部、総計約一〇万人、砲三〇〇門、戦車二百余両、飛行機二百余機で、わが第九・第一九・第一五集團軍と北站―楊行―劉河の線で対峙し、激烈な争奪戦を演じつつ、その鋭鋒をもって、わが軍を反復攻撃し猛烈に肉薄した。敵は第三・第十三師団をもって劉羅自動車路を攻撃したが、甚大な損害を受けた。【戦史叢書282ページ】

の冬服と同じカーキ色の生地 of 背広服が指定されていたので、その時の上着を流用した。

ズボンはグレイのニッカーボッカー。帽子はグレイのレインハット。靴は底に鉄を打った編上げ靴。ワイシャツは厚手木綿のもの二枚、ウールのもの二枚。下着はランニングシャツ三枚。丸首シャツ四枚。長袖シャツ三枚。ズボン下はクレープのもの二枚。厚手木綿のもの二枚。純綿晒しの越中フンドシ八本。純毛丸首スエーター一枚。靴下はニッカー用の長いもの四足。純毛厚手ソックス四足。純綿ソックス四足。軍足二足。

水筒七合入り一個、飯盒一個。箸一膳。白米を軍足に入れた二本(四合)。バター(カン詰一ポンド)。塩(食卓塩大型ビン一個)。スプーン、フォーク各一本。

薬は社の医局で風邪薬(十日分)。胃腸薬(十日分)。他にクレオソート丸一ビン(300錠入り)。

木綿手ぬぐい三本。木綿タオル三本。

近視用メガネ(予備)一組。

知人が作ってくれた防弾チョッキ一着。これは実用にならなかった。

化粧セッケン一個。チューブ入り歯ミガキ一本。歯ブラシ一本。白黒の木綿糸と針の入った小箱。

二年前の冬、スキーに行った時に購入したリュックサック一個。サブリュック一個。アノラック(防水)一着。一

メートル平方の軍用テント一枚。(払い下げ品)。

これらの雑品は、いざそろえろと結構大仕事だった。

だが、助かったのはこれらの品物を全部かついで持って行かないですんだことだ。それは第百一師団付の従軍記者ということで、すぐには使用しない物品は、「第百一師団伊東部隊附従軍記者 東京日日新聞佐藤振壽」と記した名札を行李に付けておけば、将校行李と同様に扱ってくれたからである。しかし、これは上海までだった。

第百一師団に従軍

私の従軍は九月十八日から始まった。前日に大毎本社へ挨拶に行った後に、神戸へ行った。この夜は旅館に泊まったが、町へ出てみると民家に宿泊する出征兵士に、家の名がすぐわかるようにということだろうか、名入りの高張提灯が家々の軒先に立てられていた。

九月十九日はいよいよ軍用船に乗船だ。指定された桟橋へ行くと第百一師団の遠藤中佐参謀が来ていた。船室には、われわれの将校行李がきちんと積み上げられていた。

遠藤中佐に呼ばれて甲板へ出ると、「従軍記者の乗船は不許可、すぐに下船するように」と命じられた。軍のことに無知なわれわれは、キツネにつままれたようだ。事態の真相を聞き質すと、われわれに下船を命じたのは碇泊場司

軍用船に師団司令部と同行できなかったことは、同行記者団としてはショックだった。そこで各社とも本社へ電話して、しかるべき処置を仰いだ。

その結果は、明日にならなければわからない。どうせ寒々とした移民収容所では食事は出ないのだから、どこかで派手にこのうっぶんを晴らしたいという気分ですべて一致した。そこで神戸の町へ行って、内地で最後となる夜を過ごそうということになった。

神戸は地理不案内だが、誰かが思い出したのは、スキヤキ屋の「菊水」だった。外人観光客が関西旅行の時には、必ず訪れる料亭として知られていた。壁や襖は浮世絵で飾られていることで有名だった。

「菊水」では神戸牛のスキヤキ、酒は灘の生一本で師団司令部の悪口をサカナに、うっぶんを晴らし合った。今後、共同行動をとるための親睦を図るという名目で、会費は一社で二十円。当時のサラリー七十円の私にとっては、莫大な出費だった。しかし従軍出張旅費の仮払いを百円出してもらっていたので、気は大きくなっていった。

一夜明けて、軍用船に乗れなかったあとの始末が、全員のがかりだった。午前九時頃だったろうか東京から電話だという。一人が出ると、バスが来るからそれに全員乗車。その後に従軍の方法が示されるということだった。

移民収容所は三ノ宮から山手の丘の中腹にある建物だっ

令部で、軍用船に乗船する者を管理する権限を持つ。すなわち第百一師団から、われわれの乗船について、通報がなかったというのが理由であった。いふなれば従軍記者は忘れられていたわけで、甚だ不愉快であった。

この時、四社で八名の記者、写真班が一緒に行動していた。そこで同じ旅館へ泊まりたいが、旅館は軍関係者でいっぱい。われわれが泊まる余地はない。するとわれわれを軍用船から引き下ろした碇泊場司令部が憐れんだのだろうか、全員が一カ所に泊まることのできる施設が紹介されたが、その場所はなんと「国立海外移民収容所」。

石川達三が芥川文学賞を受けた『蒼氓』の舞台となった所である。その一節に、

「体格検査の済んだ者は順々に自分達にあてがわれた室を探して階段を上って行った。四階の第九号室、室は中央に四尺の通路を空けて、あとは両側にびっしりと十二のベッドが床のように連なっている」とあるが、まさにその通り。

移民がいなかったもので、この場所が選ばれたのだろう。

鉄製の二段ベッドは赤サビが出ていて、人気のない大部屋は九月とはいえ、冷えびえとした空気が満ちていた。

風呂は湯が出ず、それでも歩き回った後は水でも助けになった。各人の荷物はといえば、リュックサック一個。

ところで、第百一師団に従軍を許可をしておきながら、

た。玄関を出ると眼下に神戸の街並みが見える。下り坂の左手には「渡航用品販売所」があった。移民さんが買いつけてきた日用品を、ここで買いつけたのだろう。雨衣のゴム引のかっぱなどが、吊るしてあった。その前に神戸市営のバスが一台。運転手に尋ねると、「従軍記者を迎えに来て、大阪まで送ります」という。

バスに乗って、収容所前の坂を下る時、移民が移民船に乗りこむ時の心境がうかがわれるのだった。しかしバスはそんな感傷を無視して、三十人乗りの座席を八人が占領して、どんな結果が待っているのか、通勤ラッシュの阪神国道を時々警笛を鳴らしながら走り過ぎるのだった。

この時われわれの知るところではなかったが、九月十四日の『飯沼日記』には、「伊東部隊(101D)ノ先頭八十八日神戸出帆(ノ予定)」とある。

すなわち神戸でわれわれが軍用船に乗り損ねた日に、第百一師団の先頭部隊は神戸から戦地へ向けて、出帆していたのであった。

第百一師団は特設師団で、現役兵で編成されている常設の第一師団は、二・二六事件に關与した兵がいたとかいう噂だが、満州で対ソ警備についていた。第百一師団の兵はすべて予後備兵で、歩兵第一聯隊の宮庭で、歩兵第百一聯隊の軍装検査を視察した参謀本部作戦課の井本熊男大尉は「年寄りの集まり、皆一家の大黒柱で、これでは……と

思った」と回想している。

私は旧制中学で五年間現役の配属将校の下で、軍事教練を受けてきた。第百一師団に召集された兵隊さんより少しは多くの軍事知識を持っているなどと自負していた。

軍用船に乗りこむ

阪神国道を疾走したバスは、やがて大阪港に着いた。今日、乗船するのはわれわれ従軍記者八名だけ。

陸軍省が第百一師団に従軍記者を手配したのに、師団の不手際で記者を乗船不許可にしたことは、本省の面子を傷つけたようだ。そのためか従軍記者が第百一師団に追い付けるように、万全の手配をしてくれたらしい。

バスが大阪港へ着くと碇泊場司令部から係官が迎えに来て、われわれが乗船する輸送船羽黒丸に案内してくれた。

羽黒丸は五千トンくらい。甲板の縁には人が海へ落ちないように鎖が張られているが、鉄サビがひどくて寄りかかるのと切れるからと注意されるほどの老朽船だった。

それはともかくとして、どの船室へ入るのか？ すると、後部甲板のハッチの上にバラックが見えた。完成間近で、大工が二人で仕事をしている。このバラックがわれわれ八人が入る、臨時に急造された船室だそう。周囲の壁は板張り、その一部に板枠が張られていて、内部から押

し上げると外が見える窓になる。まるで古代人の住居のようだ。縦に六尺横三尺の板戸が開閉するようになっていて、そこが出入口で船首の方に向いている。

広さは畳二十畳敷き。屋根はルーフィングでその上に、十文字に直径三、四センチ位の太さのマニラロープを懸けて、デッキの金具に結んである。風に飛ばされないようにということだが、暴風に遭ったらひとたまりもないだろう。

羽黒丸のパイサーが来て、三度の食事は船員が運んでくれること。食費として三食で九十銭。食事はいちおう解決したが次は出す方、すなわち排泄だ。船尾に角材が二本、二尺位の間隔を置いて海に突出している。その上に囲いらしいものを作りつけて、これが簡易便所。小便は文句なしに大海原に向けて、放水ができる。

ところが大の方は終わって始末した後に、紙が落下しない。船尾に特有な風が舞っているのか、白い落とし紙が名残り惜しげにいつまでもヒラヒラと、船の後を追ってくるのである。

露営用にと毛布を、リュックに着けていたので、夜はそれを使うことにした。

食事の献立は一汁・一菜にツケモノ。まあまあということか。

さて羽黒丸は午後五時、ブオーと汽笛のこだまを大阪港

に残して静かに動き出した。出征兵士も乗っていないことだし、万歳々々の見送りのないのは当然。

しかし甲板にまで積み荷が山とあって、戦闘機の胴体だけが一つ、ポツンとむき出しになっていた。その他の箱は大砲の弾薬などで、甲板では喫煙禁止を申し渡された。

昭和十二年九月二十日、やっと従軍のスタートを切ったわけである。この夜は持参のウイスキーで乾盃。この時、第百一師団附従軍記者の面々は次の通り。

東京日日／伊藤実記者、写真佐藤振壽。東京朝日／足立和雄記者、写真小島忠郎。読売／古田徳次郎記者、写真二宮勇。同盟／依岡健一郎記者、写真高崎修。

羽黒丸の瀬戸内航海は穏やかだった。大阪から十二時間下関。関門海峡を通過する時は、岸から大きな日の丸の旗を振って、われわれの壮途を祝福してくれていた。下関港へ入港すると、二十一日はアンカーを入れて、この日は暮れてしまった。

二十二日下関を出港。玄海灘を西進する頃、本船の目的地は上海と教えられた。行くことしばし、一列縦隊の船団の最後尾に追いついた。船団中で一番速力のおそい船に合わせるので、速力は出ない。

この夜はいよいよ上海行が決まったというので、全員でパーティーを開いた。酔うほどに「東日」の伊藤記者が、伝家の宝刀とかを抜いて振り回し、「お前たちになめられ

んぞ！」と絶叫する。狭い室内なので全員大迷惑。あと幾夜あるかと心をいためていると、「朝日」の小島君が夜中にひそかに私を起こした。まだウイスキーが二、三本残っているがどうしようという相談だった。世に酒は気違い水という言葉もある、棄ててしまおうと意見が一致。甲板へ出て海へドボン。ジョニー・ウオーカーの赤ビン三本とのお別れだった。

予防ワクチンのせいかな下痢、腹痛。

九月二十三日になると、海のブルーの色が濃くなり、船団護衛の潜水艦、駆逐艦が本船に近寄って同航する。駆逐艦上で作業をしている水兵の白い作業服が印象的だった。

することが無いので、部屋の中でゴロゴロしているだけ。三度の食事に何が出るかが、楽しみになってきた。

この日夕方になると海の色が変わってきた。長江の水が海へ流れこんでいるためだろうか。

九月二十四日、午前八時、黄浦江の河口、右側は浦東（プートン）。左側は呉淞（ウースン）砲台の沖に錨を入れ、しばらく命令待ちのため待機していたが、午後五時頃本船は再び動き出した。

揚子江（長江）から黄浦江に入ると、右手に呉淞の砲台。さらに上流へ進むと鉄道の駅が見えてきて、鉄道栈橋に接岸。そこで碇泊場司令部の係官が羽黒丸へやって来て、われわれの上陸は明日と指示された。

したがって羽黒丸の特設バラックで、さらに一泊することになったが、まだ戦場という緊迫感はない。甲板に出て耳をすませると、陸上、すなわち黄浦江の左岸遠方から、ドンドンと砲声が聞こえる。さらに複葉の飛行機が、度々本船上空を低く飛んでいった。

九月二十四日 101 D 〈師団〉ハ103聯隊〈谷川部隊〉（一大欠、A〈野砲〉一中隊、後備A一中隊ヲ以テ片山支隊ト交代、他ノ主力ヲ以テ呉淞「クリーク」ノ渡河ヲ準備スヘキ命令ヲ出ス

【飯沼日記】

九月二十五日、朝食をすませた頃、伊東部隊（第百一師団司令部）から迎えのトラックが来て、軍工路を上海方面に少し行った所の民家へつれて行かれた。そこは日本企業の紡績工場の社宅らしかった。この家の主はすでに上海から去っていたのだろうか。簞笥、脚が折れたためのチャブ台など、見なれた市民生活の断片が残っており、今、自分がすでに上海にいることを、忘れさせるものがあった。

われわれをこの場所へ送ってくれた司令部の車が帰るといので、上海支局へ連絡を依頼した。

待つこと一時間、その間に戦が行われている証拠だろうか、発射の間隔が短く聞き慣れない機関銃の音が、遠くから流れてきた。やがて支局からの車が着いた。東日社会部の遊軍記者・中山善三郎君だった。支局に行く車の中で

には暗幕が張ってある。中国機の夜間空襲に備えてという。灯火管制中に規則に違反して灯火が外へ漏れていると、無警告で陸戦隊の巡察に小銃を射こまれるといわれた。

宴席には大毎写真部の松尾君（陸戦隊担当）、佐藤成夫君（陸軍担当）、大毎京都支局から藤田信勝君（陸軍担当）のほか、手すきの支局員も数人が加わって、スキヤキ・パーティーが開かれたが、肝心の牛肉が上海産のせいか、美味とはいえなかった。

宴たけなわになって、前線の取材に一日の長のある諸兄から、注意を聞かされたが、折りからズシン、ズシンと腹にひびくような爆発音やら、大砲を発射したらしい音が聞こえて来た。尋ねると中国機の空襲だという。大砲の発射音は黄浦江の軍艦「出雲」と、陸戦隊本部の高射砲だ。部屋を暗くして暗幕の間から見ると、照空灯にとらえられた中国機が、ピカリと反射光を発しながら飛んで行く。その周囲で高射砲弾が破裂し、高射機関銃が曳光弾の尾を引いて行く。中国機は高度が高いせい、エンジンの音は聞きとりにくいくらいだが、かすかにブンブンと音がする。

どこへ爆弾を投下したのか、炸裂音がかすかに聞こえてくる。話によると、英仏租界では灯火管制が無いから、道路も建物も電灯がついていて明るい。それに反して日本租界は灯火管制で、真っ暗。したがって上空から見ると、地上

現在の戦況を教えてもらったが、あまりかんばしいものではないかった。

虹口の日本租界へ車が入ったが、住民はほとんど見当たらない。中国人の民家らしい長屋が建ち並んでいるが、ほとんど全部が無入らしい。海霧路の角に建っている上海銀行の二階が、大毎・東日の上海支局だった。中山君の紹介で田知花信量支局長に引き会わされた。いろいろと注意されたが、要するにいかんして危険を免れるかということ、前線近くで泊まる場合「大隊本部より前で泊まってはいけない」と厳重に注意された。

支局の食堂で昼食の後、当分宿舎となる辰巳屋旅館へ連れて行かれた。そこにリュックサックをあずけて伊東部隊本部へ行き、明日の行動予定を聞いて支局へ帰った。

支局へ帰ってから無人の街を歩いてみた。何か変わっているなと感じたのは、街中に消毒薬、石炭酸の臭いが充満していることだった。不思議に思っ支局員に尋ねると、伝染病の発生を防止するためだという。

空襲を初体験

支局ではわれわれの歓迎スキヤキ・パーティーを開いてくれた。灯火管制のため街路へ出ても方角がわからない。料亭のような所へ案内されて座敷へ入ると、窓のガラス戸

に光の無い所へ投弾すれば、戦果が上がるという。

スキヤキ中の仲間は、平然としてビールを飲み牛肉を食べている。空襲初体験の私は、どうしてよいのか解らないが、ともかく恐ろしい。どこか安全な場所へ行かないでよいのか。言うなれば身の置き所もなく、気は動転し、むやみにビールのコップをあおっても味がわからない。泰然としている仲間がうらやましい。

しかし考えてみれば、彼らにしても空襲は恐ろしいにちがいないと思ひ直す。その中の一人が「ここを狙っているわけではないから、大丈夫ですよ」と慰めの声をかけてくれた。

九月二十五日 敵機珍ラシク本今朝来襲、鉄道棧橋附近兵站地へ爆弾ヲ投下セリト。【飯沼日記】

筆者はこの日に軍用船・羽黒丸から呉淞へ上陸していたのだが、敵の空襲が朝あったことは知らなかった。もしかすると、われわれが上陸する以前のことだったのかもしれない。

九月二十六日、午前五時起床。野砲兵第百一聯隊（山田部隊）が前線に出動するというので、集合場所となっていた黄浦江岸楊樹浦路のビール工場前へ車で行った。部隊は野砲隊で、砲車はすでに先発していたようだ。山田部隊長の乗馬姿の後を追うと、軍工路を北上して江湾地区へ。こ

のあたりは蒋介石が都市計画をしていた大上海の郊外らしく、野菜畑の中にスマートな洋館が点在しているが、住民は皆無。大きな中国風の建物が、緑・赤・黄に塗られているが、砲撃のためだろうか一部が破壊されている。上海市政府だという。この市政府を頂点にして、南方へ放射状に道路が走っていて、新興都市の都市計画を見ることができた。

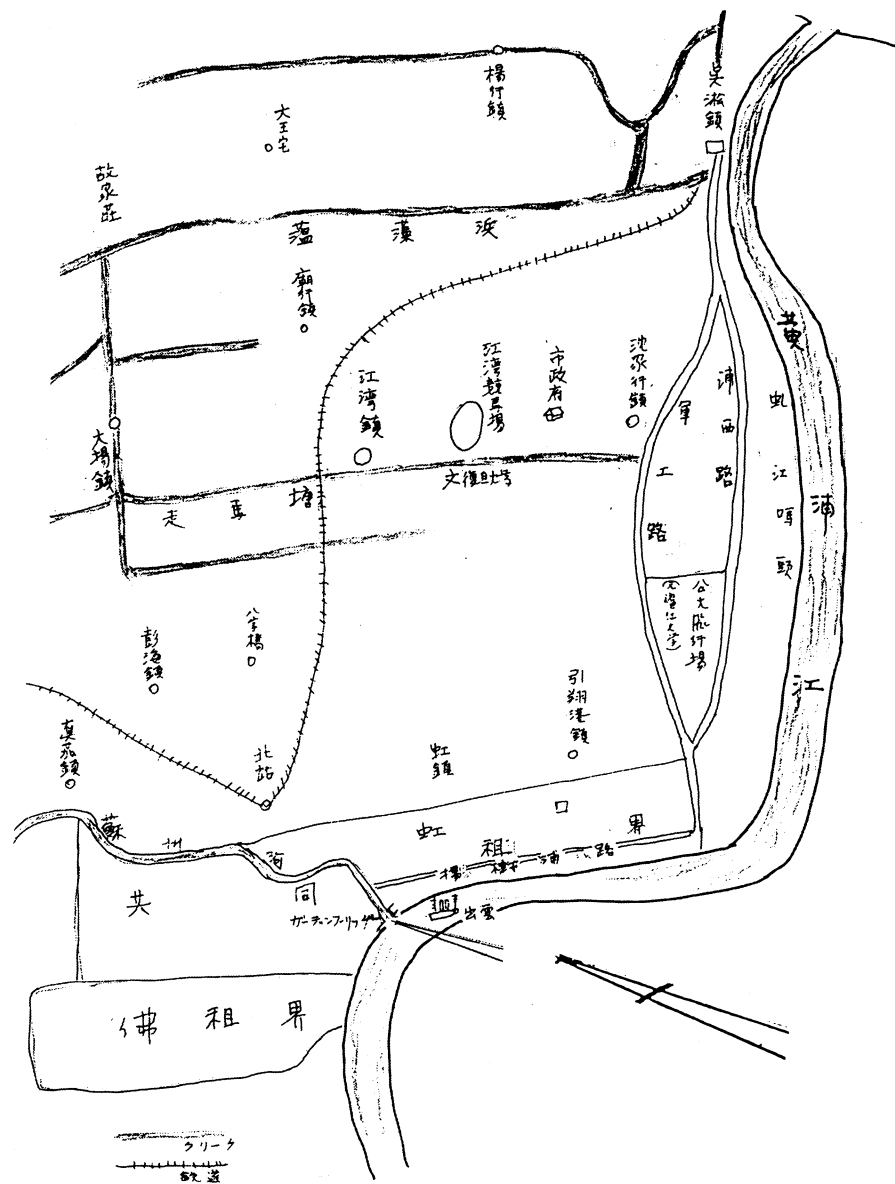
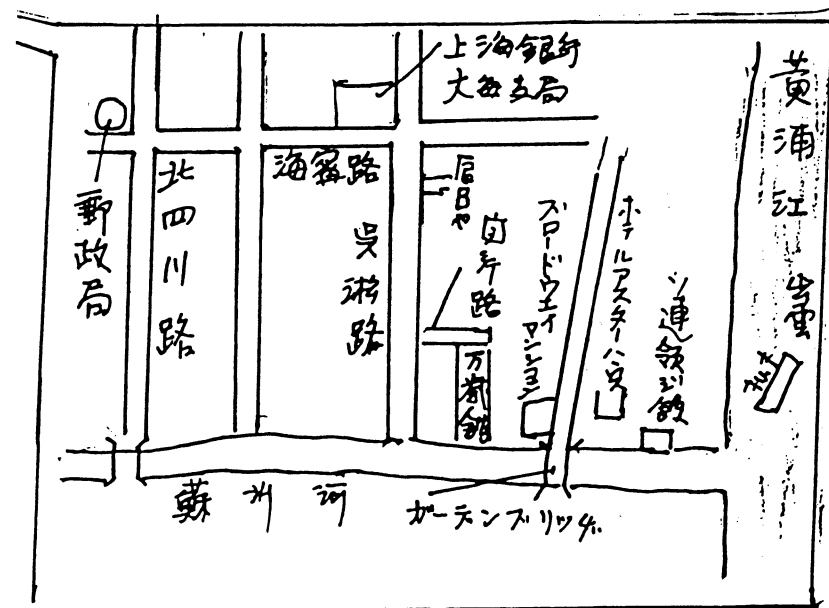
山田部隊の観測所は実験小学校の屋上。そこには砲隊鏡がセッットされ、観測掛将校の所へは電話線が敷かれて、屋上から見える畑地の中の放列に命令している。

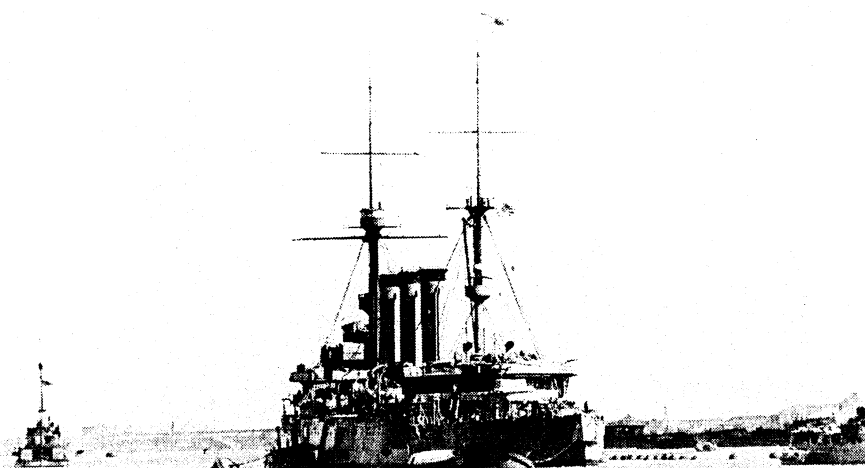
二キロくらい離れたところに復旦大学があって、そこを目標にしているのだろうか。三門並んだ大砲の右の大砲から射撃を開始した。その弾着を観測所から見て修正量を電話していた。砲側の将校が修正号令を砲手に伝えると、再び右から順次に射撃が始まる。敵陣に近いせいか時々、流弾が頭上を小鳥の鳴き声のような音を立てて飛んで行く。

この日が、私たちにとっての初陣だった。それなりに緊張したが、同行の伊藤記者自慢のいでたちはすごかった。

曰く、「胸には防弾チョッキをまとい、伝家の宝刀を左腰に、右腰には護身用のピストルを吊るして、しずしずと山田部隊長と共に戦場へ足をはこんだ。」

伊藤記者につられて私も防弾チョッキを着てみた。これは真綿の入ったチャンチャンコで、胸部には8×10センチ





虹口日本租界前の黄浦江上に碇泊する、第三艦隊旗艦「出雲」。日露戦争生き残りの「出雲」は32年ぶりに20センチの主砲で、江湾方面の中国軍を砲撃した。

くらの鉄板を綴り合わせたものだった。親しくしていた知人の家族が作ってくれたものだが、真綿が背中にもあるので残暑の上海では、暑いこともおびただしい。以後の着用法はご遠慮申し上げることにした。

上海に陸上航空基地

第十一師団は前月の八月二十三日零時、揚子江上流川沙鎮北方地区に強行上陸。江岸の敵を撃退して午後、川沙鎮付近をおおむね確実に占領し、羅店鎮攻撃を準備した。

第三師団方面においては、上陸掩護隊（第一特別陸戦隊及び歩兵一中隊基幹）は、二十二日夜半までに上海において汽船に分乗し、駆逐艦がこれに先行し、艦砲射撃により敵を制圧して二十三日三時ごろ、呉淞鉄道栈橋（呉淞鎮南方約一軒半）付近に強行上陸を敢行し、河岸の敵を駆逐して軍工路の線に進出した。

【戦史叢書277ページ】

これによって、日本租界を北東から侵攻しようとする中国軍に対抗する日本軍の態勢が最小限整った。しかし、第一線を支援する強力な戦力となるべき航空基地は、陸上に設けられなければならないのは自明の理である。

その候補に上げられたのが、滬江大学に接してその南方に広がるゴルフ場である。虹口日本租界の南側に黄浦江に沿って東西に走る楊樹浦路。その東端から黄浦江に並行して、呉淞に至る幹線道路が軍工路。軍工路と黄浦江に並行する浦西路がつくる三角地帯にゴルフ場があった。日本軍の飛行場としては最適のものといえよう。しかしこれを直ちに使用することはできなかった。すなわち、この周辺の中国軍がまだ射撃を続けていたためである。

陸上航空基地を確保するために、この敵を早急に掃討するが急務ことになった。その状況を『飯沼守日記』は次のように記している。

九月三日 「トーチカ」地帯ハ敵陣地極メテ堅固ニテ二列三列ニ陣地アルコト大沢大尉ノ偵察ニテ明瞭トナリ飯田大隊ハ第三師団歩兵第十八聯隊第三大隊ヲ以テ之ヲ攻撃セシムルハ一考ヲ要スルコトトナレリ。

九月五日 「クリーク」攻撃ノ飯田支隊ハ海軍ノ絶大ナル協力及ニ中隊増加ニ依リ確信ヲ以テ明六日午前六・〇〇攻撃開始ノ報告アリ。

九月六日、飯田大隊六・〇〇カラ「トーチカ」攻撃ヲ開始シタラシク砲声ヲ聞ク。

松田参謀帰来談、飯田大隊ハ艦砲掩ゴノ下ニ先攻中隊、駆逐艦ヨリ上陸ヲ開始シタルモハネ返ヘサレ已ムナク大発ニテ他ノ個処ニ上陸（先攻中隊ハ中隊長戦死、死傷十余名ヲ出ス）飛行場南方

ノ「クリーク」ノ線ニ進出一部ヲ大発ニテ下流ニ上陸セシメ「トーチカ」正面に進出シツツアリ。

九月七日、飯田大隊ハ昨夜ノ中ニ主力ヲ「トーチカ」東方正面ニ移シ本朝八・〇〇ヨリ攻撃開始ノ予定、昨日中ノ死傷百名弱。

光成参謀来リ飯田大隊ノ戦況ヲ聞ク、工兵少隊長戦死ノ為南方正面ヨリ「クリーク」ヲ渡テ行フ攻撃ヲ変更セリト。兎モ角成算ヲ立テテ着々実行中。

九月八日、一〇・〇〇ニ飯田大隊ハ軍工路ノ線ニ進出「トーチカ」ニヲ占領セリトノ報告ヲ受ケ一安心（二・〇〇〇三・〇〇頃ラシ）

九月九日、飯田大隊方面ニ在リシ大西参謀帰来源ヲ以テ報告、第一日（六日）大体予定線近クニ進出、河岸ニ上陸セル中隊長戦死、第二日軍工路ノ線ニ進出、大隊歩兵ノ主力河岸ヨリ上陸、軍工路ニ併行シテ攻撃、村落ノ線ヲ占領、第三日ニ中隊ニテ南方二個ノ「トーチカ」占領、第三「トーチカ」ヲ他ノ中隊ニテ攻略セントスル時大逆襲アリテ両軍手榴弾戦、此日ニ中隊長戦死残ハ只南ノ中隊長ノミ大隊長ハ昨夜本部ヲ襲ハレ壮烈ナ戦死、大隊副「官」又之ニ殉ス。3D遠藤参謀大隊ヲ指揮シ本日第三「トーチカ」ヲ奪取スヘク努力、三日間ノ死傷約二〇〇ノ見込。

光成参謀ヨリ飯田大隊ニ手榴弾発煙筒ヲ多数急送セラレ度意見具申アリ、3Dハ34ハ聯隊ノ一中MGハ機関銃2ヲ飯田大隊ニ増加ス。

飯田大隊ハ遂ニ最下流トーチカヲ午後四・〇〇占領セリ。

九月十一日、公大飛行場昨日ハ陸海軍三〇キ使用、昼間ハ小銃弾少シ来ル。夜ハ数発ノ砲弾来ル。『飯沼日記』

飯田大隊は大隊長戦死、中隊長二名戦死。これらの犠牲の結果、苦戦を続ける上海派遣軍に密接に協力する貴重な陸上飛行基地として公大飛行場を確保できたのであった。

*

後に陸軍報道部長・陸軍大佐馬淵逸雄はその著『報道戦線』（改造社刊）の中で次のように記している。

九月六日、飯田支隊は軍工路の開放、公大飛行場確保という特別任務を以て、滬江大学北方地区に於て攻撃を開始した。

この戦闘は上海市街楊樹浦に接近して行はれたので、新聞記者も親しく目撃したものが多くのである。私も三回程、従軍記者を伴ひ滬江大学の楼上から、眼下の戦闘を観たが、彼我二三百米に接近し、森原部隊の突撃や敵の逆襲に手に汗を握った。温厚な飯田部隊長は戦闘司令所で指揮の合間に記者を紹介した。

〔軍報道部九月八日午後二時発表〕

「飯田部隊ハ本朝来陸海砲兵射撃並ニ海軍機ノ爆撃ノ協力ノ下ニ当面ノ敵ニ対シ攻撃ヲ再開セリ、同部隊左第一線ノ森原部隊ハ午前十一時界濱港クリークニ接近セル第一及第

二ト一チカ陣地ヲ突破シ軍工路西方約一千米ノ沈家巷鎮ヲ占領シ目下当面ノ敵ト対峙中ナリ。」

此発表文は滬江大学楼上で戦闘を目撃しながら、記者に発表したものだ。其翌朝未明に、飯田部隊長戦死の報を得、驚いて戦場に駆けつけた。

飯田少佐は昨日私と訣れてから、戦闘司令所を前方虬江碼頭（波止場）職員官舎に移したのであるが、中村大尉、梅田大尉、山本大尉等を初め、中隊長、小隊長相次で斃れ、一番損害を多く蒙った小隊の守備する碼頭の、之も戦死傷者を収容している所に夜襲をかけられたので、部下の止めるのも肯かず、大隊本部を出て現場に赴援し、格闘して遂に斃れたのである。副官森田少尉之に殉じ、旅順港口の広瀬中佐、杉野兵曹長を再現した。

私は小銃弾乱れ飛ぶ虬江碼頭に到り、飯田少佐以下多数の戦死将兵の遺骸に顔き、昨日に変わる姿に涙を絞ったのである。飯田支隊生存の中隊長は第一ト一チカに突入した森原大尉一名となった。死を誓った部下とは断じて離れない、と云って居た森原大尉も大隊長戦死と聞き、涙を揮って支隊戦闘司令の位置に就き、九、十、十一、十二、十三日と死闘を続けて、遂に軍工路を突破し、市政府に進入した。好漢惜しいかな、大別山麓の華と散った。

*

第三師団衛生隊ノ一部

戦前、よく感状という言葉聞いた。筆者は軍事知識が足りないために、単なる上級者から授けられる表彰状と、受けとめていた。しかし、軍人にとっては大変に名誉なことだったのである。

兵語辞典によれば、

「軍隊の恩賞用語。戦場において拔群の武功を立てた軍人または軍隊に対して、これを表彰するため軍司令官または独立師団長が授与する文書を言い、全軍にこれを布告する」とある。

飯田部隊の感状の文面を知ることが意義あることと言えよう。

感状

飯田支隊

長歩兵第十八聯隊第三大隊長 飯田七郎

歩兵第十八聯隊第三大隊

同 速射砲小隊（一分隊欠）

戦車第五大隊第一中隊第一小隊

野砲兵第三聯隊第九中隊

迫撃第四大隊第一中隊

工兵第三聯隊第二中隊第二小隊

独立工兵第六聯隊第一中隊ノ一部

第三師団通信隊ノ一部

第三師団衛生隊ノ一部

公大北方軍工路付近ノ敵ヲ駆逐シテ公大飛行場ニ於ケル陸海軍飛行隊ノ根拠地ヲ安全ナラシムルコトハ優勢ナル敵ニ対スル上海派遣軍ノ作戦指導上特ニ緊要トセシトコロナリ

第三師団飯田支隊ハ九月六日以来之カ攻略ニ任シ堅固ニ陣地ヲ占領セル優勢ナル敵ニ対シ海軍ノ協力下ニ勇戦奮闘スルコト四日此間屢々敵ノ逆襲ニ会ヒ又支隊長以下幹部ノ多数ヲ失フニ至リシモ闘志毫モ屈スルコトナク必勝ノ信念ヲ堅持シテ志氣益々旺盛ニ各隊協力一致遂ニ其任務ヲ達成セリ

其攻撃精神旺盛ニシテ団結ノ鞏固ナル真ニ全軍ノ模範ト

スルニ足ル

仍テ茲ニ感状ヲ授与ス

昭和十二年十月

上海派遣軍司令官 松井石根

海軍機の協力

こうして、待望の陸上航空基地として、上海虹口日本租界近くに公大飛行場が開設された。そして第二聯合航空隊が、この基地に進出してきた。それによって上海派遣軍の陸戦に密接に協力する態勢が整えられたのであった。

筆者が呉淞クリークの戦線に従軍中、飛行機の爆音が時々聞こえてきた。高度が低いから日本軍機にちがいないと思っていると、キューンという急降下音がする。見れば復葉の艦上攻撃機。敵陣めがけて爆弾投下の姿勢である。この時地上の中国軍陣地からチェコ機銃の音がして、日本機を目掛けて曳光弾が流れるように飛んで行く。次の瞬間、ドーンという爆発音がして、地上から土砂が空へ噴き上げられる。

九月十九日、公大基地から第一次南京空襲が始められた。この日は艦上戦闘機十二機、艦上爆撃機十七機、ほかに水上偵察機十六機も参加して堂々たる鵬翼をつらねた空中陣だった。

低翼単葉の九六式艦上戦闘機、復葉の九六式艦上攻撃機は、最優秀のパイロットの操縦により、その戦果には見るべきものがあった。すなわち南京、句容上空で中国軍機四十機と空中戦を交えた。そしてその二十六機を撃墜し、わが方は四機を失った。

かくして九月二十五日まで、十一回にわたる出撃で撃墜四十八機、投下爆弾数三百五十五発、計三十二・三トンに達した。

南京をはじめ上海周辺や、遠く南昌・広東などの主要中国軍航空基地は、日本空軍の先制攻撃を受けて、緒戦でその戦力の多くを失っていた。

であった。

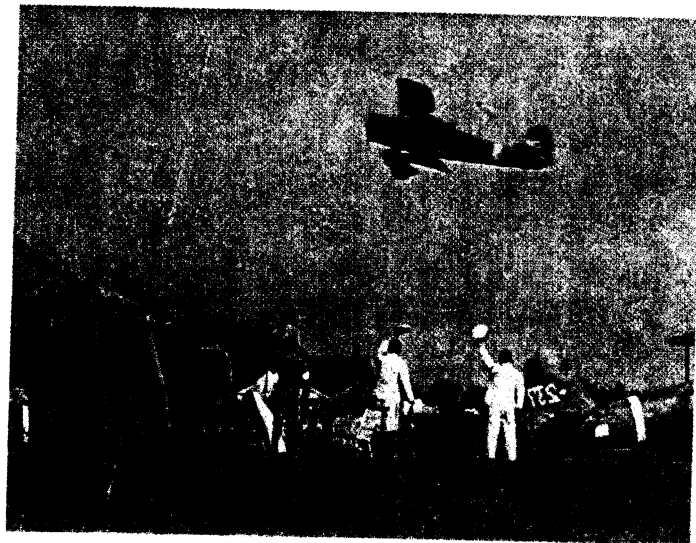
頑強な中国軍

八月下旬に敵前上陸した第十一、第三師団は満を持していた蒋介石の大軍に、苦戦を強いられていた。そのために上海派遣軍には、筆者が従軍した第一百師団のほか、第九、第十三師団が、九月下旬から十月上旬にかけて上海戦線に投入されたのであった。

第十一師団の丸亀歩兵第十二聯隊（安達^{はたぎ}二十三^だ大佐）は、呉淞岸壁から上陸したのだが、十日前に敵前上陸した名古屋第三師団の将兵の屍が、土も見えないほどに折り重っていたと、第十中隊の第三小隊第三分隊長だった三好捷三が『上海敵前上陸』（図書出版社刊）に書いている。

筆者らはぬくぬくと上陸したのだが、第三師団の戦況については、全く知らされていなかった。新聞の報道も検閲のため、上海戦の惨憺たる実相を伝えていなかった。

公大飛行場が整備されると、海軍航空隊の陸戦への協力が、上海戦線に大きな影響を及ぼすようになった。



公大飛行場から南京空襲に飛び立つ96式艦上爆撃機。

前線の初体験

九月二十七日、いよいよ前線へ出る日が来た。辰巳屋から支局へ行くと、昼食の入った飯盒を渡された。前線はぬかるみだから、地下足袋がよいと勧められたので、ハイキングシューズはやめた。ゲートルを巻き、同行者は「大毎」の佐藤君、藤田記者。映画の川口さんと連絡員。支局前から車に乗る。無人の街を過ぎると、黄浦江沿いの楊樹浦路に出た。左右は工場が連なり、それが終わるあたりに公大飛行場。復葉の海軍機が並び、中にはエンジンを始動している機もある。

このあたりから軍工路に入って北上する。しばらくすると呉淞鎮だ。第三、第十一師団が中国軍と激戦を交したあたりだ。呉淞で道路を左折すると、今日の目的地・楊行鎮だ。道路の縁に煉瓦造りの家が一軒建っていた。

このあたりは呉淞棧橋に荷上げされた貨物を、前線へ輸送する輜重車で混雑していた。道路は楊子江が運んだ黄土で、きめが細かいためドロコ道で、歩きにくいこと甚だしい。

異様な音が上空高く、低く、空気を切って行くが、誰もあまり関心を払わない。流れ弾の音だそう。そしてその音が来た方角から、リズミカルな軽やかな音が聞こえて来

なかでも、九六式艦上戦闘機の活躍は目ざましく、とくにその名を高めたのは、十二年十二月九日南昌攻撃の折り、カーチス・ホーク機に体当たりして墜落させ、片翼の三分の一を失いながら帰還した、第十三航空隊樗村寛一機の新聞写真で、空の英雄として国民の目を引きつけたもの

る。チェコ製軽機関銃の発射音だそう。うかうかしていると、命を失うかもしれない戦場の中へ、入りこんでしまったのだ。

チェコ機銃の音に交じって、重々しい日本軍の重機関銃の音もする。その方角が前線に違いない。車から降りて同行して来た諸君と別れ別れになっていったが、運転手に帰りの時間を言っているから、五時までに車を降りた場所へ集合するよう言い渡された。

道路の縁に灌木が立ち並んでいる。注意されてその幹を見ると、何やら黒い物がうごめいている。ハエだ。無数のハエがうごめいていたのであった。

この頃わが軍は、いわゆる呉淞クリーク（中国地図には蕪淞浜とある）北岸の敵を攻撃していた。したがって前線の写真を撮るためには、呉淞クリークの方向へ行かなければならないが、その方向からはチェコ機銃の音が、あちこちから聞こえて来るし、流弾が私の頭上を盛んに飛んでいる。

ともかく日本兵の姿を求めて歩くうちに、思わぬ兵隊にめぐり合った。彼は甲府の第百四十九聯隊（津田部隊）の上等兵だった。河口湖へ度々行った時の知人である。

中国の民家へ案内してくれたが、この場所は大王宅（中国地図には大黃宅）と知らされた。彼の名は小林定吉君（五十四年十月歿）。一別以来の話が尽きない。飯盒の昼食

は食べてしまっていたので、ここで夕食をご馳走になった。

彼の所属は重機関銃隊で、民家の陰で敵の弾の来ないような場所に、軍馬を繋いであった。上官にあたる人は年配の准尉さんだった。話はずんずん夜になった。

敵の迫撃砲弾の炸裂音、ダンダンダンと重くテンポのおそいわが重機関銃、軽くタカタカタカと聞こえるチェコ機銃。敵の攻撃が盛んだ。

そうこうしているうちに、中華そば屋のチャルメラのような音。その直後、前線から伝令がとび込んで来た。

「敵がクリークを渡って、こっちへ来た。応援たのむ」

これを聞くと小林君とまわりにいた数人が、「では行ってくる」とひと声残して飛び出していった。後には准尉さん一人だけが残った。したがって、民家の中には私と准尉さんの二人だけ。

准尉さんはロウソクを点してくれた。外に光が漏れたら敵の攻撃目標となる。消したらどうですか、と言おうとするそばから民家の壁にピシピシと銃弾が当たるのだが、ロウソクを消すのは次にして、ウイスキーのポケットビンを出してまあ一杯とすすめられた。

外の銃声はますます盛んになる。そのうちに民家の裏でも、パンパンと銃声がある。敵兵は民家の裏へまわったのかと思う、これは一大事と思ったが、逃げ出すこともでき

揚行鎮から前線へ、ぬかるんだ道が続く。先頭は筆者。一人
おいて藤田記者、「大毎」佐藤君。



ない。

小林上等兵は、その晩ついに帰って来なかったが、やっと明るくなると、助かったという安心感にひたることができた。支局長から言われた「大隊本部より前で泊まってはいけない」という注意が、身にしてみた。

朝になって民家の外へ出た。すると裏側は竹やぶで、一定の高さで竹が折れている。民家の屋根すれすれに飛んで来た流弾が当たったのだらう。昨夜の経験からすると、竹やぶに飛び込んだ流弾は、はじめてあちこちの竹に当たるので、その音をチェコ機銃の発射音と勘違いしたのであると納得した。

呉淞クリークの激戦

呉淞クリークの渡河戦は、第百一師団にとってきびしい課題だったが、その行動は軍司令部にとってはまだるっこく感じられたようだ。

たとえば『歩兵第三十四聯隊史』によれば、「これよりさき、九月二十二日、呉淞付近に上陸を始めた後統第百一師団は、第三師団の左翼へ進出するよう軍命令を受けていた。」

歴戦の、第三師団の苦戦を思いやる松井軍司令官は、第百一師団の攻撃開始のおくれを厳しく指摘した。九月二十

六日の『松井日記』を繰ってみよう。

〔百一〕師団ハ三十日朝頃ヨリ攻撃開始ノ希望ナリシモ予ハ第三師団ノ苦戦ヲ救ヒ且ツ軍後ノ作戦ヲ準備スル為メ百一師団ノ過度ナル慎重の態度ニ満足セス其意ヲ師団参謀ニ含メテ攻撃開始ヲ促進セシメタリ、蓋シ軍一般ノ戦況殊ニ第三師団苦戦ノ情勢ヨリセハ百一師団ハ寧ロ上陸完了ヲ俟タス迅速ニ前進スヘキモノナレトモ其特設師団ナルニ鑑ミ暫ク時日ヲ与ヘテ師団ノ集結并ニ尔後ノ作戦行動ヲ準備セシメタルモノナルニ師団ハ此甘言ニ乗リ余リニ呑氣ニ構ヘ自己ノ都合ノミヲ思ヒ第三師団ニ対スル思遣リノ足ラサルハ遺憾ナルヲ以テ斯ク督励シタル次第也。

【松井日記】

九月二十六日 3Dノ補充員約二、〇〇〇人到着セリ。一〇・〇〇頃101D遠藤参謀来部、101Dハ二十八日ヨリ攻撃開始、三十日ニハ顧家宅ノ線ニ進出スル予定

九月二十八日 101D右翼隊交代ノ際敵ノ逆襲ヲ受ケ此ノ正面ノ交代後レ本朝一〇・〇〇ニ終ル。又砲兵ノ展開モ後レ左側支隊及左翼隊ニテ若干第一線ヲ推進シタルノミ、其内部ニハ数ヶ所ニMG(重機)ヲ有スル残敵アリ予備隊ヲ以テ掃蕩中トノコト

【飯沼日記】

*

九月二十八日の筆者の行動。

九月二十九日 9Dハ本日午後ヨリ行動ヲ開始シ得。依テ本朝四ヶ師団ニ対スル合同命令ヲ下ス。其要旨ハ呉淞「クリーク」、線ニ3D、101Dヲ各個ニ進メ9Dハ先ツ旋回スヘキ線マテ進出。大場ニ対スル攻撃ヲ準備セシムルニ在リ。

101D右翼隊正面ニハ昨夜モ三回夜襲シ来レリ。又「クリーク」を背ニシ我ニ包圍サレナカラ頑トシテ退カサル小部隊各所ニ在リ

【飯沼日記】

九月三十日

前日に引き続き楊行鎮へ行く。そこから大王宅の津田部隊へ。戦闘ははかばかしくなかったため、「雄観的な」写真を撮った。ともかく兵隊の行動は、どれを撮ってもニュースになる。しかしチェコの銃弾は盛んに来る。中国兵は銃弾が豊富なのだろうか、むやみに射ってくる。それだけにこちら側は危険なのだ。

九月三十日 101D正面ニヶ所ニ於テ昨夜敵ノ夜襲アリ。共ニ第一線ノ間隙ヨリ進入、其ハ後方予備隊ノ線ニ衝突突退、他ノ一ハ屋間マテ内部ニ残存シ後備隊ヲ以テ掃蕩セリ。

本日ハ三師団共ニ一步モ進出セスト云フ程度(68i「聯隊」ハクリークヲ越ヘ進出セリ)殊ニ101Dハ昨日モ三、四度突撃シテ失敗、本日モ又朝ヨリ午後五・〇〇迄全砲兵ヲ以テ胡家庄ヲ射撃シタル後突撃セルモMG(重機)六残存、跳ネ返ヘサレ坑道作業ニ移ルトノコト。【飯沼日記】

車で虹口から楊行鎮へ着く。ここから呉淞クリークの北側近くの前線部隊へ行こうとしたが、流弾がはげしく危険だったので楊行鎮へ帰った。しかし運転手との約束の時間に遅れたので自動車無し。たまたま呉淞へ行く軍用トラックがあったので、呉淞まで便乗。呉淞から軍工路を歩く内に、上海へ行く車が来たので上海支局へ電話依頼した。

九月二十九日

江湾競馬場は谷川部隊(歩兵第百三聯隊)が占領しているので、戦況を尋ねるために訪問。支局から車で三十分のところ。上海市政府に近く、道路整然として蒋介石が上海市をここへ移す計画だったとか、新都市計画の予告版のよう。しゃれた洋館が点在し、その間に野菜畑があったりしていた。ここには戦闘も無く、休息日のようなのかな風景であった。

呉淞クリークに近い前線では、日中両軍が塹壕に拠って激戦を交していた。そんな所へ棉畑の上をノコノコと歩いて行けば、狙撃されないまでも流弾に当たってしまう。各師団の戦闘行動は全く解らない。師団司令部へ行つて交戦状況を尋ねて、はじめて解ることになる。

*

この日の『飯沼日記』は、各師団について次のように書いている。

呉淞クリークの戦いは、行きつまりの感がある。中でも筆者が従軍している第百一師団に関しては、はなばなしの戦果を聞くことができない。戦後も最近になって知って知ったことだが、十月十八日の『飯沼日記』には、

午後101D参謀長ヲ呼ヒ実情ヲ聞クト共ニ「隊長進ムモ部下統カサルコト」「二部隊力一旦占領シタル地点ヲ敵ノ逆襲ニヨリ旧陣地ニ後退スルコト」ニ就キ直接法ニ注意ヲ与ヘ且師団命令ニテ漫然ト両翼隊ニ攻撃続行ヲ命スル方法ヲ採ラス師団ニテ奪取スヘキ地域ヲ定メ堅キ決意ヲ透徹シテ敢行スルコトヲ要求ス。之ニハ勿論軍砲兵、飛行機ヲ協力セシム。【飯沼日記】

十一月十八日、参謀本部の河辺作戦課長が上海派遣軍司令部を訪問した時、第一課長(作戦)西原大佐は、「上海戦のような作戦では、特設師団(第百一師団のような)は防禦以外に使用できない。第百一師団は蘆藻浜クリークでへこたれてしまった。第十三師団も戦力は似たりよったり。団結、装備、特に団結は最もよくない。第百一師団は一小部落に二万発の射撃をしたことがある。

敵が退却しても、突入することができない。たまたま突入しても、逆襲を受ければ逃げて帰った。歩兵第百三聯隊の某大隊は夜襲の際、大隊長と二、三名が突入したがあとは続かなかった。突入した時は敵はおらず、大隊長は部下が来ないので煙草を吸っていたところ、そこへ逆襲を受け

湿地である。前にも述べた通り、長江が運んで来た泥でできた土地である。ひと雨降るとドロコンとなり、編上靴には泥が入りこんで工合が悪い。

上海戦線に私が初陣した時は、ちょうど雨の後だった。先輩格の「大阪毎日」の藤田信勝記者や、佐藤成夫カメラマンの助言の結果、内地から持参したハイキングシューズはやめて、地下足袋をはいて出かけた。地下足袋だと少々泥道も、平気で歩いて行ける。しかし、一日歩いて帰ると濡れた足の裏がピンク色に腫れあがってしまっている。

呉淞クリークの戦いの頃、日本兵の大部分は地下足袋を履いていた。それも新型らしい、爪先が割れていない靴のような地下足袋である。親指が離れていると不都合なことがあるのかどうか知らないが、いかなれば革の軍靴が木綿の靴に代わったようなものである。

呉淞クリークを渡河し、蘇州河を越えて中国軍を呉淞地区から追い払った頃、兵隊は背嚢の左右に軍靴を縛り着け、履いていたのは地下足袋だった。兵隊は軍靴だと靴ずれができるので嫌いなようだ。治療法は荒療治だが、水泡を破って中の水を出した後に、ヨーチンを入れると治りが早い。この治療法は猛烈に痛い、効果は見るべきものがあった。

堅い道路になると地下足袋は不適である。硬い靴底が足の裏を保護するので、長距離の行軍ともなると、やはり軍

靴の独壇場であった。

下痢で入院・赤痢か？

楊行鎮から呉淞クリークの北岸まで、戦場は平坦な綿畑である。乾燥地はほとんど無きに等しい。そこへもってきて毎日の雨だ。

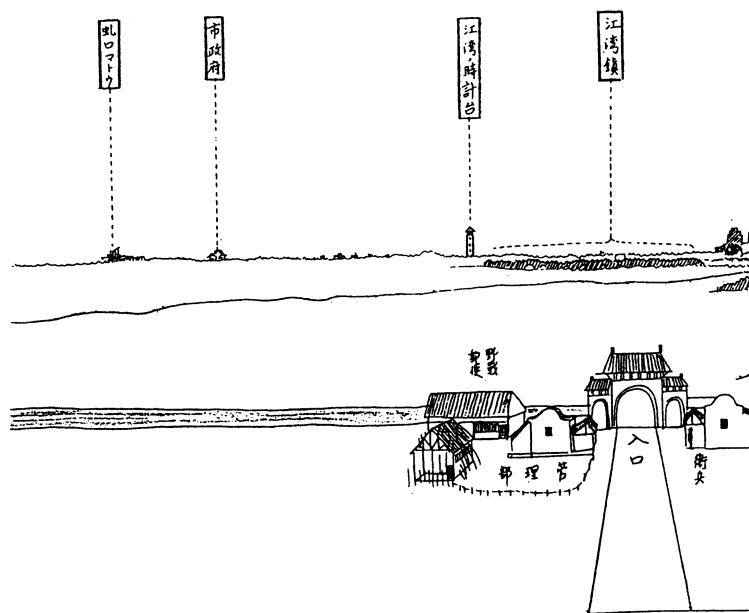
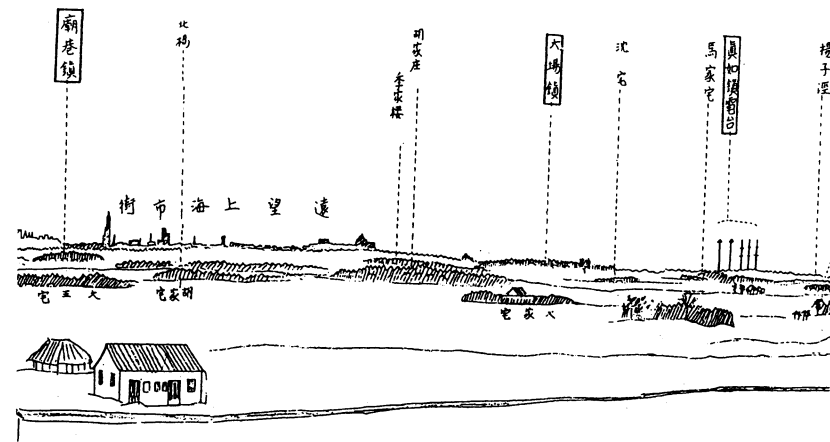
戦争になって大砲を射つと、雨雲を刺戟して雨が降ると言われる。雨が降ると塹壕は水びたしだ。体が濡れ、足が濡れると体調がくずれる。

ところで平坦な戦場を眺めると、綿畑に棉花にあらぬ白いものがチラチラしている。どうも大便の後の落とし紙のようだ。すると必ずと言ってよいほど、穴を掘らないから、大空の下に血便を見ることができた。

毎日前線へ行くと、必ずと言ってよいほど、こうした所で昼食をとることになる。飯盒の蓋をとるとアツという間もなく、白米のゴハンは黒ゴマを振りかけたようになる。

黒ゴマより大きい。ハエだ。防衛手段としては飯盒の蓋をずらせ隙間を作って、そこから箸を入れて飯を食うということになる。それほど戦場は不潔だから、下痢患者は絶えることがない。

かく言う筆者もついに血便にやられてしまった。十月四日午前四時に猛烈な下痢が始まったので、楊行から大宅宅



まで撮影に出かけていたが、早目に上海へ帰って虹口に一軒だけ残った民間の鈴木病院へ行ったところ、即刻入院を命じられた。

病室は三階で日本人のおばさんが付添婦についてくれた。「大阪毎日」の平栗記者も入院していたので、私と二人の面倒をみてくれることになった。

入院直後に工部局（共同租界の衛生管理も司る）へ大便を提出して検査の結果、恐れていたコレラ菌は見つからないとのこととひと安心。食事は重湯、おまじりでガツクリ力が抜けてしまった。そんな折りに大事件がおこった。

十月六日の夜であった。一日も早く退院したいと願って、夜も眠れないでいた七時頃、呉淞クリークの前線で聞き覚えのある「シュル、シュル」という音、迫撃砲弾が飛来する時の音だ。すかさずドカンという炸裂音。私と平栗記者のベッドの間で寝ていた付添婦がいない。逃げ出してしまったのだ。後に残されたのは、二人の下痢患者だけ。まだ全快していないので、フラフラして自力では立ち上がれない。こうなったら血便たれながら、迫撃砲弾に当たるのも運命かと、覚悟をきめた。

そうこうするうちに、「ドカン、ドカン」と続けて三発の迫撃砲弾が落ちてきた。ちよつと間を置いて、一階の電話がけたたましい音を立てて鳴った。それに答えて看護婦の声がした。大きな声で「万歳館に迫撃砲弾が落ちて怪我が

出たようです。先生にすぐ来て下さいと申しております。」万歳館とは虹口の日本租界の閑行路にある旅館で、軍の報道部が開設されていた。そのために陸軍将校や報道人の出入りがはげしく、中国側に重要機関とみられていたようだ。狙われたのであろう。

十月五日から入院生活を余儀なくさせられたが、八日には退院できた。支局へ顔を出したが、しばらくの静養を支局長から申し渡された。

虹口の日本租界を直撃する中国軍の砲撃はあなどれないものがある。日本租界を射程内に入れる地歩を占めている。しかし、虹口を迫撃砲で攻撃しても、大した戦果は得られない。いるのは陸戦隊に限られ、民間人はほとんどいない、あえてそこを攻撃するのは、中国軍の戦略に何らかの変化があるとみてよいだろう。

虹口の中でも日本兵が往来するのは呉淞路である。在留邦人も便利する日用品の商店が並んでいる。筆者もこの道を歩いていたら、前線で聞き覚えのあるチェコ機銃の流弾の音を聞いたことがある。そのようなことで、民間人がここを歩行中に迫撃砲弾の直撃で死亡するという事故が起きた。

当時は「報知新聞」の写真部員だった二村次郎君は、後に「東京日日」の写真部に移籍してきた。彼の語るところによると、二村君が「報知新聞」から上海へ特派された

戦場に尋ねあてた兵隊

時、従軍画家として岩倉具方画伯（明治の元勳・岩倉具視の玄孫）と同行した。岩倉画伯は上海でたまたま呉淞路を歩いていた時、中国軍の迫撃砲弾の直撃で死亡した。十月十四日のことであった。

この頃の中国軍の記録『抗戦簡史』によると、次のように記されている。

十月七日、敵は第三・第九師団をもって、優勢な砲兵、戦車の支援のもと、蘆溝浜へ呉淞クリーク北岸からわが第八七師及び第一軍正面で強行渡河を開始した。わが部隊はこれを狙撃し、激戦数日に及び、敵に甚大な損害を与えた。『戦史叢書383ページ』

*

筆者が鈴木病院に入院中の砲撃、さては十月十四日の砲撃など、中国側からみれば、それなりの理由があったことがわかった。

上海といえば黄浦江岸の共同租界を連想する。しかし、それより北、黄浦江の下流が揚子江に合流するあたりまでの三角形をした地域が戦場だった。その広さは約二十平方キロ。そこには、中国軍が日本軍を迎え撃つ抵抗陣地を縦横にかまえていたのである。

中国軍の記録『抗戦簡史』は、次のように書いている。

わが最高当局は、一・二八事件（昭和七年の上海事変）以後、敵（日本）の北方における侵略が止まらないので、事をゆるがせにできないと判断し、民国二十四年（昭和十年）冬、張治中にひそかに命じて南京、上海方面の抗戦工事を準備させ、戦争を避けることができなくなったとき、わが方は優勢な兵力をもって敵の不意に出て、上海の敵全部を殲滅してこれを占領し、じ後、敵の増援を不可能にしようと企図した。このため呉淞、上海周辺の各要点にひそかに堅固な工事を築き、わが大軍の集中を掩護させ、更に常熟、呉県において洋澄湖、滌山湖を利用し、堅固な主陣地帯（呉福陣地）を、また江陰―無錫間に後方陣地帯（錫澄陣地）を構築した。

民国二十五年、幹部参謀旅行演習を実施するとともに、龍華、徐家匯、紅橋、北新涇、真茹、閘北停車場、江湾、大場の各要点に包圍攻撃陣地を構築し、呉福（呉江―福山）陣地の増強、京滬

〔南京―上海〕鉄道の改築、後方自動車道路の建設、長江防備及び交通通信の改善、民衆の組織訓練等を実施した。

八月十三日、わが軍は上海根拠地を掃蕩する目的をもって攻勢作戦を実施した、第八七師は当夜滬江大学を占領し、第八八師は特志大学、五州公墓、八字橋、宝山橋等の各要点を占領した。
〔戦史叢書280ページ〕

このように、中国軍があらかじめ日本軍の攻撃を予想して、充分な陣地構築を施した呉淞地区へ攻撃をしかけたのだから、わが軍は苦戦を免れることはできなかった。

私が従軍したのは前にも述べた通り東京編成の特設第一師団であった。

編制をみると、歩兵第百一聯隊（東京）、歩兵第百三聯隊（東京）、歩兵第百四十九聯隊（甲府）、歩兵第五十七聯隊（佐倉）、騎兵第百一大隊、野砲兵第百一聯隊、工兵第百一聯隊、輜重兵第百一聯隊である。

こうしたことから「東京日日」では、読者が関心を持ちそうな郷土部隊のニュースを、戦場の兵士の中に求め、その中の一つに、劇団「文学座」の名優・友田恭助（本名・伴田五郎）の消息があった。

彼は東京という赤羽の工兵隊、すなわち工兵第百一聯隊（八隅部隊）の伍長だった。本社から前線における伴田伍長の奮戦振りを報じる記事と写真を送れという注文であ

る。東京本社社会部の中山善三郎記者と私がペアを組んで、広い戦場を捜し回った。

工兵第百一聯隊は、呉淞クリークの渡河作戦で、めざましい戦果をあげていた。しかし、われわれがその部隊を尋ね当てたのは伴田伍長が戦死した直後だった。すなわち、十月五日楊行鎮付近のクリークで渡河戦闘を指揮中に戦死したのであった。三十七歳だった。

止むを得ず、私は戦友の手によって建てられたその墓標を撮ったが、白木の墓標には「忠勇之士工兵伍長伴田五郎戦死之跡」と書かれてあった。

伴田伍長戦死の頃、現地に居合わせた本社・伊藤記者のルポ。

「喚く敵銃火の中を
対岸に躍る勇士

瀧藻浜クリーク渡河戦を見る」

〔上海戦線にて廿四日伊藤特派員発〕

「去る六日行はれた瀧藻浜クリーク渡河戦は今次上海随一の激戦であった。当時決死的従軍をした記者（伊藤特派員）は〇〇男児の意気を天下に示す同クリークの渡河決行を見るため〇〇部隊の最前線〇〇に三日間頑張り通し遂にこれを目撃することが出来た。ここは最前線とは八十メートルで対峙してゐるので敵手榴弾は絶えずわが塹壕の頭上

に土をひんむく。敵の迫撃砲は夜になればきつとわが塹壕の周囲に落下するが不思議とわれには当らぬ。敵の防禦工事は三日間見続けたために目をつむれば頭に浮ぶ、まづクリークの対岸に沿うて嚴重な鉄条網、直ぐその下に完全な交通壕が掘りめぐらされて要所に重機関銃の銃眼が巧に遮蔽されながらこちらを睨んでゐる。時々楠流の兵法をもつて薬人形をのぞかせる落着き振りもある敵である。何しろ日本の中心点から来た兵隊が攻撃を開始したというので敵も精銳部隊たる蒋介石直系軍を廻したとかで悠々たる守備振りには小面憎いほどだ。かうした態勢に対して〇〇部隊が六日未明決死的攻撃を決定したのである。記者は午前四時頭上をヒタヒタと歩む地下足袋の音に浅い陣地の夢を破られた。バラバラ竹の葉にかかるのは銃弾の音かと肝を冷やせば秋雨頻りである。〇〇工兵部隊が活動を始めると敵重機は喚くやうに火を吐く。如何に勇敢なわが将兵と雖も露出した態勢でどうしてこの猛銃火を逃れ得ようか。記者はハツとして塹壕の底にへバリついた。「南無弓矢八幡わが勇士の武運長久を護れ」と何回も心に念じたが、念願天に通じたか、敵機関銃と迫撃砲の小やみをはかって前方を覗けば、おおわが勇士はバラバラと四、五十名対岸に飛び、手に手に手榴弾に点火して塹壕内に投げ廻るのが見える。渡河船は直ちに引返しまだまた兵士を満載して対岸に乗りつける。この往復廿回、完全に目的を果し俄然追撃戦

に移り敵を圧して行く。陸海空軍はこれと協力空爆をつづけながら、更に敵を追った。〇〇部隊が上陸以来狙つてゐた〇〇進撃、日章旗が堂々とクリークを越えてはためくのを見た時、記者は腹の中から万歳を絶叫したのである。」

十万人の中から捜し出す

安否を気遣う家族にとって何らかの伝手を求めて、出征兵士の消息を求めることができれば、これに越したことはない。すなわち、戦場に出入できる民間人を知っていればである。

すなわち従軍記者がそれに該当する。従軍許可書には「戦場に出入して取材することを許す」とある。こうしたことを知った出征兵士の留守宅から、伝手をたよって新聞社へ兵士の姓名と部隊名が知らされてくる。本社からは戦線に近い支局へ連絡が入電する。すると支局長から、前線で取材している私たち記者やカメラマンに、毎日のように消息を知りたい兵士の名が伝えられてきた。

戦場の尋ね人は、軍隊生活の経験のない青壮年が主である。徴兵検査では乙種合格とかで、現役にはお呼びのなかった者たちである。召集令状一枚で、かねて聞かされていた恐るべき軍隊に初めて入ってきて、肩章は赤地に星一つ。

東京に本籍地のある者が召集され、上海戦線にいることは、すぐにわかったようだ。

たとえば歩兵第百一聯隊は加納部隊、歩兵第百三聯隊は谷川部隊というわけで、上海戦線からの新聞報道が情報源となっていたことは当然といえよう。また、私の従軍写真で、十月三日付の新聞に「山田部隊の砲撃」（上海市政府前面）のキャプションから、第百一師団の野砲兵聯隊が上海で中国軍と交戦していることがわかる。

こうしたことから「夏目漱石の次男・夏目伸六、歌舞伎俳優沢村宗十郎の四男・沢村三木男（戦後に文藝春秋社の社長となった）が鳥海部隊（輜重兵聯隊）にいるから、記事と写真を送れ」と本社から指令が来た。

東京の本社ではすぐにでも尋ね当てられると、思っていたかもしれない。しかし、上海戦線の五個師団の将兵、十万余人の中から二人の兵隊を探し出すのである。しかも戦線は二十キロ平方の広さである。

夏目、沢村両君の所属する部隊は、輜重兵第百一聯隊（東京・目黒）で、聯隊長は鳥海勝男中佐。この聯隊長は部隊の全将兵に觸體（どくろ）のマークを付けさせて、自ら「どくろ部隊」と称していた。

さて輜重部隊には輜重兵と輜重輸卒があった。この輜重輸卒をかつては軽んじて「輜重輸卒が兵隊ならば、蝶々となばも鳥のうち」などとかからかった時もあったが、この輜



戦場で尋ね当てた、沢村（左）夏目の両君。

重輸卒はのちに改称されて特務兵となった。十四年三月以降は、輜重兵二等兵と呼ばれることとなる。

いよいよ夏目、沢村の両君を探すことになったが、あてもなく広い戦線を探ね歩くことは、益のないことである。そこでまず鳥海部隊を探すこととした。第百一師団は、呉淞クリークに向かって左翼にいる。このことは呉淞鉄道橋から前線に物資を輸送するルートに鳥海部隊がいることを示唆している。中山記者と私が行ってみると、予想通り「どくろ」のマークを付けた兵隊たちを見つけた。

加納聯隊長の戦死

それらの兵隊たちは、物資を満載した荷車に馬を繋いで、前線へ向けて隊列を組んで行進していた。その兵隊たちの顔を見ると、明らかにしろうとで、おそろおそろ馬の手綱をとっている様子がよくわかる。悪路に轍をとられて後れかかると、あわてて大声で馬に気合いをいれていた。どの兵隊も銃を持っていない。腰に吊っている銃剣だけが唯一の武器だった。

この輜重隊の兵隊に二人の消息を尋ねると、部隊の中には有名人だったらしく、すぐにわかった。夏目君と沢村君の写真撮ることになったが、ただ御両人が立っているだけでは能が無いので、彼らの間に軍馬を入れて、夏目君が手綱を取っていると撮った。案の定、二人とも輜重特務兵で、早い話が馬が引く荷馬車に物資を積んで、馬の手綱を取って運ぶのが任務だ。

しかし、前線近くは銃砲弾が飛来し決して安全な仕事ではない。ドロンコ道を苦労して不足している弾薬を届けたら、食糧を届けたりした時、歩兵や砲兵からねぎらいの言葉をかけられるのが、彼らの大きな喜びだったようだ。

この時、十月十七日に撮った写真は、十月二十一日の新聞紙面に両君の健在を示す証として、故国の家族と対面したのであった。

*

この頃、中国軍はどうだったか、中華民国国防部史政処編『抗戦簡史』は次のように書いていた。

呉淞付近に上陸した敵は江岸陣地占領後、二十七日、ただちに殷行方面に進攻し、わが揚樹方面の側背を攻撃した。呉淞砲台の陥落後、宝山は挟撃を受け九月七日陥落した。彼我戦線は入り乱れ、戦況は混々としていた。

九月十一日になり、北は第一五集團軍が呉淞西方から月浦―羅店―涇界河の線において、中部では第九集團軍が蘆藻浜付近で、南部では呉淞―上海自動車道の一帯において彼我对峙した。十七日わが軍は部署を整えるため北站―江湾―廟行―羅店―双草墩の線に退却して守備に当たり、敵と作戦を継続した。

九月三十日払暁、敵全線はわが方を猛攻し、激しい争奪戦を展開した。敵の砲火が猛烈なため、万橋、敵宅、陸橋等の陣地は同時に敵に突破され、劉行方面の第一五師もまた苦戦に陥った。該師は死傷過半に達したが、依然として犠牲を避けることなく、現陣地を死守し続けた。

わが軍は態勢を整えるため、蕪藻浜南岸の陳行―広福―施相公廟―劉河の線に陣地を移行した。

このとき第十六・第十三・第九・第一百一師団、重藤支隊、李春山及び千芷山部隊等の全力が相前後して上海に到着し、その兵力は約二〇万以上となった。『戦史叢書282ページ』

*

蕪藻浜すなわち呉淞クリークは、呉淞から南下して上海へ向かう日本軍に対して、その進撃を妨げるように東西へ延びていた。したがって日本軍は呉淞クリークを、強行渡河しなければならなかった。ところが呉淞クリークは、中国軍にとっては天然の要害で、さらにトーチカと機関銃で強力に防衛されていた。

この頃、戦線を視察した参謀本部第三課の二宮義清少佐は、十月八日次のように報告している。

一、日本軍は、あくまで攻撃精神に徹し、あらゆる戦闘手段を尽くして攻撃戦闘を反復しあり、兵は強く、将校は勇敢なり。

(二・三、四は略す)

五、弾薬ことに砲弾欠乏し、十五榴は一日一中隊三〇発、十二榴

第一百一師団に従軍した「東京日日新聞」社会部の伊藤実記者は、加納部隊長その人の戦死を身近に見たのであった。

伊藤記者が本社へ送信した記事は、十二年十月十二日に掲載された。

初号の活字で「噫・加納部隊長」の横組。縦四段組で、

「上海血戦の貴き犠牲

突撃中名誉の戦死」

〔〇〇戦線にて十一日伊藤特派員発〕

「十一日午前十時四十分、前夜来追撃を続けていた上海〇〇戦線加納部隊長以下は血みどろの奮戦を続けるうち〇〇に迫撃砲弾落下、これがため加納部隊長及び副官和知少尉は戦死、その他十数名の戦死者を出した。上陸以来奮戦よく部下を指揮して勇名を馳せていた加納部隊長の戦死は全軍から惜しまれている」

〔陸軍省十二日午後四時卅五分発表〕

「上海戦線において奮戦中なりし加納部隊長は十月十一日優勢なる敵の守備せる最も堅固なる曹宅付近の陣地に対し率先陣頭に立ちて軍刀を振ひつつ突撃を敢行し壮烈なる戦死を遂げたり、同部隊は士気益々旺盛攻撃を続行中なり」

以上、現地から記事を送ってきた伊藤記者の報道と陸軍省発表記事を比較すると、おかしな部分がある。

は五・六発、迫撃砲も同程度である。この際、部隊数を減ずるも弾薬をくれという切実なる声多し。

六、近接戦闘用資材は、中国軍のものに比し、素質、数量ともに劣弱である。火焰発射機は効果が大きい。

七、常設師団の戦闘力は予想以上に強大である。特設師団は運用によっては更に戦力を発揮できるものではないかと思われる。

『戦史叢書382ページ』

戦局は緊迫の度を高めていた。たとえば中国軍の記録によると、

十一日以後、敵は一挙にわが蕪藻浜南岸陣地を突破して大場鎮を進攻占領し、南翔方面に向かい、わが南京―上海路を遮断しようとして猛攻を継続した。このため戦闘はますます激化した。わが軍の反撃により、敵は河畔近くに圧迫されるとともに各部隊は前後左右数段に切断された。しかし敵は、十四日から猛攻を開始したので、広福陣地の争奪が繰り返された。

『戦史叢書383ページ』

この中国軍の記録にあるように、十月七日以後は日中両軍ともに、呉淞クリークをめぐるのはげしい戦闘をくり返していたのである。上海戦線における日中両軍にとって、天王山とも言えるものだった。

この時、歩兵第一百一聯隊（東京）は加納治雄大佐の指揮の下で、呉淞クリークを目標に攻撃を繰り返していたが、聯隊長戦死という悲劇に遭遇したのであった。筆者と共に

伊藤記者は十一日十時現在、呉淞戦線にいた。そして、迫撃砲弾が加納部隊長の近くで炸裂。副官の和知少尉ほか十数名の戦死傷者が出たことを報じている。

ところが陸軍省の発表によると、曹宅付近の敵陣地に対して、率先軍刀を振るいつつ突撃中に戦死したという。こうした陸軍省の発表記事には、なんとなく粉飾のにおいがする。

ところで伊藤記者だが、呉淞の前線へ行ったのは九日だった。十日は雨降りだったが、伊藤記者は呉淞クリークの前線にあった塹壕に、加納部隊を訪ねて行った。この日は加納部隊の兵隊と一語に、塹壕の中、天幕の雨よけの下で泊まってしまった。足下の塹壕の底には雨水がたまって、身を横たえることもできなかった。

十一日、この日は上海の支局へ帰ろうと仕度をしていたが、はげしい迫撃砲の砲撃で塹壕から外へ出られない。そのうちに落下した迫撃砲弾の一発が、日本軍の塹壕内で炸裂。この時、加納部隊長が戦死したのであった。

加納部隊長以外の戦死者をたしかめ、伊藤記者は迫撃砲の攻撃が小止みになったところで、聯隊長戦死という大ニュースを持って楊行鎮へたどり着いた。そこから軍の車で上海へ帰り、全身泥まみれの姿で支局へ帰って来た。直ちに支局長に聯隊長戦死のニュースを報告すると、この第一報を原稿にして、本社へ打電してきたわけである。

昭和十二年十二月六日付の新聞で、加納聯隊長の遺骨が東京の原隊へ帰ったことが報じられた。

「征途の英姿今は亡し」

加納少将、吉川中佐以下の勇士

昨夜原隊にしめやかな通夜

「加納少将以下百五十柱の英霊を迎へた石本部隊（歩兵第一聯隊留守隊）では、五日午後四時から宮庭に仮設されたテント張りの霊舎でしめやかな御通夜を行った。」とある。この記事の中の「百五十柱の英霊」という文字は、日中戦争も初期の頃で検閲もゆるやかだったことを表わしているといえよう。

ところで、十月十二日の『飯沼日記』に次のようなことが、記されている。

加納大佐戦死約一時間前、師団参謀長宛報告要旨（十一日八・五〇）

1、連日降雨ノ為各種ノ連絡殆ト杜絶。
2、曹宅攻撃ハ手榴弾ノ投擲ニ依リ二火点ハ不十分ナカラ破壊セルモ尚多数存在シ十一日午前〇・三〇頃突入セルモ同時両正面ヨリ多数ノ敵逆襲シ来リ不成功ニ終リ吉川103へ歩兵第百三聯隊大隊長以下歩兵中隊長ハ両聯隊共ニMGへ重機長ヲ除キ全員未タ所在不明兵力ノ半数モ所在不明ノ有様ニテ当方二面スル曹宅部落縁端ニハ支那兵ノ行動スルヲ見ルヨリ察スルニ僅カノ兵力カ部落ノ奥深く進入シタルカ或ハ突入後多数死傷シタル

モノカト存セラレ搜索スルモ未タ明カナラス。

3、左正面ハ逆襲ヲ受ケタルモ頑強ニ抵抗既ニ銃器ハ使用ニ堪ヘサルモ白兵ト手榴弾ヲ唯一ノ武器トシテ平然トシテ戦闘、其頑固サハ部下ナカラ驚嘆ニ値スルモノナリ（昨夜死傷ナシ）。

4、兵中（一部ノ幹部ニモアリ）ニハ既ニ戦意ヲ失ヒ自ラ間違ヒタル振りヲナシ或ハ故意ニ「クリーク」北岸ニ後退セントスルモノアルハ只申訳ナク今ヤ三人ノ大隊長、中小隊長ノ大部ヲ喪ヒ僅カニ幹候出ノ伍長位カ中、小隊ヲ指揮スルコトトテ夜間戦闘ノ如キハ掌握殆ト出来ス。兵ハ敵ノ射撃ヲ受ケ或ハ傷者デモ出来レハ良イコトトシテ介抱ヲ名トシテ暗夜後退スル者少カラス。涙ヲ吞ンテ口惜シク存セラレ候モ相当幹部中ニモコノ思想ナキニアラス、深憂ニ堪ヘス。只小生ノ信頼シ得ルハⅢへ第3大隊ノミニ候、右衷情ヲ披瀝シ泣言ヲ申スノテハナク御耳ニ入ル。『飯沼日記』

今なおこの記事を読むと、筆者は心がうずくのである。呉淞クリークの渡河は、各師団にとつては絶対命令だった。中でも特設第百一師団には風当りの強い命令ではなかっただろうか。

十月十六日 101D胡家庄南岸ヲ占拠セル敵ヲ四方ヨリ「クリーク」ヲ渡リ（午後四・〇〇過）攻撃、一小隊ニテ突入シ午後一〇・〇〇迄白兵戦ヲ交ヘ約三百人ヲ刺殺セリ。其小隊長ハ予備少尉清水某ニテ敵ハ疲労シヒヨロヒヨロナリシト。『飯沼日記』

戦場の告別式

上海戦線では、日本兵の戦死体をあまり見かけなかった。しかし記録によれば「上海方面の陸軍の損害は、十月十四日現在で戦死三、九〇八人、負傷一五、八四三人、合計一九、七五一人」とある。『戦史叢書387ページ』

これら戦死者の遺体は、各部隊ごとに茶毘に付していた。のちに、榮えある南京入城の折り、首からさげた白布の中に四角い小箱をくるんでいた一団の兵隊を見たことがある。上海から南京まで、中国軍と戦いながら共に行軍して来た戦友の遺骨だろう。南京入城の喜びをわち合おうというのだ。

上海から南京まで約二五〇キロ。この間、戦死者の遺体を茶毘に付する情景は、軍の検閲で撮影禁止となっていた。しかし、たまたまその時の情況を目撃することがあったので、ここに筆をとることにした。

場所は、呉淞クリークと蘇州河の間。時は昭和十二年十月下旬。激しい渡河戦の後、呉淞クリークを渡って戦局は小康を得ていた。江南の秋の爽やかでなごやかな午後の陽光の中を、チェコ機銃のねらい射ちも無く、おだやかな時間が流れていたひとときだった。



第百一師団の津田部隊は、工兵の架けた浮き橋を渡って、胡家庄対岸に進出。『飯沼日記』の記述を裏書きするような兵隊の動きだった。十月十七日撮影。

枯れ葉を枝に残した棉畑を行くと、農家の庭先らしい小さな広場があった。十人ほどの兵隊と指揮官らしい少尉が一人。そこに軍帽をぬいだ坊主頭の伍長。少尉が何やら言う、この伍長は足下にあった背囊を引き寄せて、中から取り出したのは袈裟だった。

平時には僧職にあったが召集で下士官として従軍した人なのだろう。その人が今、戦場に在って、戦死者に供養の回向をしようとしているのであった。軍服の上に袈裟をかけて、同じく背囊から取り出した小さな鐘を左手に持った。「チーン」という、戦場では聞くことのなかった金属音がひびき、僧形の下士官の口から読経の声が洩れた。その声は静まりかえった戦場を戦死者の魂によびかけるように、静かに静かに地を這って流れて行った。

不信心な筆者にとって経文の意味はわからないが、哀悼の気持ちがいっぱいになって涙が溢れ出るのを止められなかった。

静かなこの新戦場に、はるか蘇州河あたりかチェコ機銃の音がパンパンと鳴ったのが、唯一の雑音だった。鐘の音が長く尾を引いて流れると、回向が終わった。

小隊長の号令が響いた。

「着け剣！」

兵隊たちが、銃の先にガチャリと付けた銃剣が光った。

「某以下四名（戦死者）に捧げ銃」

どこかに残されたのであった。

私が戦死した日本兵の遺体を初めて見たのは、呉淞クリークの渡河戦の頃だった。前線へ出るためには、まず棉畑を駆け抜けて交通壕へ飛び込まなくてはならなかった。そして最前線の壕まで辿って行って、狙撃される危険を冒し恐る恐る頭を出して写真を撮ることができた。



呉淞戦線で。左から連絡員、中央・藤田信勝記者と右・佐藤振壽。頭には戦死者の残した鉄帽がのっている。

次いで「立てえ銃」。

続いて「弔銃一発、弾込め」

「撃て！」

秋空に銃声がこだました。

戦場における葬送の式が終わって、その場を去ろうとした時、木材が積み上げられ、並べられた遺体が見えた。その側にすわっている兵隊の姿が目止まった。「一晩中かかって、遺体を焼く」という。

遺体の頭に当たるところに、鉄帽が四個伏せられて並んでいた。

戦場へ出入りするようになって以来、時にはチェコ機銃の弾丸に追われたり、迫撃砲弾に逃げ回ったりした。しかし、軍人でなかったために鉄帽はもらえなかった。私は鉄帽がほしかった。そこで、並べられた鉄帽の一つを指さして、

「これほしいけれど、貰っていいかな」

と尋ねたら、一晩かかって戦友の遺体を焼こうという兵隊が気さくに「いいですよ」とうなずいた。こうして戦死者の鉄帽は、それ以来私の頭の上にのせられて、南京まで行くことになったのである。

戦死者の冥福を祈りつつ私はこの地を去ったが、戦死することによってやっと平和を勝ち得た、これらの兵士たちに対する哀悼の気持ちは、頭上の鉄帽と共に長く私の心の

こうして中国名・瀟灘浜。日本軍が言う呉淞クリークの水面を眺める機会があった。この時クリークの対岸、すなわち中国軍側の堤、こちらから見ると向こう側の土手に、カーキ色の軍服を着た日本兵の遺体が、大の字なりにへばり付いているが見えた。

一緒にいた兵隊に、どうしてあの遺体を収容しないのか尋ねると、危険で近寄れないという。クリークの水流は揚子江の干満に左右されるので、流されないよう遺体の手を堤に杭を打ってしばりつけてあるのだそうだ。そして、一日も早く収容したいのだが、それを実行できないでいる心苦しさ、残念さを訥々として語ってくれたのであった。

軍服を着た骸骨

虹口の日本租界から、黄浦江に沿った軍工路を北上する。この軍工路は上海と呉淞を結ぶ主要道路で、途中この道路と黄浦江の間に公大飛行場があった。前にも述べた通りこの飛行場からは、艦上爆撃機、艦上攻撃機が日本租界を死守する陸戦隊を支援したほか、飛び立って五分もすれば呉淞クリークだから、激戦を交えている陸軍部隊に協力して、中国軍に痛烈な爆撃を加えることができるのである。

呉淞鎮から左折して西方へ進むと、楊行鎮の村落があっ

た。私たちはここで車で降りると、待ち合せの時間を運転手と打ち合せて、呉淞クリーク北岸の激戦地帯へ急いだ。その広さは約二十キロ平方。時々流れ弾が頭上を小鳥の鳴くような音を立てて、飛んで行く。呉淞クリークの方角で、チェコ機銃の発射音がすると、そのリズムに合わせたように、頭上を流れ弾が同じリズムで、空気を裂いて行くのがわかる。

発射音と流れ弾が頭上を通過する間のタイム・ラグが長ければ中国兵とは距離がある。しかし発射音のすぐ後に、流れ弾の音が聞こえる時は敵は近い。このような時は、小鳥のような鳴き声は聞こえず、いきなり身近にプスプスと無気味な音を立てて着弾する。

こうなると民家の陰を求めて、敵弾を避けながら細い農道を進んで行く。道の行く手に兵隊が倒れている。その側を過ぎる時、ちらりと見ると木綿の軍服、中国正規軍のダークグリーンだ。屍臭がただよっている。

敵兵といえども死体の顔を見るのはいやだったが、勇を鼓してのぞきこんで見ると、死体だというのに何やら口の中が動いているではないか。舌が動いているのかとみると、口の中だけでは、両眼の中にも何かが動いている。目を疑らずと、なんとそれは蛆だった。

前線の取材を終えて、約束した時間に車を待たせておいた駐車場へ着くと、この日はこれで切り上げて虹口の日本

租界へ帰ることにした。支局へ着いても中国兵の死体の蛆の動きがまぶたの裏に残って去らなかった。ことに屍臭が鼻についていて、何とかこれをぬぐい去りたかった。ふと思いついて、連絡員にたのんで香水を買って来てもらうことにした。

屍臭と香水の連想は、私の少年期の体験に根ざしていた。大正十二年、関東大震災の時である。当時、私たち一家は向島に住んでいたのだが、やはり新聞カメラマンだった父親に将来のための体験と言って、隅田川の土手に並べられた羅災者の死体を見につれて行かれた。死体を焼く煙と共に、身近にただよう臭いには閉口した。しかし、出発前に父親があらかじめ、香水を振りかけたハンケチを用意していたので、鼻を掩って、やっと死体を直視することができたわけである。十一歳の夏の体験だった。この香水が記憶の扉を開いて頭の中に甦って来たのだった。

翌日、連絡員からたのんでおいた香水を渡された。香水にしては、容器のビンが少々安っぽかった。薄緑色のガラスに漢字で「花露水」と書かれたラベルが貼ってあった。コルクの栓を外すと、ほのかに香りがただよって来た。中国女性が使う、香水というよりもオーデコロンだった。数日後この中国兵の死体の側を通る時、この「花露水」をハンケチに振りかけて自分の鼻を掩うと屍臭もやわらげられて、中国兵の顔を見ることができた。

中国兵の眼や口の中で動いていた、あの蛆はどこへ行っただろうか、全くその動きは見る事ができなかった。

呉淞クリークの攻防戦は、なお数日も続いていた。その間、雨が降ったりして、初秋の気配を感じさせるようになった。そんな頃、楊行鎮から前線へ行く道で、たびたびあの中国兵の死体の側を通ることになった。すると、どうしたことだろうか、すっかり変わり果てた姿になっていたのである。

まず顔だが、皮膚はすっかり無くなっていた。そして、灰色のシャレコウベがドイツ製の鉄カブトをかぶっている。さらに体の方とは見ると、雨に打たれた木綿の軍服の腹部はベタンコにつぶれている。胸部は肋骨が一本々々はっきりわかるし、腰から下は大腿骨や脛の骨が、軍服の上からも見える程だった。早い話が軍服を着た骸骨と思えばよいだろう。雨に打たれた軍服が骨に妨げられて、大地にへばり着いているといった感じだった。誰からも吊ってもらうこともなく、戦場にむくろとなって忘れられた中国兵を、敵兵とはいえ哀れと思うのであった。

その後、この中国兵の死体はどうなったのか。この中国兵はどこから来たのか、長く頭のどこかに忘れられないでいた。そして、『新唐詩選続篇』（岩波新書）の白居易の「新豊折臂翁」の詩に、戦死した中国兵の心情をうたった文字を発見した。

玄宗皇帝（八八五〜七六二）の頃、辺境の地・雲南へ軍兵を進めた時である。召集された兵士が戦死した。そのうたが「新樂府の詩」の中にあった。

身死魂孤骨不収

「身は死し魂は孤（ひと）りにて骨も収められず」

應作雲南望郷鬼

「應（おそら）くは雲南の望郷の鬼となり」

萬人塚上哭嘔嘔

「萬人塚の上に嘔嘔（ゆうゆう）と哭（な）きしか」

『吉川幸次郎、桑原武夫著書』より
この詩の中には雲南とあるが、これを江南とすればこの中国兵にふさわしいものとなるであろう。

上海戦場の二十四榴

楊行鎮は、呉淞の鉄道棧橋で揚陸された軍需物質を輸送する道路の要点となっていた。楊行鎮から呉淞クリークの激戦地域へは、砲車、輜重車などのほか、数万人とも思える兵士の列が往来していた。したがって、少しの雨でも道路はぬかるみとなり、人馬共に難渋した。

上海虹口の宿舎を出発して、毎日前線に通信取材する私にとって、これはお決まりのルートだった。ある日この道を行くと交通渋滞だ。輜重車が数十台止まっている。野砲

の段列も止まっている。路上でそれらの車輛部隊の間をすり抜けて行くと、渋滞の元凶がわかった。それは車輪の幅が三十センチもある大きな台車に乗せられた、バカでかい大砲の砲身だった。

近くにいた兵隊に尋ねると「二十四榴」で、下関要塞から持って来たという。後日の資料によると、四五式二十四サンチ榴弾砲だ。砲身長三メートル八十九センチ、砲身重量五、一九三キロという超重量の大砲だ。ともかく重いから砲身車、砲床車など数個の部分に分解して運ぶのだが、雨にぬかるんだ悪路の行軍は、さぞかし兵隊たちに苦勞をかけたことだろう。

しばらくの間この二十四榴が気になりになっていたのだ、その陣地を訪れた。隣りに十五サンチ榴弾砲の陣地があり、地上にコンクリートが円形に打ってあった。さらに数日経って行ってみると、このコンクリートの上にトロツコのレールのようなものが円形に設置してあった。そのレールの上を砲身を載せた砲架がグルグル回転する。

この二十四榴は蒋介石軍が構築したベトンのトーチカを破壊すると期待されたものだった。したがって「二十四榴」のキャプションを付けて、度々フィルムを本社へ送ったが、検閲で不許可になったのか、全く新聞紙上には出なかった。

カメラでこの二十四榴を追っているうちに、射撃を始め

するという情報を得た。すなわち大場鎮攻撃がたけなわになった頃である。私の従軍メモには「十月二十二日福井部隊（歩兵第百五十七聯隊）行き、李家橋最前線へ出る」とある。かねてから知っていた福井部隊へ行くと、果たして二十四榴の観測所の所在がわかった。教えられた道を行くと路上に色のついた電話線が横たわっている。この電話線について行けば、砲兵隊の観測所があることは知っていたので、行くことしばし。

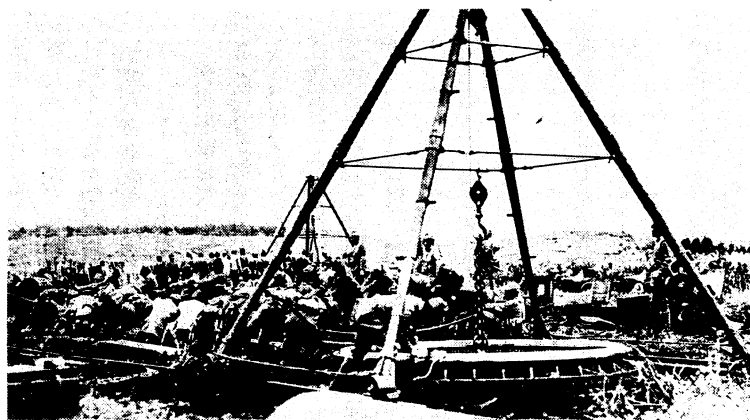
後方で大砲の発射音がすると、頭上をシュルシュルと空気を裂いて、敵陣に飛ぶ弾の音が聞こえた。前方には身を伏せた将校がいた。これぞ二十四榴の前進観測所だった。

中国軍の最前線は三百メートル先、ここを目標にしているのだが、二十四榴が炸裂するとカミソリのような弾片が、このあたりまで飛来するからと注意を受けた。

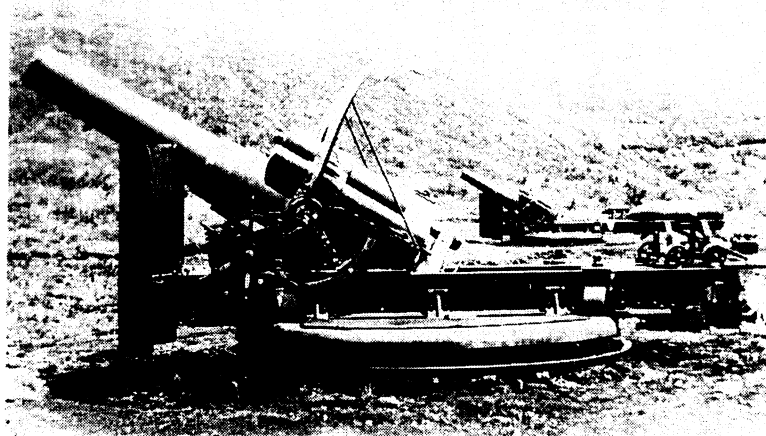
二十四榴の砲弾は使用制限があるとかで、まず側にある十五サンチ榴弾砲が発射される。その弾着を参考にして、距離・方向が決定される。この観測将校が電話で何か指示して後で、「二十四榴弾が来ますよ」と教えてくれた。そして「射て！」と号令を下した。

カメラは無限遠にピントを合せ、シャッター速度は50分の1にセットした、二十四榴の砲弾が敵陣に命中して、敵兵が空中にふき飛ばされたらそれを撮ろうというのだ。

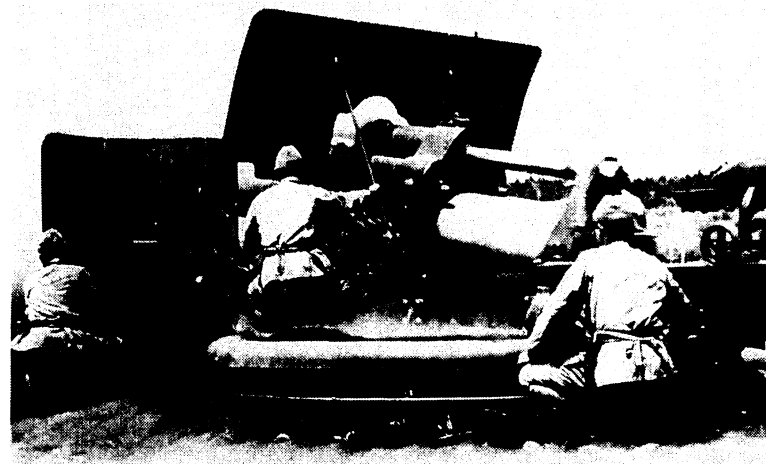
後方で発射音が聞こえたので、見てみると、あたかも炭



45式24榴を四脚10トン起重機でコンクリートで固めた砲床の上に組み立てる（大勢の兵士を見よ）。



やっと組み立ての終わった45式24榴。



射撃中の24榴（砲身が後座したところ）。

俵のような、黒い物体が音を立てて飛んで来て敵陣に落下したが、何の音も聞こえてこないし、空中に飛散する物体も、もちろん中国兵の姿も見えない。砲弾が落下した場所が軟らかい水田だったため、砲弾は炸裂しなかったらしい。

観測将校の親切な説明を聞いて、不発の原因は納得することができた。しかし私は、あくまでも二十四榴が敵陣を爆砕するシーンを撮影したい。するともう一度、二十四榴は射撃してくれることになった。

まず十五サンチ榴弾砲が発射された。その弾着を見た後で、何やら修正の数字を電話で放列へ連絡した。そして二十四榴が発射された。前にも聞いた大砲の発射音が聞こえ、空気を引き裂く音を残して敵陣へ向かう二十四榴の炭俵のような砲弾を肉眼で見ることができた。そしてその行く手にカメラを向けると、敵陣で弾着の炸裂音と共に、土砂が地上三十メートルの空高く吹き上げられたので、さすがシャッターを切った。すると観測将校の言ったとおり、炸裂した砲弾の破片がブーンと音を立てて頭上から私のまわりに落下してきた。

この時の写真は「東京日日」十月二十七日の紙上に出た。その写真説明には「福井部隊が占拠した西部李家橋から友軍の陳宅砲撃を見る（手前の柳が友軍の第一線）」とあった。

し、特派員の電報はもちろん、軍の幹部に個人的に勇を鼓してそれを指摘する者はいなかった。

上海従軍 “十時間”

上海戦線が膠着状態に陥った頃、戦地の取材や慰問をかねた人たちが数多く上海へやって来た。

「東京日日」社会部デスクの村田忠一さんが来た時だった。

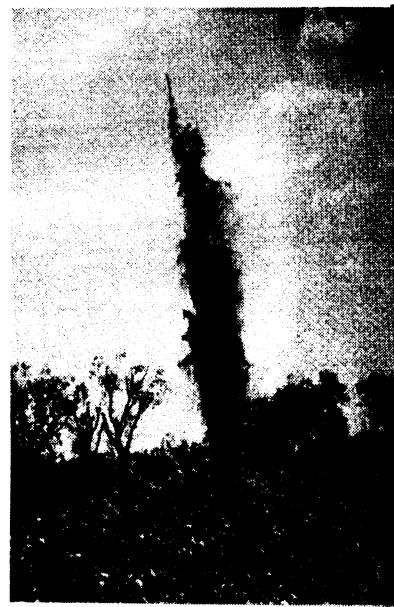
第一百師団の最前線を取材するため、中山記者、小生と村田さんは第五百七聯隊（福井部隊）を訪ねた。

激戦ではなかったが、チェコ機銃の流弾が激しく飛んで来た。少々前戦なれした筆者と、中山記者が最前線の方へ歩を進めると、村田さんが、「佐藤君、危ないからこっちへ来給え」と後方から声をかけてくれた。その村田さんのいる所を見ると、なんと生け垣だ。そこへ来るようにという親切心はよくわかったが、生け垣では流弾を防いでくれないのである。

ここで、民家の屋根に重機関銃を据えて交戦する日本兵の姿を撮った。

流弾を避けながら、我々の帰りを待っているはずの楊行鎮へ着いたが、約束の時間が過ぎたのか、社の車はいなかった。こうなると上海まで歩くほかはない。村田さんに

新聞には24榴とは出なかったが、歩兵百五十七聯隊前面の敵陣に巨弾が命中した。ただし土砂を噴き上げただけに終わった。



日本軍を迎え撃つ蒋介石軍は、クリークという自然の要害に加えて、縦横に掘りめぐらした塹壕からチェコ製の機関銃を猛射するほかに、機敏に移動する迫撃砲で、日本軍を苦しめた。

こんな時、日本軍にとって中国軍の反撃をくい止めるのは野砲、野戦重砲の射撃だった。そして虹口の租界近く、公大飛行場から出撃する海軍の艦上戦闘機、艦上攻撃機や艦上爆撃機の姿を見ると、地上の兵士は目をこらして敵陣に加えられる爆撃を見つめるのだった。

呉淞クリークの激戦を見て、従軍記者たちの会話の中には、しばしば砲撃による攻撃力の不足が指摘された。しか

その由を話して歩き始めた。

日が暮れて周囲が暗くなると、チェコの音がいやが上にも高く聞こえてくる。少々重くなった足を引きずって、呉淞鎮を過ぎると蒋介石が軍用に造成した軍工路の直線道路に出た。行く手は真っ暗で、遠くに共同租界の夜の光が、空に反射して明るい。

暫くすると砲声がする。黄浦江の軍艦「出雲」と陸戦隊本部から空襲に來た敵機を攻撃しているのだ。照空燈の光芒が夜空を撫で、右に左にと動く。

照空燈が敵機を捕えたのか、ピカリと反射する。高射砲弾が炸裂し、高射機関砲弾が光を曳いて、敵機に集中して行く。

軍工路を歩いているわれわれにとっては、不謹慎であるが、両国の火花を連想させられた。

敵機はどこへ投弾したのか、ドカンドカンと大きな音が出たが、後は爆音が遠ざかって行った。この夜の敵襲はこれで終わったらしかった。

十月十四日 好晴

101Dノ外各師団少シハ進ミタルモ何レモ一村落ヲ奪取スル程度ニ至ラス 司令官益々焦慮 夕刻敵機2（？）來ル『飯沼日記』

軍工路を歩きながら遠方から敵機の空襲を見たが、虹口租界の支局はどうだったか、一瞬不安が過った。その時、

われわれの後方から自動車のエンジン音がして、ヘッドライトの光が見えた。さっそくリュックのポケットから、とり出した社旗を広げて懐中電灯の光で照らし、自動車に止まってもらった。支局の電話番号を書いたメモを渡して、車が迎え来るよう依頼した。

二、三十分もすると、ヘッドライトを光らせながら、迎えに来た社の車に拾われて、上海支局へ着いた。

支局の編集室は、一種異様な雰囲気の流れていた。その中に見覚えのある顔だが、どうしてこの場に居るのか、一瞬とまどいを感じさせる顔がある。

それもそのはず、この人は後に「ぶらりひょうたん」の筆者として有名になった高田保さん。「東日」の社友で芸部の顔なじみだったからである。筆者が夕食を済ましていないことを知ると、従軍用を持って来た「おでん」のカン詰めを切って「佐藤君、食べないか」と、まるで子どもをいたわるようだった。

高田さんは歌舞伎俳優の坂東三津五郎丈と一緒に上海へ来たのだが、上陸早々の先刻の空襲にはショックを受けたようだった。

高田さんの空襲ショックはいささか異様で、早い話が度々空襲を受ける上海には一刻もいられない。長崎へ即刻帰りたいと言う。だが、連絡船は明後日になる。そこで支局員にたのんで、いちばん早く上海を離れる船便を探して

もらった。

その結果、新聞記者たちと親交のある海軍武官室の重村大尉の尽力で、翌日上海出航の駆逐艦に便乗して帰国できたそう。彼は「上海従軍十時間」という最短記録をうちたてた。

なお、三津五郎丈は、林記者に伴われて、呉淞の前線取材し、「文学座」俳優・友田恭助の戦死の跡をねんごろに吊ってきた。

復旦大学占領

楊行鎮から呉淞クリークへの道は、通いなれた道だった。そして第百一師団司令部や前線の部隊を足しげく訪れたが、はなばなしい戦闘の写真は撮れなかった。

しかし、前線の兵隊がどんなに苦勞をしているか、少しでも知ってもらえたらと思って、「雑観的に」レンズを向けた。

その中で目を引いたのは湯タンポを数個、振り分けにして肩にかけている兵隊だった。湯タンポはブリキを小判形にして、表と裏には波形の起伏がある。冬、フツンの足の方に入れて、中のお湯で暖をとる道具だ。それが上海戦線に現われたのにはビックリした。聞くと、前線で塹壕戦の仲間に飲んでもらう水を運んでいるのだそう。

兵隊の水筒は小さくて、残暑の中で戦う兵隊には水が足りない。湯タンポで飲料水を補給しようというのだった。それにしても、どこからこんなに大量の湯タンポを集めて来たのか、記者仲間の話題になったのである。

楊行鎮から始まる呉淞クリークの前線写真取材は、マンネリになってきたようだ。その点、江湾の谷川部隊へ行くのは、流弾の危険もないので息抜きになった。ところが、十月二十四日はちがっていた。

このところ江湾方面の戦況が進展しているような兆候が見えていたので、競馬場の谷川部隊を訪ねてみた。それまでは静かだった部隊の様子が変わっていた。ピンと張りつめていた糸が切れたようだ。昨夜の攻撃で近くの復旦大学が落ちたというのだ。

谷川部隊といっても、ここには一ヶ大隊だけで、呉淞クリークで戦っている第百一師団主力とは離れていた。復旦大学にこもる中国軍と対峙していたのである。

復旦大学陥落というので、大至急駆けつけた。その時に撮った写真を新聞の切抜きで見ると、大学の壊れた建物の前で万歳する日本兵。大学の建物に突入しようとする日本兵を背後から撮ったもの、大学の建物の二階から歩兵砲で射撃する日本兵。大学のキャンパスから迫撃砲で敵を攻撃するシーン、大学正門前の日本兵など。

呉淞クリークの戦場では撮れなかったものが、撮れてい



復旦大学占領・谷川部隊の戦況 廿四日早く一帯に突進する同部隊の戦況

復旦大学の占領は、郷土部隊・第百一師団にとって初めての戦果だったので、「東京日日」は大きく紙面で報道した。

前線で戦う友軍兵士へ妙案。湯タンポに入れて水を運ぶ。



た。上海戦線では珍しかったとみえて、新聞二分の一大の紙面で、写真号外になっていた。

十月二日に「東日」社会部の林謙一記者が、上海へ来た。たまたま二十四日復旦大学陥落が、彼の初陣だったのだらう。特電記事になっていた。

*

抗日復旦大学一番乗り

〔上海〇〇にて廿四日林本社特派員発〕

数年来抗日テロの魔手を操ってゐた復旦大学も遂に完全にわが掌中に落ちた。廿四日午前九時〇〇部隊が復旦大学を一気に占領余勢を駆って江湾鎮へ雪崩こむ、皇軍の一員となつて佐藤振壽写真班、石津本社連絡係員及び記者（林

戦場の銀シャリ

特派員）は復旦大学一番乗りを敢行した。〇〇部隊長から「早く来たネ、ぐずぐずしないで復旦に入らう」と導かれるままに流弾が楊柳の枝をへし折って飛ぶ中を身をかがめて走った。同部隊から立派な舗装道路路に五百メートルも前進すると灰色の柱に鉄扉物々しい復旦大学の正面とその正面道路越しに建築中の家屋がある、部隊長以下われわれはまづこの家屋に飛び込み約廿分間伏して待った。復旦大学内は数組の将校斥候が拳銃と手榴弾を揮って残敵を掃蕩中である。校庭にたった今上げたばかりのポールに高く翻転と翻転してゐる日章旗の青空に映る美しさ。同大学裏倉庫から発した火焰はさながら抗日の末路を火葬するが如く大学本屋をなめてゐる。

大砲を撃つと戦場に雨が降ると言われる。雨もよい曇り空の下で、十五センチ榴弾砲や野砲が呉淞クリーク対岸の中国軍を砲撃する。殷々たる砲声が中国軍のチェコ機銃の連発音を圧して、戦場の空に響き渡ると、よく雨が降った。雨が降り続けると、揚子江が運んできた砂泥が堆積した三角州上にある上海地域は、地表がたちまち汁粉のようになった。ことに砲車や輜重車が往来する道路は、地表の土がこねまわされ膝頭までズボリと沈んでしまふ。

日中両軍の攻防戦たけなわの呉淞クリークから五キロくらいのところ、楊行鎮の村落がある。前にも書いたが、ここから徒歩でよく前線へ取材に出かけた。汁粉のような路を過ぎると、棉畑の中に竹やぶにかこまれた東金宅や曹家宅などの農家が点在している。

呉淞クリークの中国軍が射ちまくるチェコの機銃弾も、ここまでくると勢いのない弾道音を発して飛んでいた。したがって、点在する農家は日本兵にとっては安全地帯で、ここで炊いた米飯を前線へ送っていたりした。

雨が止んだある日、まだ道路がぬかるんでいたが、ニュース映画の川口定夫カメラマンと、前線へ取材に出かけた。虹口にある社の支局を午前九時出発。楊行鎮で自動車を下りた。帰りの時間を午後五時と運転手に約束した。

川口さんは戦前から上海に在住していた人で、上海に戦火が発生すると、アイモカメラを持ってニュース映画の取材に、囑託として従軍していた。したがって日本租界周辺での取材では、知り尽くした横丁から横丁へと駆けめぐり、すぐれた戦争シーンを撮ってきた。

筆者より十五歳ほど年長者だったし、戦場における危険を巧みに避けてくれるので、後からついて行くと安心だった。そんな川口さんと呉淞クリークの近くの日本軍の姿を、共に撮影しての帰り路だった。

棉畑の中の農家の裏へ回ると庭へ出た。その時いきなり

「新聞屋さん、いい時に来たなあ。今、白米を炊いたばかりだから、食べて行かないか」という声がかかった。見ると、この農家のナベで炊いたと思われる銀シャリが、何やらお鉢らしい容器に輝く銀色の山をつくっていた。

食欲をそそられたことは言うまでもない。兵隊たちの親切な言葉に乗ってご馳走になろうとしたら、川口さんが目くばせして私を引き止めるのだった。

川口さんの視線の行方をたどると、銀シャリが盛り上げられているのは五目めしを作る時に使う「すし桶」のようなものだった。三本の脚があつて、ちょうど低い椅子ほどの高さである。朱塗りで、金色に塗られた竹のたがで締められている。

美しさに兵隊たちはひかれて、炊きたての銀シャリを移して、お櫃の代用にしたのだらう。しかし、中国人の生活習慣をよく知っている川口さんにとって銀シャリを入れるなど、とんでもないことである。

すなわち、この品物は「浴桶」(Yutong)と呼ばれる、中国女性の嫁入り道具の一つである。元来、中国人は日本人のように、入浴の習慣はない。玄宗皇帝が楊貴妃と、華清宮に遊び、貴妃が湯浴みしたことは、白居易の唐詩でよく知られているが――。

「春寒くして浴を賜う華清の池

温泉の水は滑らかにして 凝脂に洗ぐ」

楊貴妃は温泉に入ったが、これは玄宗皇帝という大バトロンがあったること。

そこでこの「浴桶」が登場することになる。すなわちこの生活用品は、まず洗面から始まり、全身に及ぶ。終わりにこの浴桶に腰かけて、女性自身を洗ったりするそうだ。便器まがいの用途があるのだ。こうしたことを川口さんは知っていたので、浴桶に盛られた銀シャリを敬遠したというわけだ。

迎えに来る杜の車との約束があるからということ、銀シャリは辞退させていただくことになったが、しかし、戦場の思い出として、長く記憶に残ったのであった。

「日軍百萬上陸杭州北岸」

十一月六日、筆者の日記によると、上海の陸軍報道部が杭州湾上陸のアドバルーンを揚げるといふ。閔行路の萬歳館へ行って馬淵逸雄中佐と掲揚地へ同行した。馬淵中佐が後に書いた『報道戦線』（改造社刊）によると、

歴史的杭州湾敵前上陸の「日軍百萬上陸杭州北岸」については、「百萬」の文字に就いて相当の異論はあったが、これが「五萬」とか「十萬」では何の力もなくなる。金子中佐が非常に熱心に指導して男十三名女二名で懸命に縫ひ上げ、やっと六日午後八時、「大軍」の意を強調して、萬歳館屋上に掲揚した。

落下したので、これを捕獲した」と報じていたそうだ。中国軍としては租界の同国人に対して、面子を失ったことだろうが、わが軍の宣伝としては、なかなかのものであった。

陸軍中央部は上海方面の膠着状態を打開するため、昭和十二年十月二十日 第十軍を編成して杭州湾から右側背に、別に第十六師団と重藤支隊を白茆口から左側に迫らせ、上海周辺の十五個師の中国軍を包囲撃滅することにした。杭州湾に奇襲上陸した日本軍は華北の二個軍・七個師団に対して華中戦線は二個軍・九個師団となった

第十軍（軍司令官・柳川平助中将）は華北から第六師団と國崎支隊、満州から第十八師団を転用、さらに第百十四師団を編入した総計十一万人、一五五隻の輸送船に分乗した、煙幕を張って輸送船団を第四艦隊の艦艇が護衛した

第十軍主力は十一月五日未明、杭州湾金山衛城附近に無血上陸、困難な地形を克服して北進、八日までに亭林鎮・金山・楓涇鎮東方など、黄浦江岸に達した、杭州湾は干満差五メートルの難所として知られている。

この船団の護送のため、海軍は第三艦隊を第三・第四艦隊に分離したのであった。

『一億人の昭和史』

結果的に見て、この文字が一番評判よく、アド・バルーン宣伝中の白眉であった。

ついでそれを、蘇州河対岸の敵前にも掲揚しようというので、上海西郊、豊田紡績工場北方〇・五軒の地点に運搬した。敵は怒ったの怒らないの、六日午後五時であったが、銃砲の猛射間断なく、浮揚数分にして、惜しいかな撃墜された。

写真を撮ろうと馬淵中佐の車の後について現地へ行った。地上に「日軍百萬……」の文字を縫い付けた三十センチ角くらいで、長さ二十メートルもあっただろう。バルーンに水素ガスを充填するとすると昇っていった。昇りきった時「日軍百萬上陸杭州北岸」の文字が、夕方の風にヒラヒラなびいていた。すると、すかさずチェコ機銃の音がする。おそらくバルーンを狙ってだろう。すると掲揚地を狙ったのだろうか、われわれの近くに迫撃砲弾が落下し出した。

このあたりには蘇州河渡河のため日本軍が待機していた。そこへ思わぬ中国軍の砲撃が加えられたので、兵隊が飛んで来てアド・バルーンを揚げるのを止めてくれという。撮影どころではなくほうほうの体で退散した。

後日わかったことだが、敵弾がバルーンの綱に当たって切れてしまふ。北風に乗ってフラフラと敵陣に落下してしまつたという。翌日の租界の抗日新聞は、

「華軍は日本大気球を撃墜した。日本大気球は華軍陣地に

白茆口へ敵前上陸

上海地域で中国軍と交戦していたのは、日本軍の第十一、第三、第九、第一百一、第十三師団、十一月十四日まで中国軍の死傷者は、戦死九、一一五名、戦傷三一、二五七名、計四〇、六七二名と記録された。

上海戦線から中国軍が敗走すると、各師団はいっせいに追撃を開始した。

この時第九師団は高家湾（上海西方約八キロ）付近を出発して、主力をもって滬寧鉄道に沿って西進し、十五日崑山に到着した。



敵前上陸決行前の一瞬 上海西郊の白茆口にて撮影

上海派遣軍司令官は十一日夜、主攻を滬寧鉄道（京滬線）北側地区に保持して、当面の敵を撃破し、大倉―崑山の線に向かい追撃するように部署し、各師団は十二日、いっせいに追撃を開始した。『戦史叢書404ページ』

この間私は呉淞の上流にあたる揚子江岸の白茆口に敵船上陸する重藤支隊（支隊長重藤千秋少将、台湾守備隊基幹）と共に、十一月十二日呉淞の鉄道栈橋から台東丸に乗船した。

十一月十三日、重藤支隊は白茆口西方に進出した。

艦砲射撃のち軍用船の甲板から、縄梯子で「大発」と呼ばれる上陸用舟艇に兵隊が乗り移る。舟艇が一斉に敵岸めがけて行く。

第一波、第二波と舟艇が発進して行ったが、従軍記者は危険の少ない第三波と定められた。敵陣で機銃、小銃の音がひびく、戦況が気になるので甲板に出てみる。時々流弾が頭上を飛び去る。

暫くして第一波の舟が帰って来た。舟底には血にまみった日本兵が横たわっていた。あんな姿にはなりたくない、無事に上陸したいなどと祈りつつ、第三波の大発に乗りこんだ。

舟の底に腰を下ろすと、舟の厚い縁は頭上三十センチはある。敵弾が直撃しない限り安全だと思った。艇尾で操船

そして、部屋のあるところにロウソクを灯して、まるであかりの御殿の中にいるよう。しかも二ワトリも入手できたので、鳥スキもどきの、豪華な夕食だった。

十一月十四日

軍主力ノ追撃ハ太倉、崑山ニ迫リアリ、重藤支隊ハ昨夜一一〇頃梅李―支塘道上其中間地点ニ進出、本日午前16時参謀ノ海軍機ニ依ル偵察ノ結果、梅李ハ火災ヲ起シ味方ランスキ部隊同地西南方約二キロヲ常熟ニ向ヒ前進中ナリ『飯沼日記』

十五日、十六日は梅李鎮から進んで王柳橋で泊まると、夜半、第十六師団に従軍の光本氏が尋ねて来た。光本氏は「大毎」京都支局員で第十六師団に従軍して来たのである。

十六日は雨が降って、少々寒気を感じるくらいだった。敵は常熟に大兵力を集結しているためか、重藤部隊の進出は意のように行かず、十七日も王柳橋にとどまっていた。

十二日の上陸以来の写真原稿を持ってきたままだし、同行した浅海一男記者も記事を送稿していなかったもので、上海へ帰ることにした。梅李鎮から揚子江に注ぐクリークを、平和時には客船だったと思われるポンポン船で下った。揚子江岸に着くと海軍艦艇に連絡する小屋があって、ここに下士官が一人で番をしていた。上海へ帰る艦艇に便乗を依

していた艇長は、敵弾が命中し船底に穴があいて水がもれて来たら、親指でその穴をふさぐようにと命じた。敵岸は遠浅で舟脚が止まると、全員が河に飛び込んだが太ももまでの深さだ。河岸まで約百メートル、敵弾は来なかった。舟から荷物を揚げている兵隊に一風変わった兵隊がいた。銃剣も持たず防暑帽をかぶっている。

上陸して彼らと話したが、なまりのある日本語を話す。仲間同士の会話は聞きなれない言葉だった。重藤部隊が台湾から連れてきた高砂族の軍夫だそう。

この夜は王巷の重藤部隊本部に泊まった。さらに北支から抽出された第十六師団（京都）も、十一月十三日十五時から、白茆口上流に上陸。重藤支隊と共に常熟に向かつて前進した。

翌十四日朝八時、尖兵と共に王巷を出発したところ、梅李鎮前面で敵と交戦したがこれを撃退、午後三時には古い塔のある梅李鎮に入った。

やや広いクリークに沿って、塔のある梅李鎮の部落へ行軍する日本兵の姿は、緊張感に欠けるころはあるが、戦争写真として手ごたえのある作品となっていた。

この夜は梅李鎮の部落の中でも、一番大きな民家に泊まった。この家から二、三軒先にロウソク屋があった。無人だったので太目のロウソクを数十本仕入れてきた。

頼。無電で連絡すると許可が下りた。

沖の方から迎えるランチが来た。この下士官もこの日の任務が終わったというので、われわれと共にランチで艦へ帰った。艦は軽巡洋艦「北上」。排水量五、一〇〇トン、搭載水上機一機だった。われわれ「東日」、「朝日」の記者団



梅李鎮クリークに影を映す古塔は、上海戦線では見られない風景。

は腹をすかせていた。乗艦すると甲板士官の気配りか、烹炊兵が来た。

艦では夕食が終わっているのに、新しく準備するという。用意された夕食は、一人当たり玉子三個分のオムレツ。お新香と銀シャリは余るくらい、そして熱い番茶。寒い川風に吹かれてクリークを下って来て、温かい艦内で手足を伸ばしたうえ、この夕食には感激した。

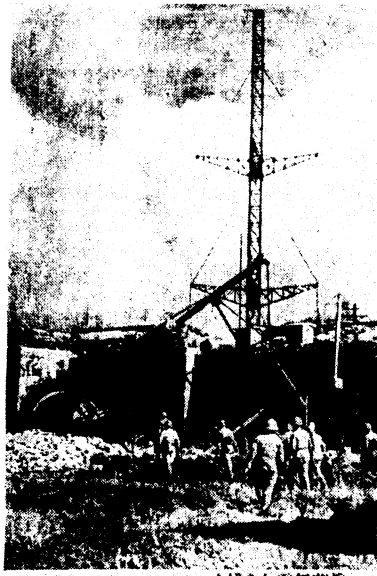
翌日、まだ日の出前の暗い頃、水兵が起こしに来た。この「北上」より先に上海へ着く艦があるから、そちらへ移乗したと言う。二つ返事で身仕度もそこに甲板へ出る。泡立つ揚子江の水面に小さなランチが一艘。縄梯子でランチに乗り移ると、どしりと動かなかった「北上」とは大違い、その動揺のはげしいのなんの。ランチの客室はキャンバスで覆われただけ、座席は木製。操舵手の一等水兵がヒモを引いてチンチンとベルを鳴らすと、操舵手の前の機関員の水兵の操作でランチは走り出した。しかし荒れ狂う水面で、ランチの上下動は激しい。チンチンチンはエンジン停止の合図、外を見ると揚子江の水面からそびえ立った城廓のような艦。タラップを昇ると、そこは軽巡洋艦「大井」の甲板だった。導かれて士官室に入って、軟かい椅子にすわると急に睡くなってしまった。

「もうじき上海ですよ」と起こされ、甲板へ出てみると艦は揚子江から黄浦江へ入っていた。見覚えのある呉淞鉄道

し、従来守備に任じてきた各師はいないし三個の突撃隊を編成し、当面の敵を攻撃して各路軍の進攻に協力することになった。

二十一日夜、わが全線は攻勢を開始した。各方面とも若干の地歩を拡大したが、二十二日朝から、敵は陸海空の全力を挙げて反撃してきた。このため、わが軍は二十三日から逐次後退し、ついに主力は二十六日蘇州河南岸に撤退、次いで三十日新涇鎮以南で抵抗を継続した。この際、わが方の撤退掩護の任務をもって閘北四行倉庫を死守する八百の勇士はついに孤立となったが、命により撤退しかつ英国の好意により租界内に退入した。

三十一日、敵は蘇州河を強行渡河して数カ所の拠点を占領した。わが方はしばしば反撃したが、敵は死傷を避けず頑強に抵抗した。じ後、彼我両軍は該線付近において約一週間争奪戦を繰り返した。



真茹無線電台を抜く。

棧橋。あの向こうでは戦いだと思うと、軍艦に乗って安心感に包まれて上海のバンドに接近しているわが身の変化に気づくのであった。

十二日の敵前上陸から数えて八日、十九日に上海へ帰着した。その間野宿こそしなかったが、前線生活の連続だった。酒はもちろん飲めなかったが、白い御飯にもめったにはありつけなかった。

八日振りに上海へ帰ると、何やら心休まる思いがして、前線の疲れをいやせろと思ったら、そうはいかなかった。田知花上海支局長から「明日は早く崑山へ行って下さい。蘇州が陥落したけれどカメラがいなかった」と言われた。

蘇州河渡河、中国軍退却

筆者の十一月十三日、白茆口敵前上陸従軍の前後に、上海戦線は大きく変化していた。中国軍の記録『抗戦簡史』によると、

十五日以降は、蕰藻浜南岸へ中国軍側で連続激戦となった。

敵は大場鎮を占領し、わが東正面作戦軍の側背を脅威しようとしたが、ちょうどわが第二一集團軍が到着して陣地を固めた。

わが軍は蕰藻浜南岸陣地を奪回するため、全線総反攻を企図し、第四八軍を第一路、第六六軍を第二路、第九八師を第三路と

返し、双方ともに死傷多く惨たんたる状況であった。

十一月七日、敵の後続部隊は陸続として増加し、攻勢はいよいよ猛烈となり、わが蘇州河南岸陣地は苦戦に陥った。更に敵の三個師団が杭州湾北岸に上陸し、上海陣地の側背に迫ったので、わが軍は九日から逐次転進を開始した。『戦史叢書383ページ』

筆者の従軍メモには、

「二十六日、百一師団行、大場鎮入城の予定なるも、三師団先に入城する。」

「二十七日、三師団行、大場鎮、真茹無線電台、真茹駅行、三師団司令部泊り。」とある。

大場鎮には深さ十メートルの戦車壕、真茹無線電台構内には大きなプールがあり、水がきれいで兵隊たちが塹壕戦の泥を洗い流していた。

上海上陸以来苦戦の連続だったが、予想外の大勝利で道行く日本兵も晴ればれとした顔で、足どりも軽やかだった。

二十六日、軍は大場鎮を攻略し、滬寧鉄道を遮断し、二十七日蘇州河の線に達した。谷川支隊（長 歩兵第百三聯隊長谷川幸造大佐）は江湾鎮付近を突破してその南西地区に進出し、二十七日、第百一師団に復帰した。海軍特別陸戦隊は、二十七日閘北一帯を占領し、これが掃蕩を完了した。『戦史叢書380ページ』

たまたま中国軍から分捕ったチェコ機銃をブラ提げた一団がやって来たので、チェコ機銃を肩に行進してもらった。この時の写真は後日、『一億人の昭和史（日本の戦史 3・日中戦争）』の表紙になった。



足取りも軽く チェコ機銃を肩にして行く。

戦場の銭（ぜに）

上海租界の虹口から外へ出、ガーデン・ブリッジを渡って、イギリス租界の繁華街へ行かないかぎり、あまり金を使うことはなかった。

もっとも虹口の日本租界では、前線から帰った兵隊相手の飲食店や写真機店が商売をしていた。敗戦後のタケノコ生活で米に換わってしまったが、ライカDⅢ・エルマー五〇ミリF三・五付きも呉淞路の店で購入したものである。

虹口から呉淞クリークに沿って楊行鎮へ行くと、もと商店街だったらしいが、戦況が激しくなった頃には、何もなかった。

ところが呉淞から楊行へ行く途中、ちょっと広い空地を通りかかると、なんとそこでは何やら荷物を満載したトラックに兵隊たちがむらがっていたのである。

よく見ると運転台の上に小旗が立っていて、そこには「酒保」という文字があった。近くに野戦病院があったせいか、白衣の兵隊もその中にいた。兵隊の買った品物を見ると、「ヨウカン」、「サイダー」、「センペイ」など、まるで子どものおやつである。

ほかに「ミルクキャラメル」もあったが、とにかく軍の加給品にはない品物ばかりである。恐らく上海の商人が軍

の許可を得て、店開きしたものだ。上海と長崎の間には一日置きに連絡船が往復しているのだから、長崎で商品を仕入れて、それをさばればよい。トラックは高価だが、共同租界で入手できる。

この野戦酒保の値段を私は知らなかったが、日比野士朗著『呉淞クリーク』（中央公論社刊）によると、呉淞野戦豫備陸軍病院は「船の病院」の別名で呼ばれ、黄浦江を航行する汽船を崩れ残った岸壁に繋いだものだったが、船の酒保では一升一円五十銭の酒、一本三十五銭のビール、十五銭のサイダー、梨が一個十五銭、リンゴが十五銭から二十銭ぐらい。ヨウカン一本二十五銭、食パン一斤四十五銭、パイナップル罐詰四十五銭が飛ぶように売っていたそうだ。

ささやかな品であっても、ヨウカンやサイダーは内地と目に見えない糸でつながれている。さらにどこを向いても物を買えない、すなわち銭（ぜに）を使えない戦場の兵隊にとっては、ささやかな購買欲を満たす快感を味わえる。そして、ちょっとした食欲や味覚も満たすこともできるのであった。

*

話が前後するが南京が陥落して二、三日たつと、難民区の外側に面した広場は、物売りの数が増えてきた。その中に西瓜のタネを売っているのを見つけた。東京にいた時、

第八十九百九千一第

(12月19日)

野戦 移動 酒保



野戦移動酒保

（上掲写真にて）本誌本誌本誌本誌本誌本誌本誌本誌本誌本誌

十二年十月二十一日付東京日日新聞朝刊より。



田口光男氏提供

中国料理屋で出されたあの「水瓜子児」だ。新聞紙の切れ端に小さい山盛りで十銭だという。ポケットには上海から持って来ていた小銭があったので、十銭玉をとり出して払った。南京まで来て、やっとお金を出して買物ができたわけである。

これは買物ではないが、行軍している兵隊から思わぬ紙幣を見せられたことがあった。「新聞屋さん、南京落ちたらこのお金使えますか」といって取り出したのは、新券のバリバリ。刷り上って紙幣のサイズに裁断したばかり。発行銀行名は「冥国銀行」。

上海の共同租界へ行って、日本銀行券で買物すると見なれぬ銀行券で、釣銭を受け取ることがあった。交通銀行とか農民銀行だとかで、汽車の絵や、働く農民の絵が印刷されていた。これらの紙幣は、上海市内ではどこでも通用した。

さて「冥国銀行券」だが、これは通貨としては使用できない。なぜならば、それは葬式の時だけに使用するものだから。すなわち葬列が墓所へ進む時、死者の霊があのだ世で、お金に困らないようにと、葬列の先頭で撒かれる紙幣である。

第十一師団丸亀聯隊の下士官で、上海に敵前上陸し呉淞クリークで戦った三好捷三の『上海敵前上陸』（図書出版社刊）の中に、面白いことが書かれていた。

「中国兵の死体を見ると、例外なく（冥国銀行）と印刷された紙幣と、蒋介石の写真を持っていた。冥国銀行券などというものを持っていることは、私たちには理解できなかった。あの世の銀行のことであろう。自発的にそれを持っていたのか、軍から強制されたのかは知らないが、死んでからあのだ世でお金に困らないように、と信じて持っていたのなら、中国兵の心情があらわれである。」

崑山から鉄路を歩いて蘇州へ そして無錫へ

十五日崑山を攻略し、蘇州街道を急進した第九師団の歩兵第三十五聯隊（富士井部隊）が、夜来の嵐を衝いて蘇州へ入ったのは十九日朝。中国兵は、雨外套を着た日本兵を前線から退却中の友軍と誤認したほどだった。

こうした部隊のいる蘇州へ、白茆口から帰ったばかりの筆者は行くことになった。

上海派遣軍司令官は、軍主力が蘇州河の線に進出すると、上海市を完全に封鎖するため、引き続き蘇州河南岸の敵を攻撃するに決した。すなわち主攻を北新涇―陳家橋道両側の地区に保持し第三・第九師団を十一月二日までに渡河させ、第一百師団を上海北西側に集結し第三師団に続いて渡河できるよう準備させ、第十



天然の障害となって日本軍を悩ませたクリークも、上海戦線が崩れた後は物資の輸送や交通に大きく役立った。

一師団は南翔方面の敵に対し軍主力の右側を掩護するよう部署した。【戦史叢書380ページ】

十一月十九日、常熟・蘇州・嘉興を結ぶ線で戦闘は一段落したが、『華中で和平』は成らず、日本軍は中支那方面軍を編成して、南京攻略に向かった。

これより先、十一月九日軍司令官は第三師団当面の敵が後退中であることを知り、ただちにこれを追撃して上海市の封鎖を完成しようとした。そして第三師団は主力をもって龍華（上海南西側）に向かい、第九師団は高家湾（上海西方約八キロ）東北地区に向かい追撃させた。

第九師団は、高家湾付近を出発し、主力をもって滬寧鉄道に沿って西進し、十五日崑山に到着した。つづいて十七日から崑山、蘇州間に数線に設備してある特火点陣地を攻撃し、逐次これを突破して十九日蘇州を占領した。【戦史叢書404ページ】

二十日午前十時上海発、社の車で山上映画カメラマンと共に崑山へ向かう。見覚えのある真茹、南翔の古戦場を過ぎて、崑山へ着いたのは午後六時。上海戦線から急進して、南京攻撃に向かう部隊が多く、崑山の民家は日本兵であふれていた。そのとばっちりを受けて、われわれは、上海から乗ってきた車の中で泊まることにした。しかし、近くに軍用犬をつれた一隊がいたため一晩中犬の吠える声で安眠できなかった。

けた駄馬を引いた兵隊が歩いている。「お先に」と声をかけて、先に行かせてもらった。

雨中の行軍だが、途中で引き返すことはできない。ましてや落伍すれば、敗残兵にやられる。ただただ、歩くしかない。護身用の銃もないので、蘇州へ着くことをのみ念じてひたすら歩く。雨中、空腹になると寒さはいっそう身にしみてくる。だが、鉄路の左右には雨宿りにする民家は見あたらない。唯亭鎮あたりか。

こんな時どうしたことか、有蓋貨車が一両、鉄路から落とされているではないか。ここなら雨宿りもできるだろうと入って見ると、先客の兵隊が二人いた。床が傾いていて坐り心地は良くないが、戸の開いた貨車の一隅に陣どると、寒風が来ないだけでも暖い。

兵隊がすでに焚火をしていたので、濡れた手先を温めながら、朝炊いた飯盒の飯の残りを食べることにした。水筒を焚火に近づけてお湯にしたが、なまめくるくて食欲を増すほどには至らない。二人の兵隊は挨拶をして雨の中に出て行った。

やっと粗末な昼食をノドに通し、タバコを一服すると、再び雨の中を歩き出した。

午後になると、歩調のピッチがおくれて来たらしい。午前中に追い抜いた駄馬の兵隊に、逆に追い抜かれてしまった。そうこうするうち雨も小止みになってきて、鉄路の正

十一月二十一日は朝から雨だった。しめった薪で飯盒炊き、副食は牛カンの大和煮。昼食用に飯は半分残して置く。午前九時三十分崑山発、道は京滬線の鉄路。歩き始めてしばらくすると、大粒の雨が北西の風に乘って降り出した。

雨を防ぐ身仕度といっても、薄手のレインコートにレインハットだけ。安物の毛布は九段下で買った軍用デントで包んである。鉄路は道床に割栗石を敷き、その上にメイド・イン・USAの鉄製の枕木。行く先の蘇州はと見ると、雨にかすんでさだかでない。

真っ直に伸びる鉄路の先は、両側に湖。右は隅城東湖、隅城中湖、隅城西湖の三湖が連なり、左に小さい沙湖など。黄土色の水をたたえ、湖面は強風にあおられて波立っている。

北西の風雨は弱まることなく、吹きつづけてきた。寒さは寒し、鉄製の枕木の上は滑って歩行困難。鉄路は広軌のため、歩幅を広くしないと枕木の幅に合わせられない。生理的にスムーズに歩くことが不可能なのだ。では、枕木をはずして歩いたらとも考え、やってみたが、割栗石の敷き詰められた道床は、足許が不安定でいっそう歩行は苦しくなった。

割栗石の外側の路盤は、幸いにも土盛りだったので、ここを歩くことにした。崑山を出てしばらくすると、荷を付



敗れて悔あり

蘇州で初めて撮った中国兵捕虜。少年兵も交じる。



11月24日、蘇州近くの京滬線のレールの上に、重い軍装品をトロッコに載せて、船に竿をさすようにして前進する脇坂部隊の兵士。

面に山波が見える。その上に白塔が一基。近くにいた兵隊に、尋ねると、「寒山寺の塔」だという。何の疑問も抱かず、ロングショットだったが手前に鉄路を入れて一枚撮って、説明に「蘇州近郊、はるかに見えるのは寒山寺の塔」と書いておいた。後になってわかったことだが、寒山寺には塔などは無く、白い塔は「虎丘の斜塔」だったのである。

こんなこともあったが、鉄道線路が暗くなり都市に近づいたので兵隊に確認すると、ここが蘇州だという。午前九時半から午後七時まで、風雨をついて、一日で約十里（四十キロ）を歩きぬいたことになる。この間、日中両軍の交戦にも遭わず無事に蘇州へ着いたが、街の中は真っ暗。市民の生活がないのだから当たり前とは思っても、無気味な感じがした。

真っ暗な道路を当てもなく、「毎日新聞はいるか」と大声で呼びながら歩いた。戸の間から明かりが漏れていると、遠慮なく入りこんで「毎日新聞を知りませんか」と仲間の消息を尋ねた。中には「新聞記者はいたようだよ」とか、「新聞社の旗が見えたよ」とか教えてくれる兵隊もいた。

寒気は、空腹と共に身体にしみてくる。そんな時だった。ガラリと民家の戸が開いて一條の光が道路に流れると、中から「毎日はこちらにいるぞー」と声がした。やれう

れしやと部屋に入ってみると、ロウソクを照明にして、見える顔もある顔も交じって焚火をかこんで四、五人が談笑している。

「メシはどうした」と、その中の一人が尋ねてくれた。「まだ食べていない」と答えると、食べ残りだけど牛水の肉のミソ汁があるという。寒風にいためつけられた身体にとって、温いミソ汁に越したご馳走はなかった。

第九師団を追って崑山から来たと告げると、われわれが崑山から蘇州へ向けて出発した前々日、十九日には第九師団は蘇州を占領したという。すなわち、蘇州入城の写真は撮れなかったが、ニュース映画の川口カメラマンの撮影したフィルムから制作したスチール写真が、入城のシーンをとらえていた。

第九師団が占領した蘇州は平穩そのものだった。わずかに捕虜となった中国兵の写真も撮ったが、中には少年らしい兵も交じっていて、胸がいたむ思いがした。市街の中心からちょっと離れると、水郷らしいたたずまいも見られた。

歩くと、前日の鉄道の歩行のせい、足裏とクルブシが痛む。それでも報恩寺の塔を撮ったり、塔の最上階まで登って市街を見下ろす写真を撮ったりした。傑作は城門を出て京滬線の鉄路に出ると、トロッコの上に兵隊が乗って、ガヤガヤと声高に話し合っている。背囊はトロッコの

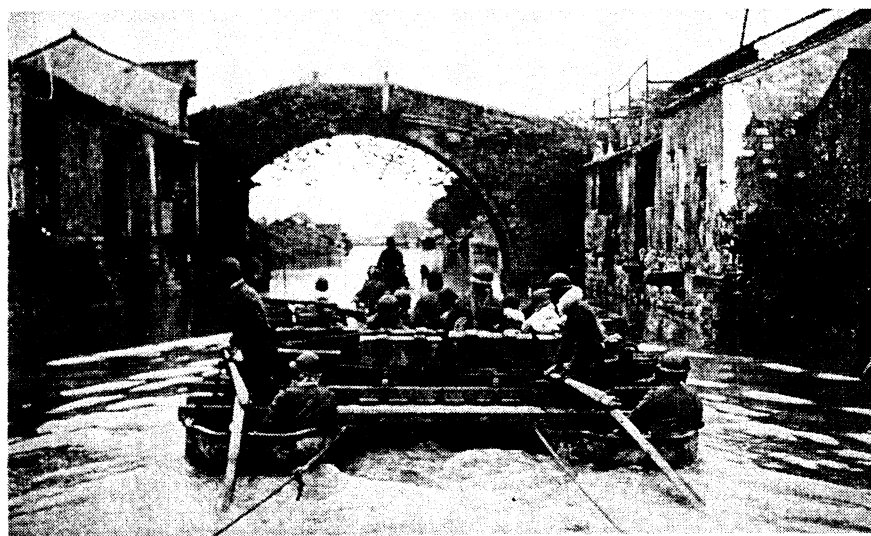


報恩寺の塔を背景に記念撮影。

上に並べて、五人ほどで各々が竹の棒を持っている。舟に竿さすようにして、線路上にトロッコを走らせようというのだった。少しでも身軽になって行軍しようという兵隊の智慧だろう。第九師団脇坂部隊の兵隊だった。

揚子江岸の白茆口から敵前上陸、重藤支隊と第十六師団の常襲攻撃。一度上海へ帰って私は蘇州へ来たが、その間に「東日」写真部の同僚も作戦に参加していた。

石井清君は九月五日東京発の後上海へ着くと、直ちに駆逐艦「いかづち」で杭州湾へ上陸。また、金沢喜雄（秀憲）君も上海へ来たが十三師団と江陰へ。そして、上海に帰ったのちに第九師団・脇坂部隊に従軍した。しかし、私と行き合わないでいた。



蘇州から無錫まで大運河の約50キロを、鉄舟に砲弾など積んで発動艇で曳航した。

南船北馬

この間、私は南京追撃戦では、どうも突出した部隊と一緒にだったようだ。十一月二十三日、前線へ砲弾を補給するため、蘇州から水路を利用して無錫へ向かう隊と同行した。この時の船は鉄舟二隻の上に板を渡したものを二艘、これをさらに船外機を着けた鉄舟で曳航しようというわけである。船上には砲弾のほか信管がいっぱい積みこまれていて、水路の両側の堤の上から射撃されたら、一発命中でオサラバになる危険極まりないものだった。しかも、兩岸の堤に反響してエンジン音は猛烈だ。

午前九時に蘇州を出発して、無錫へ着いたのは午後十時頃、その間約五十キロだった。前線に近かったせいか、彼らの銃砲声が激しく、無名の煉瓦工場を宿舎にしたが、夜半は寒さで安眠できず、朝になって外へ出て見ると地上は真っ白に霜がおりていた。

私と鈴木二郎記者、山上ニュースカメラマンが便乗してきた鉄舟隊は、第九師団の工兵第九聯隊の弾薬輸送部隊だった。

第九師団の無錫進攻がはかどっていたことを知ったので、二十四日には旅団司令部を訪ねて行った。途中に本社の前線本部があって、社の無電班もそこにいた。連絡員に

撮影済みのフィルムをまとめて渡し、前線へ急いだ。この日の午後脇坂部隊（歩兵第三十六聯隊）本部へ行き着いて、泊めてもらうことにした。

そこは製紙工場らしく、煉瓦造りの立派な建物で、流弾の心配もなく安眠できると思った。さらに、この夜は前線では珍しいご馳走にあずかったのであった。

すなわち、脇坂聯隊長のお声がかかりでニワトリのすき焼の夕食だ。どこの部隊にも一芸に秀でた兵隊はいるものだが、小型の七輪に鉄ナベ、さらには醤油に砂糖、小さく切りそろえたトリ肉。「今夜は記者諸君の慰労会だ」という脇坂部隊長をかこんで、副官のサービスでトリナベ会が開かれた。時折り上空に流弾の音はするが、危険が無いとわかってから、安心してご馳走にあずかることができたのである。無錫の最前線にして、この余裕である。

*

中支那方面軍特務部長が十一月二十五日中央に報告した「上海方面ノ支那軍二関スル觀察」によれば、

開戦以来当方面に現れた敵総兵力八三〇師、うち約半分は消耗し現在活躍できるもの四〇万内外と判断す。さらに武器弾薬、糧食の欠乏はなほだしく殊に敗退に伴う士気の阻喪その極に達し、ほとんど戦意を喪失した模様である。政府内部の抗争激化し、また南京放棄を決意している。今後、わが軍が迅速に作戦し南京に

進撃すれば、比較的短時日をもって敵軍主力を崩壊させ得よう。

【戦史叢書420ページ】

上海から進軍する上海派遣軍と、杭州湾から上陸した破竹の勢の第十軍は、共に南京一番乗りを目指していた。

*

しかしこのような軍の動きは、わずかに師団司令部に従軍していた記者たちが知っているだけで、第一線に近いわれわれ記者たちは知るよしもなかった。したがって聯隊に従軍していた記者たちは、聯隊本部と同行するのが最良の方法だった。聯隊長は進軍にはやっていて、ほとんど第一線と同線に出ていたのであった。

新聞記者の戦死

十一月二十五日、午前零時出発。懐中電灯の光でリュックや携行する品々を点検する。聯隊本部の護衛中隊長の「出発」という命令に従って、脇坂聯隊本部の後尾に付いて行動開始。地面は霜で真っ白。月は無かったが、星明かりで空は明るい。空高くオリオンの三ツ星が輝いて、内地の空を思い出した。

行軍はクリークに沿って肅々と進む。朝鮮人の通訳が副官に報告するのを聞くと、水路の対岸を進んでいるのは中

国軍で「そちら側は日本軍がやって来るから、橋があったらこちら側へ来い」と言っているそうだが、この敵を攻撃するかどうか？「相手にしないで無錫へ急ぐ」ことに決まった。午前七時頃、無錫の部落へ入った。

しかし、順調に行ったのはここまでだった。

中国軍の反撃は物すごく、市街戦が展開された。少しでも日本兵の姿を認めればチェコ機銃弾が飛来するが、発射音と弾着音の間の距離が短い。敵陣は間近と知るべきだろう。幅三十メートルの水路をへだてて彼岸には敵、こちらの岸は脇坂部隊本部で、一ヶ中隊の兵隊がいた。幅約二メートルの道路の両側には無人となった民家が立ち並んでいて、この道路上にわれわれ記者団が聯隊旗を捧げ持つ本部の兵隊たちと共に敵の猛射を避けている。民家のはずれは、クリークに面した広場で、ここから船で積み出すはずの煉瓦が山積みになっていた。無錫市街の一隅に突入した脇坂部隊本部は、敵の射撃のすさまじさに動くことができないでいたのである。

この時、読売新聞の渡辺峰雄記者が私に呑気に話しかけてきた。

「東日さん、しばらくは動けませんよ。うまい酒を見つけたから飲みませんか」彼の後について行くと、一軒の民家に入った。すでに毒味がすんでいたのか、渡辺記者のお酌で黄色の透明な液体を水筒の蓋ですすめられた。老酒（紹

興酒）だった。

酒も残り少なくなったので、この包囲攻撃からどうやって脱出できるかを話題にした。そして、チェコ機銃の乱射の間を縫って家並みのはずれの水路に面した広場へ出てみた。一応静かだった対岸の民家に目を移して、敵兵の動きいかにと見回した瞬間だった。

チェコ機銃特有のパンパンとリズム感にあふれた発射音がした。咄嗟に広場に積み上げられていた煉瓦の陰に身をかくす。積まれた煉瓦のへりの、私の顔の高さの部分が、はじけて飛び散る。チェコ機銃弾が命中しているのだ。一諸にいた渡辺記者はどうかとふりかえると、隣りに積み上げられた煉瓦の陰に、私と同じように身を縮めていた。

チェコの弾倉につめられた二十発の機銃弾を射ち終わり、次の弾倉と交換する一瞬のスキ。そのスキをのがさず民家の陰に飛び込んだ。私の後を追うようにして渡辺記者もころげこんできた。

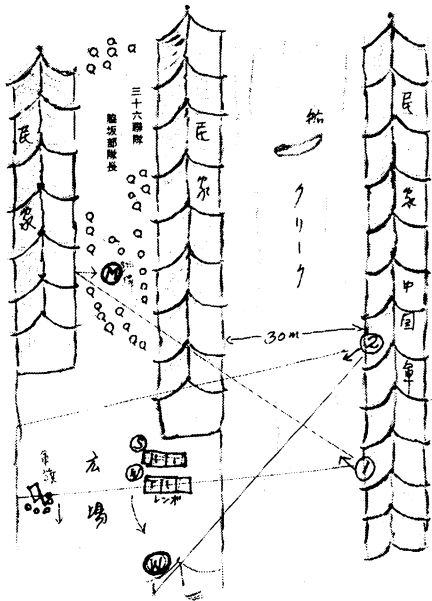
ところがその場所がたいへんだった。

水路に面した民家の屋根をかすめた弾丸は運悪く脇坂聯隊長以下の将兵や記者たちのたむろしている、道路をはさんだもう一列の民家に降り注ぐ。

その中の一弾が跳弾となって、不運にも朝日新聞のニュース映画カメラマン・前田恒君のこめかみに当たってしまったのだ。跳弾が入った部分は血がにじんでいるだけ

最初に中国兵は、クリーク越しに民家の①の地点から射撃。クリークから船積みのため、広場に積まれたレンガの山で、渡辺記者④と佐藤振⑤は死を逃れたが、民家の間の道路上に部隊の兵士にこまれていたアサヒニュースの前田カメラマン⑥は、左側の民家からの跳弾で戦死。中国兵は②に機銃の位置を移動。軍旗が道路から出るとこれを狙って射撃。この時渡辺記者は①からの射撃と思っただのか、広場に面した建物に移動。②の位置から発射されたチェコで戦死した。

昭和十一年十一月三日無錫城外



だったが、前田君は耳から鼻から血を流していた。われわれと東京から一緒だった「東京朝日」写真部の小島忠郎君が、「前田君、前田君」と大声で呼ぶ声がせつなかった。

中国兵が何人いるのか皆目不明だが、ともかくこの敵を排除しなければ前進は不可能である。この時、わが方の重機銃が右前方の敵に射撃を加え、聯隊旗が前進を始めた。それに対する敵の反撃は激しかった。軍旗護衛兵の一人がガクリと膝を落とした。次の瞬間、聯隊旗手が左手をグッと伸ばしてこの兵隊の襟をつかんで民家の陰に引きずりこんだが、その民家のこちら側の壁に、誰か人間が一人もたれかかっていて動かないのだ。服装はと見ると上着は軍服と同じカーキ色だが、鉄帽はかぶっていない。

よく見ると先ほどまで、私と一緒に行動していた渡辺記者なのだ。どうしてそんな場所で倒れているのか。私にとつては大きな驚きだったが、見ると水路の対岸の中国軍は、初めの頃と位置を変更している。すなわち、はじめに私と渡辺記者が射たれたのは右前方からだった。

しかし、渡辺記者が次に民家の陰から出た時、チェコ機銃の発射音が聞こえ、渡辺記者は咄嗟に左側の民家の壁に駆けこんで身をかくしたのである。

ところが渡辺記者にとっては不幸なことに、敵兵は銃座を左側に移動していたのだ。そのために渡辺記者は、全身を敵側に暴露してしまったのだらう。

脇坂部隊長から前方の敵を攻撃する命令が出された。軽機分隊の五名ほどの兵隊が、道路を駆け足で走って行った。その中にわが社のニュース映画カメラマン・山上君の姿が見えた。

時間的には十分くらいだったろうか、山上君が顔をこわばらせて帰って来て、息をはずませながら次のように語ってくれた。

すなわち軽機を持った五、六人の兵隊と一諸に敵弾を避けながら、民家に沿った道路を進んだ。民家が途切れたところで道路が左折しており、クリークにかかった橋が見えた。この橋の向こうに中国軍が拠点をかまえているはずだ、これを排除すれば友軍の行動が安全になる。

中国軍にさとりえないよう、クリークにかかった橋をそと渡った。民家が途切れていて、橋のたもとは広場になっている。民家に沿って道路が通じていたので、足音を忍ばせ民家の壁に身をすりよせて右折した。ところが、その曲がり角を中国兵が民家に沿って左折しようとしていたのだ。したがって日中両軍の兵が正面衝突してしまった。突然、予期せぬ敵兵と顔をつき合せてしまい、その結果はお互いに「ワッ！」と奇声を発して、逃げ帰ってしまうという顛末になった。

「角でワッ！」。山上カメラマンの笑うに笑えぬ体験談を聞くと、われわれ記者も兵隊も、交戦中の緊張からほんの

聯隊長は賤ヶ岳七本槍の後裔

脇坂部隊は第九師団（金沢）の歩兵第三十六聯隊（鯖江）、バリバリの現役兵の集団であった。したがって軍律もきびしく、頼りがいのある兵隊たちだった。

その兵隊さんが自慢気に私たちに語るのには、「うちの聯隊長は賤ヶ岳七本槍の子孫だよ」ということだった。

すなわち、織田信長亡き後の天下分け目の戦いは、賤ヶ岳の合戦として知られている。羽柴秀吉と柴田勝家両雄が雌雄を決した戦場は、琵琶湖と余吾湖のほぼ中間にある四二メートルの急峻な山であった。戦いが最高潮に達した時、秀吉は床几回りの小姓たちに、「お前たちも行って手柄を立てよ」と命令した。そして加藤虎之助、福島市松、脇坂基内、片桐助作、糟谷助右衛門、平野権平、加藤孫六らが奮戦。

この時、秀吉の眼前で一番槍を合わせ、比類ない戦い振りの褒賞として、基内は三千石の食禄を与えられた。

かくして賤ヶ岳の戦いで戦功をたてた七人の勇士をたたえて、賤ヶ岳七本槍と呼ばれるようになった。

歩兵三十六聯隊長脇坂次郎大佐の名は、部隊の将兵にとって賤ヶ岳七本槍の脇坂基内の子孫として、誇らしく認識されたのであった。そしてその武勇に負けじと、脇坂部

ひと時の間のがれる思いがしたのだが、中国軍の包囲から脱するにはまだまだ時間がかかったのである。

水路をへだてて中国兵のいるとおぼしい箇所へ向けて、ダンダンと力強いわが重機関銃の猛烈な射撃が始まると、さすがの中国兵の抵抗も止んだ。

「出発」の号令が下され、聯隊長を先頭に行軍が再開された。戦死した「朝日」の前田ニュースカメラマンのことが気になったので行ってみると、小島忠郎カメラマンが、前田君の戦死体の傍らに座りこんでいる。

「忠さん、出かけるよ。どうする？」と尋ねると、「このまま前田君のそばにいるよ」という返事だった。

中国兵が再びここへ来ないかと心配だったが、小島君のきっぱりした返事に心残りだが別れて行くことにした。こうして、脇坂部隊長を先頭に敵中を突破することになったのである。

この時、「東日」の記者グループは、ニュース映画の山上カメラマン、後から追いついた「東日」社会部の鈴木二郎記者、そして私、佐藤振壽だった。

〔注〕 本資料集『菅原歩兵第三十六聯隊乙副官日記』に、この戦闘の詳細が記録されているので参照された。

隊の将兵もまた、鯖江聯隊の名を上海や南京の戦場で高めようと努めたのであった。

*

本牧亭の寄席で聞く講談では、すべての武士は勇者で、敵をバツバツとなぎ倒す。しかし、日中戦争の戦場、無錫では、中国軍は頑強に抵抗し、ために部隊の進撃も、破竹の勢とはいかなかった。

私の従軍メモには、「朝日」と「読売」のジャーナリストが戦死した十一月二十五日には無錫入城は成らず、この夜は無錫南方で露営と記されている。

露営と書いたが、実は快適な夜だった。すなわち地上に薄っぺらの毛布を敷いて寝るのではなく、工場の建物の一室のベッドで寝られたからである。しかしベッドは一台しかなかったのので、ニュースカメラマンの山上君と一緒に寝た。男二人が一つのベッドで寝たというと、何やら不都合に聞こえるが、ベッドがただ一つしかなかったからである。

快適だったのは、履き続けた靴を脱ぎ足先を解放してやることのできたせいである。足の指を広げて動かしてやると、身体の一部が自由になっただけだというのに、その解放感はいくらでもない。つらかった従軍の中で、忘れることのできない幸福の一瞬だった。

ところでベッドで快適な夜を過ごし、朝寝坊をしてし

無錫西門から出る協坂部隊の兵士。彼らの頭上には、蒋介石の「新生活運動」の標語が――。



まった二十六日の朝は、午前九時に起床したものの昨夜来敗残兵の攻撃が激しくて、聯隊本部宿舍の建物の外へ出られない。人影が見えるとチェコ機銃の弾丸が集中する。そのために一日中身動きができない。ただ時間だけが過ぎて行く。前線からの報告によるとこの日午後五時頃、協坂部隊第一線が無錫南門に突入したという。

翌二十七日は午前六時起床。飯盒炊き後、朝食をすませて七時半に出発。部隊長と共に南門から無錫へ入城。市内を行進中、道路の両側の民家が火事となり、そのために



運良く獣医に助けられて、病馬廠で治療を受けられる傷病馬もいたが……。

道路の中央を部隊は駆け足で通過。われわれも兵隊の間に挿まるようにして走った。民家から立ち昇る火焰は激しかったが、衣服などに燃え移ることはなかった。

兵隊たちは銃に着剣して歩武堂々と西門を通過した。後ろ姿でなく、彼らの勇壮な姿を撮るために西門に先行した。振り返って歩調をとりながら行進する部隊を撮ると、城門の扉の上部に横書きの文字が大書されているのが見えた。

それは「不嫖」（売春婦を買うな）「不賭」（賭博をするな）「不吃鴉片煙」（阿片を吸うな）という、蒋介石が提唱した「新生活運動」の標語だったのである。

悲しい戦場の軍馬

戦場では数多くの働く軍馬を見た。上海の陣地戦では、重い荷物を輓き悪路とたたかう軍馬は、大きな戦力となっていた。

常設師団における軍馬の在営期間は長くて十年。五歳か六歳で入隊して、一年半ぐらいで調教を終え、騎兵聯隊、砲兵聯隊、輜重兵聯隊などで活躍することになる。

ところで、私の従軍した第百一師団というのは、常設師団である第一師団（東京）が北満警備のため、留守中の東京で編成された特設師団である。

したがって、第百一師団の兵隊には現役兵はほとんどいない。軍馬もご多分にもれず、現役のものは少なかった。

農村で農耕用に飼われていた馬が、兵と同じように召集され、戦場で苦勞を重ねたのであった。元の飼主から離される時、飼主は、軍隊に入った後の馬取扱者の名前だけでも、教えてくれとせがんだりした。そして、その馬と鉄道の駅で別れる時、好物の人参や飴玉を持って来て、家族ぐるみで見送った。出征兵士を送るのと全く同じで、飼主たちの馬に対する愛情が察せられるのであった。

しかし、一度戦線に出ると、馬にも過酷な軍務が課せられた。

兵隊の膝まで沈むような悪路は、軍馬にとっても難行苦行であった。たとえば野砲の砲車は六頭で引いたが、轍は泥に埋まってなかなか動かない。

そんな場合、馬に乗っている兵隊は「前へー」と大声で叱咤する。すると六頭の馬の中の二、三頭は、満身の力で踏んばり、前へ進もうとする。しかし軍馬としての訓練が不十分な徴用されて日の浅い馬は、号令に対する反応がにぶい。したがって、隣りの馬は前進しようとしているのに、ボンヤリ立ったままだいる。すると馭者の兵隊が、容赦なく鞭を振るう。空気を裂く鞭のピシリという音を聞くと、私は何か物悲しくなったものである。

上海の戦局も峠を越して、退却する中国軍を追って南京

めざして行軍が始まった頃だった。われわれ従軍記者も各社ごとに一団となって、兵隊たちの後を追って行軍に参加した。中国兵も上海戦線の場合のように、むやみとチェコ機銃を撃ってこない。江南の秋の空は澄んで、気温も汗ばむくらいだった。昼食のため畦道に腰を据えて飯盒の蓋をとった時だ。

どこからともなく裸馬が一頭、少々おぼつかない足どりで近づいて来た。よく見ると、酷使されたのか鞍を置く部分にむごたらしく肉が露出している。こうなると、戦場では捨てられてしまう場合が多い。

どうしてわれわれにすり寄って来たのだろうか。傷ついた馬はかつての飼主に通じる人間を求め、それがたまたま従軍記者だったにすぎなかったのだろう。

むごたらしい鞍傷を手当てしてくれるわけでもないし、空腹を満たしてくれる馬糧を与えてくれるわけでもない。そうした軍馬の苦しみにこたえるものを、われわれは持ち合せていなかった。ただ「元気でいろよ」と別れの声をかけて、そこを離れたのだった。戦場ならではの、悲しい別れである。物言わぬ動物だけに、後ろ髪をひかれる別れでもあった。涙を流しているかのように見える馬の眼は、哀れをもよおすに充分なものがあった。

たまには獣医が倒れた馬にリンゲル液などを注射してやっている場面にも出くわしたが、獣医の数は軍馬に対し

て充分ではなかった。現在と異なり機械力が乏しい時代には、馬の牽引力は、軍隊に欠かせないものであったのである。

名ばかりのワシントン・ホテル

無錫に滞在中、常熟攻撃部隊に従軍していた社の同僚と連絡がついた。連絡員が来たので、それまでに撮影したフィルムを渡した。

無錫は平和をとりもどしたが、二十八日夜は、城内に日本兵が多勢入城して来て、どこも日本兵、日本兵だった。

おかげで治安は良くなったが、山上カメラマンと二人の宿舎を取りはぐれてしまった。やっとのことで、泊まったのはワシントン・ホテル。名のみは舶来だが、ベッドのある部屋は先客にとられてしまった。その結果、屋根の下では寝られることになったが、ベッドも椅子も無い広間。

持参したペラペラの毛布が一枚で、板の床にじかに寝るのである。肩、背骨、腰などがゴツゴツと当たる。疲れているので眠りは得られたが、安眠というわけにはいかず、そのうえ空腹のため寒気が身にしみた。

二十九日は乏しい朝食もそこそこに、九時半頃無錫を出発、常州へ向かって行軍する兵隊について行く。

無錫の協坂部隊本部で中国兵の猛攻を受けた時、民家の

側溝に足を踏み入れ身体をひねり左膝を捻挫したようだ。そのために歩き出すと左膝が痛む。

ビッコを引きながら行くと、大きな道路に出た。その時、うれしや、社の車が来たのでこれに乗りこむ。地



完全軍装は重い、現役兵の行軍スピードは速い。11月29日常州に入城する第16師団の片桐部隊。

獄に仏。スピードを上げてしばらく行くと、行軍中の兵隊の列に追い付いた。常州が落ちたという。

これはおちおちしていられない。運転手をばげまして常州へ着くと、どうやら一番乗りらしい。さらに進んで行くと、先方から豆戦車が走って来たので太平禪寺の塔を背景にして撮る。

キャタピラーの音とエンジンの音を響かせて、自動車より速く走っている。聞くと、独立軽装甲車第二中隊で、後日南京で隊長の藤田実彦少佐には親しくして頂いた。

筆者が同行して常州へ入城した部隊は、第十六師団の片桐部隊だった。この片桐部隊の将校二人の写真を撮ったのだが、この写真が後になって大きな社会問題となった。

“百人斬り”の二将校を撮る

社会部の浅海一男記者が、無錫から同行していた。その浅海記者が常州城門の側の旅館へ筆者を呼びに来た。

「将校さん二人の写真を撮ってくれないか。彼らはタバコを切らしているの、タバコもあげてくれないか」というのである。

上海を出発する時、フィルムや食糧などの入ったリュックのすき間へ「ルビー・クイーン」の紙包を約百個入れておいた。タバコを喫いたい時、リュックをさぐると、すぐ

筆者が撮ったこの一枚写真が、戦後大問題となった。



百人斬り競争の兩將校

南京攻略が近いのか、中国兵の退却が速いのか、日本軍は前進する毎日である。新しく城市を占領すると、その城壁の上やそれとわかる建物などをバックに、万歳をする日本兵を撮ってきた。ここを占領しましたよ、という証拠になるからである。

一個や二個の紙包が見つかった。このことを浅海記者は知っていたので、二人の将校から取材するとき、筆者のタバコを当てにしたらしい。

タバコを進呈して、将校から何を聞き出すのか。私は浅海記者と将校の話に聞き耳を立てた。将校の一人は大隊副官の野田毅少尉、もう一人は歩兵砲小隊長の向井敏明少尉。なんとここから南京入城までに、どちらが先に中国兵百人を斬るかというすごい話題である。

二人の将校の話聞いていて、納得のいかないところがあった。同業の誰かが優れた写真を撮った場合、私はフィ

ルムの種類は？ レンズの絞りは？ シャッター速度は？と、根掘り葉掘りデータを聞きたくなくなる。それを聞いてはじめて納得できるのだ。

これから南京へ着くまでに、中国兵百人を斬るというのだが、誰がその数を確認するのが不明だ。そうすると正確に百人も斬ったという事実も、証明できない。この点を二人の将校に質すと、次のような返事が返って来た。

野田少尉の場合、向井少尉の当番兵が、野田少尉が斬った人数を確認する。向井少尉の場合は野田少尉の当番兵が、向井少尉が斬った人数を確認するというのである。

いちおう納得できたが、しかし、実際いつ白兵戦になって、中国兵を斬るのか、腑に落ちなかった。

すなわち、通常の戦闘では、敵兵に接近することはほとんど無い。白兵戦はほとんど無いとさえ言えるのである。日本刀を振るって中国兵を斬ることのできるのは、稀に起きる白兵戦の場合に限られるのではなからうか。

その場合、当然戦場は乱戦になるわけである。その時、大隊副官・野田少尉は大隊長を助け、その命令を各中隊に伝えなければならない重要な任務がある。

他方、歩兵砲の小隊長である向井少尉は、歩兵砲の射撃を指揮しなければならない。野田少尉にしても向井少尉にしても、以上のような状況の中でどうやって白刃を振るって、中国兵を斬ることができるのか、大きな疑問が残って

いた。

こんないきさつがあったが、筆者が撮った二人の少尉の写真は、浅海記者の書いた「百人斬り競争」という見出しの付いた記事と共に、紙面に大きく掲載されたのであった。

常州で両少尉に一度、会っただけなので、忘れかけていたところ、南京の手前で浅海記者に会った時、「あの二人はまだ競争をやっとるよ、タバコをもう一度用立ててくれないか」と、タバコを無心されたのであった。

戦後になって浅海記者に会った時、

「市ヶ谷の軍事法廷の検事から呼び出しがあったけれど、君の所へは来なかったか」という。浅海記者は「百人斬り競争」の記事を書いたというので、中国側検事から当時のことを聞かれたという。筆者にはそうしたことはなかったが、後になって違った所からアプローチがあった。

すなわち両少尉の写真の説明文の中に、撮影者として筆者の名前が出ていたので、それを『週刊新潮』の記者が発見し、毎日新聞の人事部に筆者の住所を照会して、自宅へ訪ねて来た。

訪問の目的は、野田、向井少尉について筆者の知る事実を教えてほしいということであった。

新聞に出た記事が問題になって、終戦後帰国していた両少尉は南京の軍事法廷で裁判を受け、銃殺の刑を執行されたそうである。太平洋戦争も無事に過ごしたというのに、

思わぬことになった両少尉に哀悼の念を禁じ得ない。

その後、向井少尉の娘さんと文通することになったが、たびたび南京を訪れ、亡き父上を偲んでいられるようであった。

常州城内でひと休み

南京攻略が近いのか、中国兵の退却が速いのか、日本軍は前進する毎日である。新しく城市を占領すると、その城壁の上やそれとわかる建物などをバックに、万歳をする日本兵を撮ってきた。ここを占領しましたよ、という証拠になるからである。

内地の読者はその新聞写真を見て、部隊名が出ていれば、郷土部隊の活躍を喜び合うのだろう。しかし、そうした写真ばかり撮っている筆者は、内心これでよいのだろうか、不満であった。

また、第一線近くで部隊を追っていると、目前に展開される戦闘に、目を引きつけられる。しかし、それを撮影しようとしても、自分の身の安全をまず考えなくてはならない。そんなことから、つい占領した城市の城壁上の万歳の写真になってしまうが、カメラマンとして内心忸怩たるものは残る。

十一月三十日は常州城内の旅館で休息の日だった。取材

記者は各々が目ざす部隊へ行って戦況を聞いて来る。部隊に新しい動きがあれば、それに対応した行動をとらなければならぬ。

無電技師は旅館の横にアンテナを立て、定時に上海と通信していた。どうもわれわれが従軍している第十六師団は、上海―南京道で先頭を切っているようだ。

部隊は次の目的地丹陽へ向かい、常州城内には日本兵の姿がめっきり減ってきた。したがって、撮影の対象は少なかった。

追撃が急だったせいか、日本兵が豚を一頭仕留めたが、銃剣で股の部分だけを削いで行ってしまった。見るとまだ食用になる部分がある。筆者はハンチングナイフで丹念に切り取った。

社会部、地方部の記者たちが、司令部、聯隊本部などで取材して、夕方には帰って来る。それから無電で送稿する原稿にペンを走らせるのに忙しい。カメラマンの筆者は、こうした時はもう夕方写真撮れないから、食事当番を引き受ける。

全部で七、八个ある飯盒のうち、三個で米を炊き上げると、九食分ある。残りの飯盒は豚汁だ。塩を持っていたので、これで味つけをした。さらに民家の台所にはナベが残っていたので、カン詰めのバターで、豚肉をいためてこれがお菜だ。青い野菜が欲しいところだが、前線で腹を満

たして、ベッドの上で寝られるだけでも幸いというべきだろう。

無電技師はロウソクの灯の下で、懸命に無電機のキーをたたいている。送信原稿が多いせいか、十二時近くになって、トン・ツターの音は絶えなかった。

十一月三十日 常州ヨリ丹陽ニ向フ部隊ノ先頭ハ四・一五奔牛鎮附近ニ達ス、敵ハ丹陽、金壇ヲ焼キツツアリ。『飯沼日記』

無錫へ進撃

十一月三十日、筆者は常州で休養していた。顧みると呉淞クリークの激戦、白茆口の敵前上陸など。九月二十五日呉淞上陸以来、よくどこまで来たものかと思った。

第一線で、撮影取材が続けてきたが、他社の同業カメラマンの作品の出来映えが気になる。「朝日」に負けていないか、「読売」に負けていないかが、いつも頭の片隅にあった。しかし、前線本部の無電技師が上海と交信して、私にはお叱りが無かったようだから、まあまあということにしろしい。そう思い込んで、次の仕事に精を出すことにした。

ところで、第一百師団の従軍記者を振り出しに、上海から戦線を渡り歩いて来たが、考えてみるとジブシー・カメラマンと、自嘲せざるをえない。

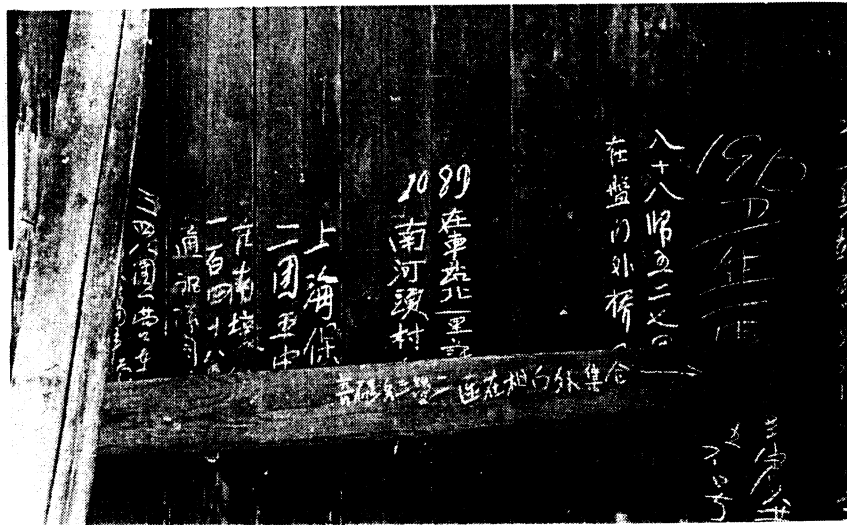
十一月下旬における作戦経過

上海派遣軍は、呉福陣地突破後、悪路を冒して追撃を続行し、第十三師団は二十八日青陽鎮を占領し、重藤支隊は常熟西方地区を追撃して二十七日江陰―無錫道に進出し同道を遮断したのち、軍命令により無錫北方地区に集結した。第十六、第十一師団及び第九師団の主力は無錫に前進し、二十三日から無錫東方既陣地による敵を攻撃し、二十五日同地を占領した。

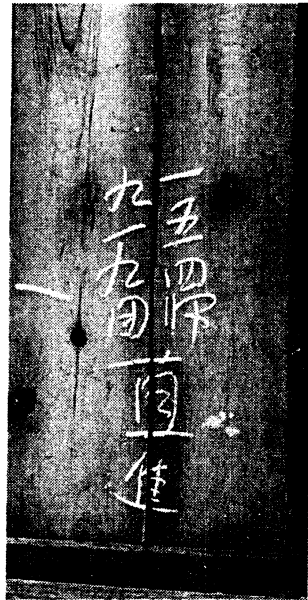
これより先、軍司令官は、敵は無錫から依然常州及びその西方に向かい退却中であることを知り、二十二日、第十六、第十一師団にたいし、その追撃隊をもって常州に追撃するよう命じ、次いで二十五日、第九師団にたいし一部をもって太湖の水上機動を行い、主力をもって常州に追撃するよう、また第十一師団主力にたいし無錫付近に集結するよう命じた。(第十一師団主力と重藤支隊は他に転用されるため、その後、上海に集結した)

各師団追撃隊は滬寧鉄道、江南大運河、太湖及び太湖北岸道路に沿って追撃し、二十九日常州に進出した。『戦史叢書420ページ』

十一月二十七日、脇坂部隊と無錫へ入城した時、洋食のメニューで言えば定食ともいう写真を撮った。例の城門の上での兵隊たちの万歳、中国風の建物の前を行進する部隊などがそれだ。それから、私物のライカで、なんの気なしに民家の板壁に、何やら文字が書かれているのを撮った。中国軍部隊が仲間知らずの伝言のようなものだった。



無錫で日本軍と戦った中国軍は精鋭部隊がいたようだが、日本軍の攻撃に耐えきれず各方面に撤退して行ったようだ。



「一五四師
九一九團直進」
と、読むことができる。

丹陽陷落、城外の宿

こんな写真は、戦後まで長くネガのまま放置されていたのであったが、この写真は慌ただしい中国軍の退却を示しているようだ。

その中のいくつかを拡大してみると――

「八十八師五二七団？」
在盤門外橋……」

「1089 在車站（駅）北一里許……」
南河頭村……」
「上海保……二團五中……」
在南……」
一百四十八……通訊隊司」
「奇」兵三營二團在相白外集合→」
他の写真は、

十一月一日には呉淞戦線で取材していたが、それから一カ月。ここ常州で、とうとう十二月を迎えることとなった。上海からの車が来た。前線が動き出したようなので常州を出発した。ここ常州で二日も静養できたので、足の痛みも軽くなったようだ。浅海記者も一緒だったが、車で奔牛鎮まで行った。次の目的地は丹陽だが、ひとまず車を降りる。歩き出すと道は江南大運河に沿った土手の細道で、第十六師団大野部隊の後について行く。目的地丹陽では火災が発生しているのか、黒煙が秋空をよごすかのように上っていた。

後からわかったことだが、十二月一日の『飯沼日記』には、情けないことが書かれていた。

……尚兵器関係ニテハ黄銅ノ輸入出来サルヲ以テ打殺薬莖ヲ還送セサレハ砲彈ヲ送り得ス。小銃、銃剣ハ国内ノ分既ニ六万ノ不足之又還送スヘシ。砲彈ハ何トシテモ之レ以上製作出来スト木村少将ノ話ナリト。（木村少将は兵器局長兼大本営野戦兵器長官）

大運河には戦争のさなかにもジャンク（民船）が航行しているが、方向は丹陽方面でなぜ交戦地へ近づくのか疑問だった。土堤の道幅は狭く一列縦隊で歩いていった時だった。後方から騎馬の一隊がやって来た。

先頭の騎兵が何やら言葉を発すると、筆者と共に一列になつて歩いていった兵隊が「片側に寄れ！」の号令で道路側に寄り立ち止まった。

後でわかったことだが、この騎兵は師団長護衛兵で、後に続く騎馬の将校は第十六師団長・中島中将だった。師団長はわれわれには目もくれず、黒煙の上っている丹陽の方角へ走り去った。

十二月一日 晴天 常州発

午後一時出発奔牛鎮ニ至リ之ヨリ鎮江本道ト別シテ旧道ニ入ル為ニ自動車ヲ捨テ、乗馬ニテ呂城鎮ニ至ル。午後六時稍前に到着ス、草場少将ト会シ是迄ノ追撃隊ノ行動報告ヲ受ク。

一、先キ二午後十一時半呂城鎮占領ノ報告アリシモ其ハ第一線陣地ノ占領ニシテ次ニ第二線アリ。之ガ占領ハ遂ニ夕刻ニ達ス。敵ハ迫撃砲ヲ有シ相当広正面ニ亘リ頑強ニ抵抗セリト云フ。

依リテ本隊先頭ノ9 i（片桐聯隊）ノ一大隊ヲ草場少将ヘ第十八旅団長ノ指揮下ニ待機セシムルコトトシ

一、此夜侍従武官（後藤中佐）、草場少将ト共ニ呂城鎮ニ宿営ス。

【中島日記】

クリーク沿いの細道を大野部隊について呂城鎮までやって来たのだが足の痛みがひどくなり、草場旅団本部近くの部隊に、泊まることにした。

「十二月二日、六時起床、朝食後出発。舟に便乗したりして、丹陽手前二キロの地点に上陸、草場旅団泊まり。銃声盛んであったが六時頃静まる。落城したためである。」

これはこの日の筆者のメモ書きである。実状はというと、早起きして朝食というところから始まる。他の記者の飯盒二個。自分用が一個合計三個の飯盒で炊きをするわけである。内訳は、米といっても現地地米も混入しているが、それを飯盒二個。他の一個はブタ汁。中国人のボーイがどこからか採ってきた青い葉が浮かんでいる。

江南大運河を行く民間人のジャンクに、数人の日本兵と一緒に乗る。中国人がたくみに櫓を動かしてジャンクは進む。完全軍装の兵隊も足が疲れているので、われわれと同じようにしばしの間は、ラクチンができるわけである。

丹陽に向かってジャンクは進んだが、銃声が激しくなったので、丹陽まであと二キロという地点で上陸した。そこに日本兵がいたので部隊名を尋ねると、第十六師団の草場旅団と教えてくれた。

前線近くなって泊まるのは危険なので旅団司令部の近くに泊まることにした。チェコ機銃の音、わが軍の機関銃の音など、激しく撃ち合う音も午後六時頃になると、静かに

江南大運河の土堤のへりに細い道が。火災の煙が流れるあたり、丹陽へと続いていた。



二日大運河を渡る歩兵部隊
佐藤本特務員撮影—本報電報社

猛火を衝いて丹陽に進撃



江南大運河は戦場にもかかわらず、住民たちの舟が往来していた。

なってきた。丹陽は落城したということ。今夜は安眠できそう。

十二月二日 16Dノ先頭ハ九・三〇丹陽東南約五キロニ、9Dノ先頭ハ八・三〇金壇東方約五キロニ達ス、方面軍ヨリ南京攻撃ノ命令来ル。『飯沼日記』

戦局は動き始めた。『中島第十六師団長日記』にそれがよく出ている。

十二月二日 晴 呂城鎮、王村西部部落、丹陽ヨリ一K半

一、午前九時三十分呂城鎮ヲ発足セリ。

一、草場部隊ハ一中隊ヲ正面ヨリ向ハシメ一大隊ヲ右ヨリ。

一、二大隊（一中欠）ヲ左ヨリ丹陽西北及西南端ニ向ツテ迂回セシメ、正面ハ砲兵ノ到着ヲ待ツテ突進セシメントセシガ、砲兵ハ奔牛鎮以西道路ナク殆ンド畑中ヲ通過シ然モ諸処ニ地隙様ノ下水溝アリテ工兵ノ作業ヲ要スルガ為前進意ノ如クナラズ、大隊長ハ意ヲ決シテ門橋ヲ以テ砲軍ヲ推進スルニ決シタリ（但砲二門ノミ）。

一、正面ノ突入ヲ故ラニ少シク控ヘシメ両迂回隊ノ進出ヲ待ツコトヲ命ジタルガ、此両迂回隊ハ午後五時頃各目的地ニ達シ敵ハ全ク包圍ノ中ニ在リタルモ、夕刻退却スル能ハザルヲ以テ恐ラクハ夜ニ入りテ退却スルモノト判断セリ。『中島日記』

十二月三日 筆者のメモ。

「快晴 早朝起床 丹陽城に入る。正午、後続部隊（本社の記者団）と連絡とれる。中正門外新亜旅社泊まり」

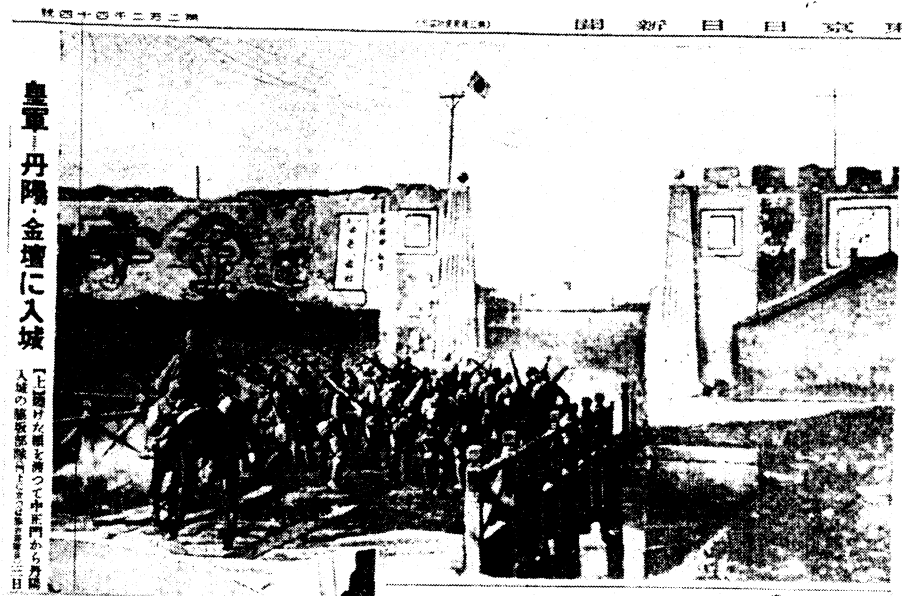
前夜の静けさで安眠できた。早々と起きて朝食、といっても何か腹につめこむだけで終わってしまう。敵の攻撃もなかった。歩兵第九聯隊（片桐部隊）について丹陽城へ入った。昨夜の内に敵は退却したのか、はげしい交戦はなかったようだ。

中正門から城内へ入ったが、門前のクリークにかかった橋は焼けてはいても、燃え尽きたわけではなかった。日本兵は悠々と渡っていた。中正門外の中国人旅館は部屋数が多かったので、今夜はここをわが社の宿舎にきめた。

無電の安田技師によって送信用アンテナが立てられ、今夜記者たちの書いた原稿を送信する準備もでき上がった。夕食は例のごとくブタ汁。塩味を少し濃くして、おかずと汁の兼用にした。

日没前の明るいうちに宿舎の周囲を歩き回った。駐車場のような広場があって、そこには日本軍の中戦車が、たくさん止まっていた。入口には中国語で「汽车站」と出ていた。宿舎のそばに戦車隊がいれば、敵襲もないだろうと安心した。

ところが、その安心感も一瞬吹き飛んでしまった。戦車隊は轟々とエンジンの音、キャタピラーの音を残して、ど



皇軍 丹陽 金壇に入城

「上野村を通過して中正門から丹陽入城の撮影部隊」

丹陽城に入る片桐部隊、夜は城門を閉めたので、門外に宿泊した我々はビクビクもの。

静かな丹陽、だが前線は動く

十二月四日筆者の従軍メモは、

「快晴 四日丹陽滞在、市中何事もない」

しかし実情は少々違っていたようだ。すなわち、いつ何事が起こっても、軍と行動を共にしなくてはならない。したがって、朝は早く起きて飯盒炊さん・朝食をすませておく。そんな時だった。中国人の使用人があわてて教えに来た。



12月4日、丹陽滞在中。早朝、中国人従者の知らせにより撮影。後続の片桐部隊が小型ジャンク数十隻を運んで、支流のクリークを丹陽へ入って来た。

こかへ出勤して行ってしまったのである。

さらに中正門の衛兵だろう、兵隊が宿舎へやって来た。そして「夜は、中正門の扉を閉めます。門の後ろにいますから、何かあったら知らせして下さい」と言い残して行ってしまった。そうすると、もしも中国兵が襲って来たら、城外の宿舎に泊まっているわれわれはイチコロである。仕方がないので、中国兵の分捕り小銃に弾丸をこめて部屋の隅に立てかけておいた。

城門の外の一軒家にポツンと灯火の明かりがもれていた。敵襲の目標にされるから、灯火管制を厳重にしようと話し合った。しかし交信時間が来れば、無電の安田技師は交信しなければならぬ。ロウソクの灯で記者の原稿を見ながら、無電機の手をたたかなければならぬのだから。ともかく灯火管制を第一にして夜を過ごしたのであった。

外気は初冬の寒気を帯びて来た。家の中で寝られるということは、満腹の食事に次ぐ幸福である。しかも、固いけれど寝台で足を伸ばして眠れるのである。しかし、靴は脱いでもすぐはけるように、リュックはすぐ背負えるように準備怠りなく。そして寝台に体を横たえたと、行軍の疲れが出て忽ち睡りに落ちてしまうのだった。

それは後続の友軍部隊が、小型のジャンクに分乗してやって来たのだ。江南大運河の分流だろうか、兩岸に樹木が生えている比較的狭いクリークに、小型ジャンクに日の丸の旗を付け列をなして行くところだった。撮影済みの写真の説明には「片桐部隊」とした。

ここ丹陽は、途中の道路が悪くて本社の自動車が前線近くまで来られない。われわれの食糧は不足していたが、筆者の撮影用のフィルムは充分にあった。撮影済みのフィルムは徒歩で来た連絡員に渡し済みだった。

丹陽城内を歩き回ったが、疲れているのか、休んでいる兵隊が多かった。それでも南京へ出発する兵隊は、城外に出て行ったのか、城内は静かだった。

十二月四日

……16D先頭ハ・四〇倪塘（句容東方約十五キロ）、9D先頭九・〇〇西王崗（天王寺東方二キロ）、114Dハ十軍九・〇〇張家山（溧水東方約十三キロ）ニ在リ各前面敵無キ如シ。

午後四・〇〇頃9Dノ先頭ハ句容南方約七キロニ聖橋ニ達シ師団主力ハ之ニ跟随（こんずい）シアリ。16Dハ朝来殆ト前進シアラス。

16Dモ夕刻先頭ヲ以テ句容東方約六キロメートル太平庄ニ進出セリ。
『飯沼日記』

丹陽城内は静かだったが、前線は南京へ向けて動いていたのであった。

上海―南京街道を句容で右折

本社の自動車がやっと丹陽へ来た。十二月五日の筆者のメモによると、

「この車で上海―南京道路を句容に向って走った。しばらくすると行軍中の部隊に追いついた。」

ここで聞くと、これから先は中国軍と交戦中とのこととて車を降りることにした。この部隊は片桐部隊の第三大隊で、大隊長は富山少佐。この部隊について行くことにした。行軍のコースは句容へは行かないで右折。しばらく行くと民家が数棟あって、今夜はここに泊まるそうだ。地名は賈崗里鎮とか。」

われわれ従軍記者たちは、大隊本部の一隅に宿泊することになった。

民家の土間の焚火で暖をとりながら、富山大隊長とよもやま話をする。しばらくすると何中隊だったか、大隊本部に新聞記者がいると聞いて、ボタ餅を作って持ってきてくれた。アンコの甘味もすっかり忘れてしまっていたので、大隊長と賞味させてもらった。

この夜は敵襲の心配もなく、稲ワラを土間に敷いて毛布にくるまり安眠ができたが、いざという時の用心に靴を脱ぐことができなかったのは残念。無錫でいためた膝がまた

痛み出した。屋外の気温はますます低下してきた。

十二月五日

9 D、16 D 共本朝九時頃句容ノ手前四キロ程ニ在リ。朝香宮殿下上海派遣軍司令官トナラセラル。

9 Dノ先頭ハ四・〇〇頃既ニ南京東南方約五里ニ達シ前方ニハ二、三百ノ敵兵敗走ス。

方面軍ヨリ南京入城ハ歴史的ニ誇ルヘキ事柄ナレハトノ理由ニテ各師団ノ個々ニ入城スルヲ禁スル統制線ヲ示シ来ル。

【飯沼日記】

十二月五日 晴天 丹陽―祝家辺

(1) 草場部隊ハ正面ニ歩兵一中隊ト砲兵ヲ残置シテ他ヲ以テ右マハリ句容―湯水鎮道方面、句容ノ敵ノ側背ニ迂回セリ。

之ガ為句容ニ入ル能ハズシテ祝家辺ニ止ル。

(2) 此夜草場部隊トノ連絡絶エ状況不明トナル。

(3) 此頃ヨリ草場部隊ハ成可迂回迂回スルモ常ニ正面ト連繫ナキ迂回ニシテ、句容ノ直前ニハ僅ニ歩兵一部隊夫モ句容攻撃任務トイフヨリモ砲兵掩護ノ任務ナリ。是程ノ迂回行動ハ是非共統制スルノ要アリ。【中島師団長日記】

中島師団長は草場旅団の行動に、ご不満のようだが、第十六師団後方参謀『歩兵少佐・木佐木久日記』は、

十二月五日 於祝家辺句容東方八軒

二晩ニシテハ名残り惜シイ丹陽デアッタ。大キナ事務室ノ隣リ自分ノ部屋ニ懐シサヲ覚エルト直グニ御別レデアル。午前中野戦

ならない。

ここ賈崗里では民家の台所を使えることになり、大きな中国の鍋で固めの雑炊を作った。南京米が半分以上でブタ肉、青菜などを入れ、塩味が程よく利いていた。

富山大隊の後尾について行軍。道は一筋で樹木の無いゆるやかな草原を行く。南京東方の磨盤山系の一部で、標高は高くないが、高原の趣きがあった。ここでは敵との交戦も無く、ピクニックを思わせる行軍だった。

行くことしばし十二時頃、草場旅団司令部に追い付いた。旅団長ともなれば、威厳を示して高圧的な態度をとる人もいるが、草場旅団に着いて副官が紹介してくれた人物は、先入感を裏切るような軍人だった。

初めは老頭児の（年をとった）召集兵かと思った。服が将校服ではなくて、兵隊の冬服だったからだ。そのうえ肩章も付けてなかった。草場少将は身体の大きな人で、われわれに對してもいたわりの言葉をかけ、何だか急に親近感を覚えたのであった。

旅団本部と行を共にしているうちに、午後三時頃、中国軍の広い歩兵学校に着いた。そして夜は歩兵学校近く、李家村？とかいう所に露営することになった。旅団司令部が近くだから、敵襲には安心して眠れた。

この日は戦局に大した変化が無かったようだ。第十六師団長『中島日記』の記述は。

南京東方の高原を行く

十二月六日。五日の夜は賈崗里の富山大隊で快適な一夜を過ごした。今日は当然、部隊と一緒に行軍だ。その前に毎朝のことながら、飯盒に昼と夕の食事を準備しなければ

倉庫デ色々協議ノ上、酒井大尉ト共ニ主力ノ後ヲ追フ。北風殊ノ外寒シ。北支戦線ニ比ブレバ、有難イ事ナガラ、最早十二月、寒サモ厳シイノガ当リ前デ、近頃ハ朝ノ氷モ相当厚イ。逐次部隊ヲ追ヒ越シ乍ラ祝家辺ニ至リ泊ス。追撃隊ハ本道方面ニハ僅カニ一中隊ヲ充テ主力ハ句容北方ヨリ迂迴ス。可ナリ、正面ヨリノ戦闘ハ避ケテ包圍迂迴ヲ尚ブ。句容東方地区ニ於ケル敵ノ抵抗ハ、大ナル兵力ニハアラザルモ、トーチカニ依レル、実ニ立派ナモノダ。

祝家辺ノ宿ハ、豚小屋ノ様ナ所ダツタガ、藁ノ臥床ニ、焚火デ、其ノ上毛布アツテ暖カッタ。普通ノ家ニ入ッテ、火ナシノ寒イ目ニ合フヨリ、コンナ露営ノ様ナ方法ガ却テ良イ。

派遣軍参謀長の『飯沼日記』、第十六師団『中島師団長日記』そして、第十六師団後方参謀の『木佐木日記』を紹介したが、いずれも各人の個性が強く出ている。

同じ敵を攻めているのだが、それぞれ考え方の違いがあって、民間人の眼でみると、なるほど戦争の記録とはこうしたものかと思わせられる。

十二月六日 祝家迎↓句容

前夜句容ヨリ歩兵中隊侵入シ之ヲ占領シタルモノト知り且又草場部隊ト連二連絡シテ前面ノ状況ヲ確メン為、先ツ句容ニ向ッテ前進ス。

一、句容ノ橋梁破壊セラレアリ、且又其北方本道上ニ敵ノ小機銃アル為、一方砲兵ノ追及ナキ為之ガ突撃ハ損傷大ナレバ、砲兵ノ一部ニ推進ヲ命ジテ射撃セシメタルモ、此夜ノ前進見込立タザレバ本夜句容ニ宿営ルコトナレリ。

一、此夜草場部隊トノ連絡確実ナラズ。

佐々木部隊ノ一部ハ山中ニ入りタルラシ。【中島日記】

十二月七日、筆者は草場旅団司令部で一夜を明かしたが、もう一度歩兵学校へ行った。何か写真になるものが、ありはしないかと思っただけである。その後は再び旅団司令部について行軍する。

途中、民家で小休止すると、民家の外で兵隊がブタを殺した。股のあたりの肉をそぎ取るのだが、銃剣では思うようには取れない。取り残しが多かったので、筆者はハンチング・ナイフで残った分をいただいた。初冬を迎え温度は低くなっている、腐る心配がないから飯盒につめこむ。

行軍で部隊が梅塘の部落に近づいた時、右側の高地から射撃を受けた。チェコ機銃のような軽ろやかな発射音でないから、重機銃だったのだろう。

という戦果をあげていた。

先行した歩兵はここでもブタを一頭ものにしていた。ブタはキークーと悲鳴を上げていた。肉が固まって残っていたので、ナイフでそぎ取るとその度に悲鳴を上げる。この声が敵陣に聞こえるのだろうか、その度に銃弾が飛んで来る。これは迷惑なのでブタの気管をハンチング・ナイフで切断して発声を止めてやった

十二月七日 快晴 屋外ノ手洗ノ水ニハ五、六分ノ氷張ル、第一線ノ労苦思ヒヤラル。【飯沼日記】

筆者は、昨冬スキーに行った時に着た、妹が編んだハイネックのセーターをとり出して着た。

十二月七日

句容西方ノ敵ハ退却シタ。司令部ハ午前九時前、句容ヲ出発シタ。野戦重砲が進路ヲ塞イデ妨害スル事甚シイ。歩九ハ片桐部隊モ、歩二〇ハ大野部隊モ夫々戦上手ト云フカ、正面ヲ避ケテ迂回々々トヤツテキル。御蔭テ本道方面ニハ、一兵モナシト云フ形ダ。昼カラノ前進ノ際ハ、師団司令部ハ歩兵ノ尖兵ト同時前進ダ。果シテ顔家村ニ来タトキ、敵ノ弾丸ヲ受ケタ。歩兵が散開スル砲兵が進出スル、丸ヲ遭遇戦ノ様ダ。準備セル陣地ニ対スル戦闘法デハナイ。無計画ナ、無統制ナ戦闘ダ。敵弾ガ猛烈ニ来テ、司令部モ何等仕事が出来ナイ。ドウカト思フ。

歩いていたのは、少々高さのある畦道のような所だったので、あわてて低い地面へ飛び降りて敵弾を避けた。その時、筆者は夢中だったので、折り重なった下の兵隊は誰だかわからない。ともかく兵隊服だから、行軍中の兵隊の人だとばかり思っていた。

敵の射撃が止んだのでやれやれと立ち上がって、筆者の下敷きになっていた兵隊にあやまると、なんとしたことか旅団長・草場少将その人だったのである。

筆者はペコペコ頭を下げて失礼をお詫びしたが、旅団長は意に介するところなく、再び始まった行軍の列にもどられた。

この時筆者は足が痛むので、リュックは中国人の従者に背負わせていた。そしてリュックに鉄帽をつけていたのだが、この銃撃を受けた後、従者の姿が見えなかったのを探したら、筆者の鉄帽をチャッカリとかぶっていた。

われわれに射撃を加えた敵陣は高地に在り距離も相当あったので砲撃しか対抗する手段はなかったが、それはかなえられなかった。やっと銃撃が小止みとなったので、梅塘の部落にたどりついた。粗末な民家だったが、弾丸を避けることはできた。

ここも兵隊たちがわれわれに先行していた。彼らは歩兵第二十聯隊（大野部隊）だったが、後日の調べによると九日朝まで中国軍と激戦を交わした後、中国軍の軍旗を奪う

一、師団長が負傷シテ、軍医部長ガ駈ケ着ケテ叱ラレタ事。

一、師団長ガ後ロヘ下ツタ後、吾々モ司令部ノ位置ヘ移ツタ。其ノ立チ上ツテ一分モ経タナイ内ニ、其ノ位置ヘ迫撃砲弾ガ二発落チタ。命拾ヒデアル。

迫撃砲弾ガ身辺ニ落下スル。負傷者ガ出ル。師団長ハ左大腿部ノ貫通銃創、ト云フノデ吃驚シタ。ヤッバリ位置ノ選定ハ考ヘネバナラヌ。砲兵学校内ニ泊ス。（中略）

今日ハ本道方面ハ湯水鎮ノ正面ニ於テ抵抗ヲ受ケシモ、右側支隊、迫撃隊ハ、速ク敵ノ後方ニ進出シテキル。敵様トシテノ左右ノ連絡ハ、極メテ悪イ。【木佐木久日記】

南京手前の“温泉”

上海から従軍した記者やカメラマンたちにとっては、今やどの部隊が南京城一番乗りをするかが大きな課題となっていた。したがって、南京に近い戦線に陣どって、ニュースを待っていたのだった。

記者の原稿を前線から送信するため、無電技師が送信機を持ってわれわれの後からついてきた。その場所が前線基地となり、上海からの情報で他の師団に従軍している仲間のことを知った。金沢君は第九師団に、第十軍には中島君、第六師団には松尾さんがついていた。これらの情報を総合すると、私の従軍している第十六師団の草場旅団は、

いい線を行っているようだった。

十二月八日 快晴

初冬の太陽はやさしく暖い。小春日和だ。敵にも暖かいのだらう。そんな気分になれるのは、自分の身が安全な時だけだ。われわれは梅塘で民家へ入ったままで動けない。ここは二、三軒の民家しかない集落だが、敵はわれわれのいることを知っているようだ。

民家の外をすこしでも動くと、チェコ機銃の弾丸が飛んでくる。南京はあまり遠くないと知っているのに、動きがとれないのは苦しい。しかし、米は不足ぎみだが、副食物の豚肉がたくさんあるから、気持ちは豊かだ。リュックの中に入れてきたカン入りのバター。大ビンの食卓塩。塩がこれほど大切だったとは知らなかったで、誰が入れてくれたのか感謝。

この日は一日中、梅塘から動かなかった。

9 D、16 D 共各当面ノ敵ヲ撃破シ進撃ニ移ル……『飯沼日記』
前夜 33 i 〈野田部隊〉ノ第一大隊ハ東方ヨリ、9 i 〈片桐部隊〉ノ第一大隊ハ北方ヨリ湯水鎮ニ突入シテ之ヲ占領シタリ。

『中島師団長日記』

しかし、中島師団長は負傷していたので、入湯できなかったことを残念がっていた。

十二月八日 於湯水鎮

支那軍ノ誇リトスル砲兵学校内ニ、我が師団ト砲兵旅団司令部トガ泊ッテキル。此ノ朝午前八時頃、俄然敵ノ迫撃砲弾ガ続ケザマニ数発落下、炸裂シタ。十数名ノ負傷者ト、七頭ノ死馬ヲ出シタ。校庭ニ落チタノダカラ、吾等ノ位置カラ約五十米、壯観ノ極ミデアル。……中略

昨日敵ノ抵抗シタルコンクリートノトーチカラ見乍ら、湯水鎮ニ入ツタ。温泉ニ浸ル。敵彈雨下ノ処デ温泉ニ戦塵ヲ洗フトハ、奇怪千万ノ感ガシテナラヌ、御蔭デ真黒ナ顔ヤ手足ガ綺麗ニナツタ。

『木佐木日記』

湯水鎮という地名は地図の上で知っていたが、温泉が湧いていることなど全く初耳だった。

十二月九日 快晴

兵隊は時と所とを問わず命令に従って行動しなければならない。しかし、筆者のような民間人に軍の命令は及ばない。とはいってもこの戦場で自分の生命を守るためには、軍の命令に従うというより、兵隊の行動に追従することが最良だ。いざとなれば、兵隊が保護してくれるからだ。

この日は旅団司令部は八時半頃出発した。それに遅れないように、飯盒炊さんもそこそこに後を追った。

行く手は最後の難関？磨盤山越えである。従者がどこかでチャンチュー（中国酒）を仕込んで来た。寝る時にこの

やっと南京へあと一里というところで露宮。やれやれと割り当てられた民家に入った。

梅塘では、大野部隊が九日朝まで中国軍と激戦を交わしていた。部隊が敵の軍旗を奪取したというので、その軍旗を中心にした写真を撮ることができた。しかし、痛む膝を

チャンチューを手拭にヒタヒタにしみ込ませる。これを痛む左膝に濕布としてあてがうと、翌朝は痛みがやわらぐのであった。したがって部隊と行動する場合、初め先頭の兵隊について行っても、膝の痛みのためにだんだんと遅れてしまふのは致し方がなかった。

ゆるやかに起伏する高原地帯の路は一本。部隊は行列縦隊、隊列は長く伸びていた。途中で、

「通伝。その場で小休止」

という声が前方から響いてくると、筆者にとっては助け舟が来たようだ。そして兵隊でもないのに大声を上げて「通伝」と怒鳴り、リュックを背負ったまま道のかたわらにどたりと倒れこむ。ほんのしばらくは感じなかった小休止が終わって、「出発！」という号令が通伝で来ると、うらみがましく立ち上がるのだった。

同行したのは歩兵第二十聯隊（大野部隊）だが、さすが現役兵だけあって重い背囊を負い、歩兵銃をかつぎ、鉄帽をかぶって完全軍装の足元も軽やかに高原地帯を行軍する。

痛む左膝をかばいながら部隊の後を必死に追うが、少しずつ遅れてしまう。背中のリュックの重さがこたえて来たので、中国人の従者に背負わせて行く。隊列にとり残されないよう足を動かしているのだが、終わり頃は筆者の足ではなかなか部隊の行進に追いつかない。



行軍中小休止の号令がかかると、腹の上にカメラを2台のせて……。

いたわりつつ、大野部隊の将兵の所在へ行き着くまではつ
らなかった。磨盤山系を越えて南京へ突入しようとする部隊
の写真だけに、撮りそこねるわけにいなかったのである。

十二月九日 於憤頭

温泉宿ノ朝ト謂フベキ所ダガ、朝ノ三時頃カラ電話デ起サレ
タ。

第一線が追撃シテキル報告デアル。首都南京ヲ去ル、東方五里
ノ地点ニアル温泉ダカラ東京ニ於ケル熱海、伊豆ヨリ結構ノ地点
ダガ、ソレニ比シテハ、文字通りノ寒村デアル。吾等ノ泊ッタ家
ハ曾テ専田参謀ガ、蒋介石ニ招待サレタ事ノアル家ダト云フ。世
ノ中ハ皮肉ナモノデアル、戦闘司令所ヲ憤頭西方二進メル。亦敵
弾下ニ於ケル戦闘司令所デアル。憤頭西方約一キロノ本道両側ニ
アル高地ヲ攻撃スル歩三三ノ野田部隊ノ一、歩九ノ片桐部隊ノ
一ノ戦闘ヲ後方ヨリ観ル。トーチカニ在ル敵ノ執拗ナル抵抗、
炸裂スル野砲弾、追撃砲弾、斜面ヲ登ル歩兵ノ前進、顛頂ヲ占領
スル勝鬨ト、日ノ丸ノ国旗、幕進スル戦車隊、等々バノラマヲ見
ル様ナ感じガシタ。左大隊ハ午後二時頃、右大隊ハ午後三時半頃
遂ニ占領サレタ。『木佐木日記』

兵隊さん「いっまでおいで」

上海から南京へ通じる幹線道路を、私の従軍した第十六

師団の大野部隊は、句容の手前で右折した。ここからは、ま
ず上り坂の道を行軍する。ゆるやかに丘陵が起伏している
が、このあたりは磨盤山系の一部で、日本軍の南京への行
軍をさえぎるように続いていた。

途中、梅塘の部落で泊まる。ここの部落は谷合いのよう
な所で、部落の農家が七、八十坪ほどの池を囲んでいた。
兵隊たちは、割り当てられた民家へ入って、装具を下ろす
と炊事などの仕事のない兵隊は、池のまわりに集まって来
た。

初冬の空はより青く、午後の斜陽が射す民家の裏は、暖
かい日だまりになっていた。比較的早い午後だったので、
私もひと休みしていた時、兵隊たちの歓声が聞こえて来
た。何事かと、声がする方へ行ってみると池の中心にアヒ
ルが十羽ほど、ガーガーと声を出して泳いでいる。三八銃
を持った兵隊もいて、このアヒルを射とうとしている。こ
れを押し止めた兵隊が、「射しても、どうやってアヒルを
持って来るか」という。

長い竹竿を持って来て、アヒルを追い立てようとして
も、向こう側へ逃げて行く。

向こうへ回ってこちら側へと追っても、あらぬ方へ逃げ
て兵隊の方へは来ない。早く言えば「こちらへおいで！」
アヒルを中心に、わらべ遊びをやっているようだ。

しばらく見ていたが、自分たちの夕食を作らなければな



大野部隊は梅塘で激戦の後、中国軍の軍旗を奪取。

らないのに気付いて、見物は中止した。

カメラマンは日が暮れると撮影はできない。記者たちは
その日の取材した記事を書く。それを無線係が打電するわ
けで、カメラマンがいちばん暇になる。こうしたことから
炊事当番の役目がまわってくるのである。

しばらくは戦争という殺伐とした現実を逃れて、アヒル
を追う兵隊に、ひとときの童心に返った姿を見出すことが
できたのであった。

脇坂部隊に先を越された

十二月十日

南京東方の高原状の磨盤山系を越えて、なだらかに起伏
する丘陵地帯を過ぎると平地に出た。そこには向尚村の村
落があって、そのたたずまいは平時ののどかな生活を想像
できた。しかし、現実銃声がはげしく、屋外へは出られ
ない。

最前線の部隊と共に行動していると、眼前に展開される
彼我の交戦だけで、同僚の従軍している部隊がどうなっ
ているかなど、全くわからない。

それでも紫金山麓を行軍しているということは、それだ
け南京に近づいていることになる。それが証拠には中国軍
の抵抗がはげしくなっている。

大野部隊と行軍中、突如として敵の射撃を受けた。チェコ機銃の発射音が初冬の空にこだました。するとすかさず兵隊たちは、敵陣のよく見える小高い稜線に三々五々駆け上がり、立射、膝射など、おのおの射撃の姿勢をとって、射撃を開始した。

この時筆者の位置と小高い稜線の間は、七十メートルくらいあっただろうか。ピントを無限遠に合せると、すかさずシャッターを切った。兵隊の射撃姿勢は撮られているが、大きく引き伸ばさないと使えないかもしれないと思っていたところ、この写真は、「壮烈！ 南京城攻略戦第一報」という大見出しで、十二月十一日発行の「東京日日」の写真号外になっていた。

野戦で日本兵が部隊として攻撃している場面を、筆者としては初めて目撃した。野戦とはどんなものか知らなかっただけに、好機にめぐまれたと思っている。

十二月十日

一、本朝本道両側正面部隊 9 i 〈片桐部隊〉ノ一大ト 33 i 〈野田部隊〉ノ一ハ上麒麟門附近ノ敵ヲ駆逐シテ馬群西側高地ノ敵ノ頑強ナル抵抗ヲ突破シ、又 33 i 〈野田部隊〉ノ主力ハ紫金山東南角ヨリ稜線伝ニテ逐次頂上線ニ沿フテ前進シタルガ、頂上線各所ニハ掩蓋 MG 〈重機〉座アリトノ報アリ
二、20 i 〈大野部隊〉ノ左翼ハ比較的前進シテ陸軍兵営ヲ占領シアルモ此方面砲兵ノ協力意ノ如クナラズ。【中島日記】

報一第戦略攻城京南ノ烈壯



東京日日新聞

號外

この號外は本紙に
出されません

筆者が磨磬山を行軍中敵の銃撃で民家にカン詰めになれていた所へ、連絡員が勇敢にも追いついて来てくれ、無線機を持つわが社の前線本部が近くにあることを知らせてくれたので、十六師団の草場旅団司令部に従って南京へ向かっていった筆者は、大野部隊と行動を共にしたのである。

この日、十二月十日には早くも第九師団が南京城の光華門に突入していたのであった。その協坂部隊には本社写真部の仲間、金沢君が従軍している。第九師団に先を越されて、実は内心くやしい思いがしていた。

「東京日日新聞」の昭和十二年十二月十日の号外は、大見出しで、

「東南の城門盡く占拠

皇軍、南京市街に突入」

〔大校場十日発同盟〕「十日午後五時協坂部隊の先頭部隊は光華門を占領し城壁高く日章旗を樹てつづいて城内に突入御道街に戦果を拡張中」

〔上海十日発至急報同盟〕「わが総攻撃に南京城東側及び南側の各城門は夕刻何れもわが手中に帰した。」

しかし、私たちは、内地の新聞報道ぶりなどは全くわからない。ところが後日、当時の新聞を見て驚いた。一部の新聞であるが、ありもしない戦況を、よくもまあ書きも書いたもの、あいた口がふさがらなかった。

その新聞社名と特派員名は、割愛させていただく。

〇〇新聞十二月八日

〔紫金山にて〇〇特派員七日発至急報〕「南京を指呼の間に望み、協坂、人見、伊佐、富士井の各部隊へいづれも第九師団」は夜を徹して猛進を続け先頭部隊は既に紫金山に到着、七日未明朝靄を衝いて紫金山々頂に翻翻と日章旗を翻へした、山頂より見渡せば南京城は足下に横はり今や事実上わが手中に帰した」というのである。

十二月八日、九日の『飯沼日記』に紫金山頂に日章旗が翻ったという文字は無い。

十二月九日 9 Dノ旅団司令部ハ高橋門ニ到着砲兵モ展開シアルモ砲撃ハ為シアラズ、第一線ハ正二飛行場ヲ占領セントスル距離ニ在リ。16 Dノ第一線ハ麒麟門附近ニ於テ頑強ニ抵抗スル敵ヲ攻撃中【飯沼日記】

戦場でキジを射つ

南京近くなってきたからである。野宿でなく民家の屋根の下だった。急に寒くなった初冬の夜も、眠りにつく前にじつくりと焚火で暖をとっていたので快適な睡眠だった。遠く砲声が聞こえるだけで、けたたましいチェコ機銃の音も、鳴らなかつたせいだろう。

朝の光が、土壁に反射し、ぼんやりとした明るさが部屋の中にただよってくると、朝が来たと感じた。今日一日の生活が始まるという実感が、身体に迫ってくる。まず朝食の炊事をしなくてはと思うが、それより先にすませなければならぬことがあった。その日の生活で第一にすませること、すなわち排便である。

民家の入口から外へ出る、初冬の冷気が顔に触れるとキリッと身体が引き締まる。明るくなった東の空の下に、陵線が黒々とカーブを描いて左右に広がっている。そこらにあった棒きれを持って、陵線を目がけて足を運んでいく。ここらあたりと場所を選んで小さな穴を掘る。おもむろにズボンのベルトをゆるめ、ボタンをはずす。寒くなってきたので重ね着のウールのズボン下をずり下げ、越中フンドシをはずして、尻を外気に当てる腰を下ろす。目の前は枯れた棉の木が、陵線を渡ってきた風にゆれる。

ここでアクション第一に移る。人によって違うかもしれないが、大便の前に小便をする人もいる。私はこのグルーブだった。うっかり、トイレの場所を上り坂に選ぶと、小便の流れが自分の靴の下に來たりする。そのためにあらかじめ、靴の下へ来ないように、持参した棒きれで小便の流れを、安全圏へ誘導しておかなければならない。

これまでに基本的な動作だが、脱糞の場合には、更に慎重な動作が必要となる。すなわち糞は、行軍中は十分な水

これは伝聞だが、キジを射ちに行つて、男性自身に流弾を当てられた兵隊がいたそう。後遺症はどうなったか、聞きもした。

紫金山麓に野火の帯

十二月十一日 午前三時起床。前線で変化があったのか、出発時が六時と予告された。夜明け前だが急いで飯盒炊さんの後、朝食をとり予定時刻より早く出発する。夜明け前の山道の足下は暗くて見えない。前を行く兵隊の背囊を目印にして歩く。

進行方向右側は紫金山の山並みが続き、山頂は夜明けの空に黒々と見える。敵は紫金山脈の山頂あたりから、重機関銃らしい発射音を立てて射ってくる。しかし、闇夜に鉄砲という諺どおり、わが方の姿は全く見えないのだから、当たる心配はまずない。

この敵に対して山麓を行くわが軍が放った野火が横一列になって、チロチロと炎をあげて山頂へ燃え広がって行く。しかもその野火の線は、二線、三線もあった。写真を撮りたかったが、三脚が無かったこと、部隊と行動を共にしなければならなかったので、あきらめた。

この夜行軍中、隣りにいた兵隊から面白い話を聞かされた。「居眠りしながら行軍するには、前を行く軍馬のシッ

分を摂取していないため、固形化する傾向が強い。したがって地面の上に排出された物は、うずたかくつもる。そのままだと、高くなって肛門に接してしまう。そのためにかがんだまま、順次に前進して肛門付近に接触する危険を、避ける必要がある。

このユーモアのある排便のテクニクは、ベテランの下士官から教えられたものだった。戦場でも日課の始まりはこの排便という日常的な行動でスタートする。この日課を終えて身仕度する時、立ち上がってあちこちを見回すと同じように日課を終え棉畑の中に立ち上がった兵隊が、一人、二人と数えられる。

それらの兵隊はとよく見ると、全員が同じ方角に向かって立っている。すなわち太陽が昇る方角だ。人間の本能だろうが、同じ方向に向かっているということは、排便というひと仕事を終えて、身仕度をする時、お互いの大事なところを眺められないですむというわけである。あられもない姿を見せようと、見られた方はテレてるだらうし、こちらも何やら悪いことをしたような気になる。

ちなみにどこからはやり出したかは不明だが、排便に出かける時は用心のため仲間知らせて行く。それは「キジ射ちに行ってくる」というのだ。約一ヶ月の前線生活だったが、誰もがこの山男の言葉を挨拶代わりにして、野戦のトイレに通ったものだった。



12月9日、鷹盤山脈を越えると、南京近しと足どりも軽くなる。

ポをつかんで行くがよい」とか。

夜も白々と明ける頃になると、それまで平らだった道も上り坂になった。われわれの姿が山の上の敵兵に見えたのだろうか、銃弾が飛んで来た。行く手には山中には珍しく鉄筋コンクリートの四階建てのビルがあって、まるでわれわれを迎えてくれるようだった。これ幸いとその建物に駆け込んだが、それは中山文化教育館、地名は東凹子だった。ここへは草場旅団司令部に続いて到着した。旅団司令部と一緒に戦局全般のこともわかり、殊に南京陥落報道にも便利だろうという読みもあった。

建物の中を調べて見ると、孫文に関する資料や中山陵の建設に使われた瓦などが、ガラスケースの中に陳列されていた。

本社の顔ぶれは、筆者とニュース映画カメラマンの神原政雄君。ほかに「京都日の出新聞」の記者と写真班、さらに三、四名で合計八名だった。

草場少将の旅団司令部は、二部屋くらいへでた大きな部屋で、旅団司令部のスタッフが詰めていた。

建物は迫撃砲弾にも大丈夫だが、夜の寒気が空腹と共に身に迫って来た。ともかく寒い、寝てしまえば寒さも空腹も忘れられるだろう。何か目ぼしい物はないだろうかと探したら、有難いことに組立式のベッドが見つかった。これこれと早速組み立てて寝ることにする。

子義雄氏のほかに、珍客とも言える社友の大宅壮一さんがいた。大宅さんとは東京で親しくしていたので、懐かしさが旧に倍した思いだった。

この前線本部には、神原君の留守宅で男児誕生のニュースが待ちかまえていたので、戦場で聞く朗報に神原君の感激も一入だったようだ。だが、ここ五顆松の本社の前線本部に長居は無用。草場旅団司令部にいくては、南京城攻略戦の推移はわからない。大宅さんも伴って山の手の中山文化教育館へもどることにした。

大宅さんが雑誌『改造』の昭和十三年二月号に「香港から南京入城」というルポを書いている。その「第一信」は専ら香港の生活だが、「第一信」の終わりから「第二信」は専ら南京陥落の描写である。

筆者に関係のある部分を抜粋してみる。

「……敵は頑強な抵抗をつづけてゐるらしい。今日（十二日）も入城は駄目かなと危ぶまれる。

夜があけると、やはり早く起きて中山陵に近い馬群の方へ行って来た志村君が帰ってきて、向ふへ行けば戦況がよくわかるから行って見ないかとすすめる。時々弾がくるが、気をつけて行けば大丈夫だといふ。

その日の夕方近く、東日カメラ班の佐藤、映画班の神原の両君がやってきた。別の部隊について前線に出て、幾日

しかし、南京へのわが軍の攻撃もはげしくなり、砲弾の炸裂音や飛行機の爆音や爆弾の炸裂音が、中山陵近くの東凹子まで響いて来て、安眠どころではなくなった。起き出して、飯盒の底に残った飯に湯をそそいで胃袋へ流しこむ。

大宅壮一氏前線に来る

十二月十二日、中山文化教育館の外では朝から激しい銃声、砲声。そんななかを、元南京支局長だった志村冬雄さんがひょこりと訪ねて来た。志村情報によれば、われわれは南京にいちばん近い所まで来ている。次は杭州湾上陸部隊、すなわち第十軍に近い。その次が第九師団、そして第十六師団という順だそう。

目下待機中で中山門一番乗りをめざしているが、食糧不足で困っていると訴えると、ここから山を下って南京街道へ出たところ、五顆松に本社の前線本部があるから、そこへ案内してくれると言う。

途中チェコ機銃の流弾が飛んで来たが、神原ニュース映画カメラマンと一緒に志村さんについて山を下った。筆者も神原君も磨盤山脈越えの時に撮影したフィルムを持っているので、一刻も早くそれを届けたかったからである。

本社の前線本部へ着いたら、そこには社会部デスクの金



12月12日、志村氏と毎日新聞社の前線本部で。左から東日社会部副部長・金子氏。一人おいて志村氏、筆者、右端が大宅壮一氏。

も連絡がきれてゐたのである。佐藤君とは、東京で特に親しくしてゐる間柄で、こんなところで会ふと、まるで十年も別れてゐた旧知にあつたやうに懐しいものだ。

同君たちの話によると、彼等の今あるところは、中山陵と谷を一つ隔てたところの丘陵に建つてゐる中央（山）文化教育館という四階建の建物で、中には豪奢なソファなどがある、こんな豚くさい民家とは比べものにならないといふ。それに第一、戦争がすぐ眼の前に行はれてゐて、見るのに双眼鏡も何も要らないさうだ。（中略）

向ふには各社の特派員十人ばかりゐるが、食糧に困つてゐるといふので、上海からトラックで来た日本米、いろいろな罐詰類などをしこたまリュックに入れて、僕たちは出た。

目的の中央（山）文化教育館は、その朝、迫撃砲に脅かされたところよりもまだ大部先で、途中砲声の小やみになつた頃を見計らひ、身をかがめ、這ひながら走るやうにして、やっと無事に到着した。しかし小便するにも外へ出てすることは禁物だと教へられた。（中略）

われわれがリュックを解くと、他社の人たちはワァーッと歓声をあげて喜んだ。さっそく手わけして晩餐の仕度にかかったが、僕だけはお客さまだといふので、どうしても手伝へなかつた。（中略）

僕だけではどうしても眠れない。もう一度屋上へ出てみる

と、戦争の中心が中山陵から中山門に移つて、非常な激戦らしく、耳をすますと、砲銃声や工兵の爆破作業の音に混つて突撃の声まで聞えるやうな気がする。冬らしくない軟か味のある月光が、あたり一面を包んで、何ともいへない美しい、いや厳肅な光景である。『大宅ルポ』

部屋続きの草場旅団司令部から副官がやつて来て、日本酒をわけてくださるという。とりあえず飯盒一個を差し出したところ、もう一個出すように言われた。飯盒二個分の日本酒を振る舞つてもらつたのである。

日本酒と満腹で歌が出た。当時はやりの「露宮の歌」で、日本酒の酔いも加わり、歌声も大きく合唱になつてしまつた。すると旅団司令部の副官が来て、通信が聞きとれないから歌を止めてくれないかと言われ恐縮したが、歌をやめたとたん、屋外の銃砲声が聞こえて来て、中山門の陥落近しい感じがした。

十二月十二日

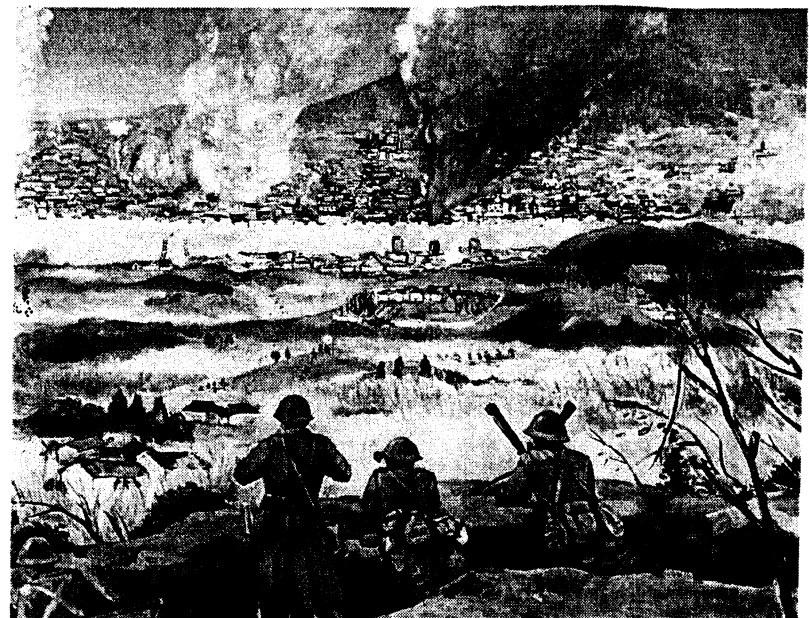
一、早朝前面ノ状況ヲ確メタルニ概シテ次ノ如シ。

佐々木支隊ハ堯化門ヲ越ヘテ西進中、33 i へ野田部隊へハ第一峯東側安（鞍）部ニ在リ。

片桐部隊ハ依然中山陵ノ手前ニ在リ。彼曰ク中山陵ハ極メテ堅固ニシテ攻撃困難。然ルニ20 i へ大野部隊へハ大ニ進出シタレバ9 i へ片桐部隊へノ右大隊ヲ左ニ移シタリトイフ。他人ノ



揮デ角力ヲ取ラントスルモノ、是デハ師団ノ企図スル左翼隊右方面ヨリ戦局ヲ進展セシムルコトナシアリシニ、然ルニ片桐ハ難ヲ避ケテ易ニツクノ処置ヲ取レリ。
大隊長ハ兩名共勇敢ナルモ彼聯隊ノ長ノ為活躍ノ余地ナシト



雨花台から望む南京城攻撃（絵）。
（柳川軍支那事变記念写真帖より）